

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 245

岡山城二の丸跡

警察本部庁舎整備事業に伴う発掘調査

2018

岡山県教育委員会



1 堀 1 (南東から)

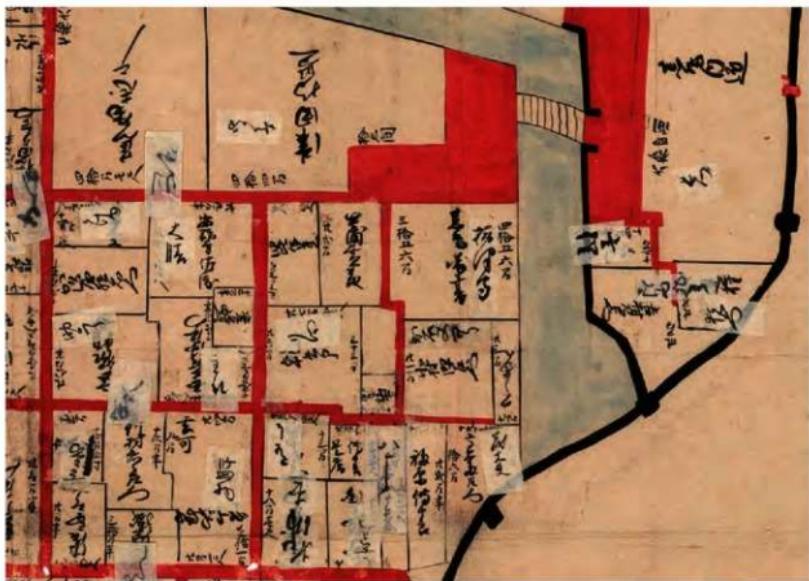


2 堀 1 石積 (北東から)

巻頭図版 2



1 「備前国図」(慶長年間)



2 「岡山古図」(寛永 9年)

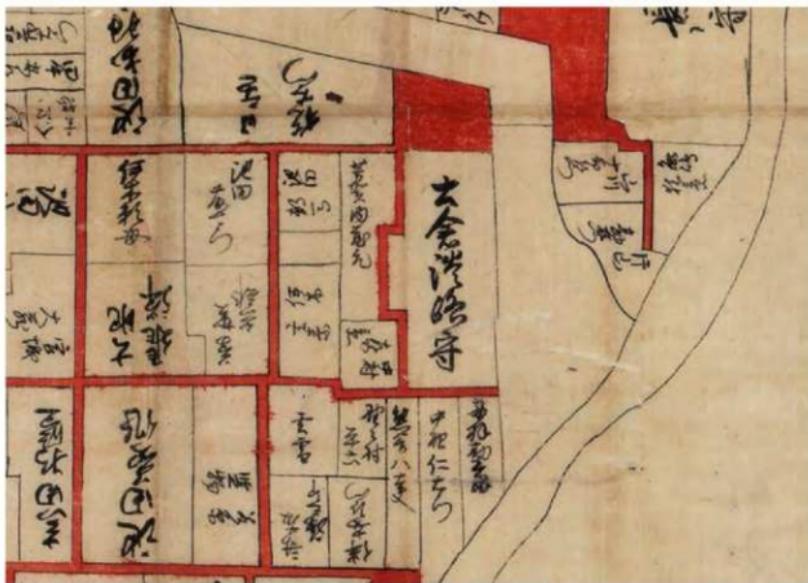


1 「岡山城下之図」(慶安年間)



2 「岡山内曲輪絵図」(宝永5年頃)

巻頭図版 4



1 「岡山古図」(寛政12年)



2 「備前岡山地理家宅一枚図」(文久3年)

序

本書は、警察本部庁舎整備事業に伴い発掘調査を実施した、岡山城二の丸跡の発掘調査報告書です。

警察本部庁舎は、県民の安全・安心を確保する治安対策の拠点であり、県民の生命と身体及び財産を守る災害対策の基地でもあります。この度、県庁南庁舎の建て替えによる新本部庁舎の建設が計画されたことから、岡山県教育委員会では計画地内に所在する遺跡の取り扱いについて関係部局と協議を重ねてまいりました。その結果、現状での保存は困難であり、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。

発掘調査地は、岡山県庁の南西隅に位置します。この場所は、幕末の城下絵図を見ると岡山城二の丸の一角に当たり、土倉氏など家老職にある重臣や上級武士の屋敷街として描かれています。また、調査地北側の現在県立図書館が建つ辺りは、岡山城中心部への入り口で複馬場と呼ばれる広場となり、調査地の東側には南北に延びる内堀が迫っています。さらに南側は、大川（旭川）の堤防や東門が築かれていました。

調査の結果、絵図に描かれた道を検出するなど、江戸時代の屋敷割りの詳細やその変遷が明らかになりました。さらに、これら屋敷地の下層からは宇喜多期の堀が確認され、初期岡山城下の実態に迫る貴重な発見となりました。

本書が、岡山城をはじめとする近世城郭研究に寄与し、また市街地の下に眠る城郭遺構の保護・保存のために活用されるならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成に当たりましては、警察本部をはじめとする関係各位から多大な御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成30年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 宇垣 匡雅

例　　言

- 1 本書は、警察本部庁舎整備事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県警察本部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）が実施した、岡山城二の丸跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した岡山城二の丸跡は、岡山市北区内山下2-4-6に所在する。
- 3 確認調査は、平成26年度に文化財センター職員小嶋善邦が担当して実施した。調査期間は平成26年7月22~28日、調査面積は14.6m²である。本発掘調査は、平成28年度に文化財センター職員高田恭一郎・氏平昭則・藤井翔平が、平成29年度に同職員高田・尾上元規・小嶋善邦・和田剛が担当して実施した。調査期間及び面積は、平成28年度が平成29年1月4日~3月31日で598m²、平成29年度が平成29年4月1~30日で200m²である。
- 4 発掘調査にあたっては、埋蔵文化財専門委員の福田孝司氏から御指導と御助言を頂いた。記して深く感謝の意を表す次第である。
- 5 本書の作成は、平成29年度に高田・尾上・和田が担当し、文化財センターにて実施した。
- 6 本書の執筆は、調査担当者が分担し、文責は章及び節、あるいは項目ごとの文末に示した。また、全体の編集は高田が担当した。
- 7 本書の作成にあたり、遺物に関する鑑定・分析を下記の諸氏に依頼して有益な教示を受けた。記して厚くお礼申し上げる。

動物遺体同定　富岡直人（岡山理科大学）

石材鑑定　鈴木茂之（岡山大学）

- 8 遺物写真的撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。

- 9 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花房1325-3）に保管している。

凡　　例

- 1 本報告書に記載した高度は、海拔高である。
- 2 グリッドの座標値は世界測地系に準拠し、各遺構図の方位は平面直角座標第V系の座標北である。
- 3 本報告書に掲載した第2図の周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北部」・「岡山南部」を複製・加筆したものである。
- 4 土層断面図の土色は、基本的に「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所色票監修）を参考にした。
- 5 遺構配置図の第8・9図では遺構名を以下の略称を用いている。
柱穴列：柱　　土坑：土
- 6 各遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として下記のとおりである。
遺構　柱穴列：1/100　　土坑：1/30・1/60　　溝：1/30
遺物　土器・瓦類：1/4・1/6
土製品・石製品・木製品・ガラス製品・骨・象牙製品・金属製品：1/2・1/3・1/4
- 7 遺構番号は、遺構の種類ごとに通し番号を付している。
- 8 遺物番号は、陶磁器・土器類を除いて、番号の前に次の略号を付した。
瓦類：R　　土製品：C　　石製品：S　　木製品：W　　ガラス製品：G
骨・象牙製品：B　　金属製品：M
- 9 土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。
- 10 本報告書で用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分や世紀を併用した。

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境.....	1
第1節 地理的環境.....	1
第2節 歴史的環境.....	1
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過.....	5
第1節 調査に至る経緯.....	5
第2節 発掘調査及び報告書作成の体制.....	7
第3節 発掘調査の経過.....	8
第4節 報告書作成の経過.....	9
第5節 日誌抄.....	9
第3章 発掘調査の成果.....	11
第1節 調査の概要.....	11
第2節 近・現代の遺構.....	11
第3節 近世の遺構・遺物.....	15
第4節 中世以前の遺物.....	47
第4章 総括.....	55
第1節 遺跡・遺構について.....	55
第2節 遺物について.....	60
遺構一覧表・遺物観察表・動物遺体同定結果凡例.....	61
図版	
報告書抄録	

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)(目次)	第29図 国産磁器 2 (1/4)	38
第2図 周辺遺跡分布図 (1/35,000)2	第30図 輸入磁器 (1/4)	38
第3図 岡山城と調査位置図 (1/9,000)4	第31図 国産陶器 1 (1/4)	38
第4図 調査区配置図 (1/1,600)6	第32図 国産陶器 2 (1/4)	39
第5図 調査区東壁断面 (1/100)12	第33図 国産陶器 3 (1/4)	40
第6図 調査区南壁断面 (1/100)13	第34図 烙器 1 (1/4)	40
第7図 近・現代遺構配置図 (1/200)14	第35図 烙器 2 (1/4)	41
第8図 近世遺構配置図 1 (1/200)16	第36図 土器 1 (1/4)	42
第9図 道 1 周辺遺構 (1/100)17	第37図 土器 2 (1/6)	43
第10図 石組溝 1 ~ 3 (立面: 1/100)18	第38図 瓦 1 (1/4)	44
第11図 道 1 周辺遺構 (断面: 1/30 · 1/60)19	第39図 瓦 2 (1/4)	45
第12図 道 1 周辺遺構変遷図 (1/150)21	第40図 瓦 3 (1/4)	46
第13図 柱穴列 1 ~ 5 (1/100)22	第41図 瓦 4 (1/4)	47
第14図 土坑 1 ~ 4 (1/30 · 1/60)23	第42図 瓦 5 (1/4)	48
第15図 土坑 5 ~ 9 (1/30 · 1/60)24	第43図 瓦 6 (1/4)	49
第16図 土坑 10 ~ 13 (1/30 · 1/60)25	第44図 瓦 7 (1/4)	50
第17図 土坑 14 ~ 17 (1/30)26	第45図 土製品 (1/4 · 1/3 · 1/2)	51
第18図 土坑 18 ~ 23 (1/30 · 1/60)27	第46図 石製品 1 (1/3)	52
第19図 土坑 24 ~ 28 (1/30 · 1/60)28	第47図 石製品 2 (1/3)	53
第20図 土坑 29 ~ 33 (1/30 · 1/60)29	第48図 木製品 (1/3)	53
第21図 土坑 34 ~ 38 (1/30 · 1/60)30	第49図 ガラス製品・骨・象牙製品・金属製品 (1/3 · 1/2)	54
第22図 土坑 39 ~ 41 (1/30 · 1/60)31	第50図 土器 3 (1/4)	54
第23図 墓 1 (1/20)31	第51図 堀の位置関係図 (1/2,500)	55
第24図 溝 1 ~ 3 (1/30)32	第52図 堀 1 肩口石積と岡山城本丸中の段「石組・ 石垣」との断面角度比較 (1/40)	56
第25図 近世遺構配置図 2 (1/200)33	第53図 調査地周辺の変遷	59
第26図 堀 1 石積 (平・立面: 1/60)34		
第27図 北壁断面 (1/60)35		
第28図 国産磁器 1 (1/4)37		

卷頭図版目次

卷頭図版 1

- 1 堀 1 (南東から)
2 堀 1 石積 (北東から)

卷頭図版 2

- 1 「備前岡田」(慶長年間)
2 「岡山古図」(寛永 9 年)

卷頭図版 3

- 1 「岡山城下之図」(慶安年間)
2 「岡山内曲輪絵図」(宝永 5 年頃)

卷頭図版 4

- 1 「岡山古図」(寛政12年)
2 「備前岡山地理家宅一枚図」(文久 3 年)

図版目次

図版1

- 1 近代の道路側溝（西から）
- 2 調査区北半全景（南西から）
- 3 調査区南半全景（北から）

図版2

- 1 石組溝1・3（南西から）
- 2 石組溝1（南西から）
- 3 石組溝1（北西から）

図版3

- 1 石組溝1・暗渠1
- 2 石組溝2（北から）
- 3 石組溝3・柱穴列4（西から）

図版4

- 1 道1断面（北東から）
- 2 土坑25（北から）
- 3 土坑25断面（北から）

図版5

- 1 土坑30（北から）
- 2 土坑30断面（南から）
- 3 溝4・5（西から）

図版6

- 1 堀1（北西から）
- 2 堀1石積裏込断面（南から）
- 3 堀1断面（南東から）

図版7

- 1 国産・輸入磁器
- 2 国産磁器ガラス焼き継ぎの銘
- 3 国産陶器1

図版8

- 1 国産陶器2
- 2 ガラス製品
- 3 土製品1

図版9

炻器

図版10

- 1 土器
- 2 国産陶器墨書き

図版11

瓦1

図版12

瓦2

図版13

瓦3

図版14

瓦4

図版15

土製品2・石製品

図版16

骨・象牙製品・金属製品・木製品

写真目次

写真1 出土動物遺体..... 68

表目次

表1 文化財保護法に基づく文書一覧.....	10	表3 造構別出土瓦重量.....	60
表2 土坑30出土土器・陶磁器組成表	60		



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

岡山平野は、中国山地に端を発し瀬戸内海へと注ぐ旭川、吉井川、高梁川の運んだ土砂により形成された沖積平野である。岡山城が位置する現在の岡山市街地は旭川の下流域に当たる平野部に広がり、北を鳥山、半田山、ダイミ山、西を京山、東を東山、操山などの丘陵に囲まれている。また、現旭川は市街地西側を南北に貫流するが、これは宇喜多期に遡る城下整備と一緒にとして行われた付け替えによるもので、平野形成期には放射状に広がる小河川が複雑な微高地を形作っていた。

(和田剛)

第2節 歴史的環境

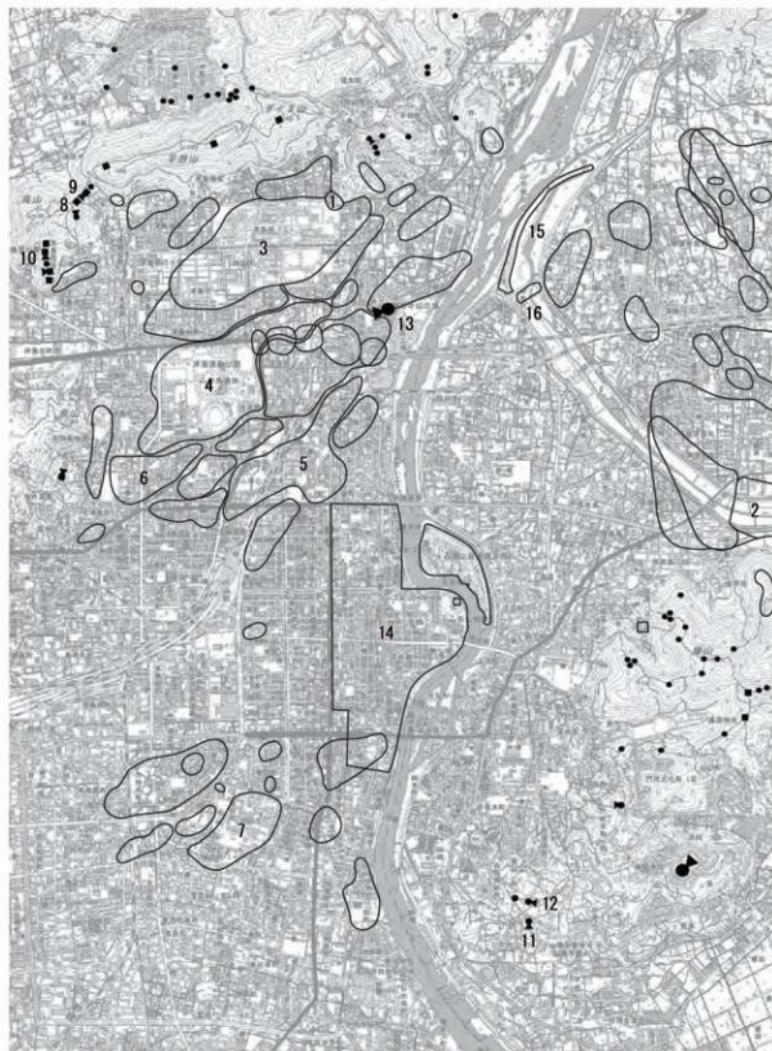
1 岡山城築城前史

岡山城付近の人類の活動痕跡は旧石器時代に遡り、操山山塊でナイフ形石器が採集されている。続く縄文時代には、早期の羽島下層式土器が出土した朝寝鼻貝塚の形成が始まる。朝寝鼻貝塚はダイミ山南麓に位置し、縄文時代後期の遺物・貝類も出土している。同時期の土器や遺構は、操山北麓に広がる百間川沢田遺跡や半田山南麓に広がる津島岡大遺跡でも検出されており、沖積化の進行が窺われる。縄文時代晩期には引き続き、百間川遺跡群や津島岡大遺跡で生活跡が確認されている。

弥生時代に入ると、津島岡大遺跡や津島遺跡、北方下沼・地蔵・横田遺跡で水田が形成されるなど、微高地縁辺部の低湿地を利用した本格的な稻作が開始されたことがわかる。弥生時代中期には、やや南に下った南方遺跡を中心に集落が営まれ、微高地で竪穴住居・掘立柱建物が検出されたほか、河道から精巧に加工された木製品が多数出土している。弥生時代後期に入ると沖積化がより進行し、拡大した微高地上に集落群が展開し始める。津島遺跡では多数の竪穴住居のほか、河道内から建築部材を始めとする多数の木器が出土している。南方遺跡では土坑墓や土器棺が検出されている。そのほか、伊福定国前遺跡では古墳時代前期まで継続する集落跡が検出されている。また、当時の海浜部と考えられる鹿田遺跡では製塩土器が出土しており、製塩にかかる集落と考えられる。

弥生時代後期末から古墳時代初頭には、平野北部の半田山に都月坂2号墳丘墓を端緒として、七つ塚1号墳・都月坂1号墳が造られる。一方、平野南東部の東山上には操山109号墳と網浜茶臼山古墳が築かれ、各集団の発展が窺われる。その結実として、古墳時代前中期～中期初頭には平野中央部に全長150mを測る神宮寺山古墳が出現する。しかし、古墳時代中期以降、この地域での造墓活動はおむね低調であり、操山山塊上などで横穴式石室墳が散発的に造営されるにすぎない。

古代に入ると旭川西岸地域は御野郡に編入される。平野全域で条里制が施行されたと考えられ、津島遺跡で関連する溝が検出されている。また、鹿田遺跡周辺は奈良時代末に成立して室町時代まで継続した、殿下渡領の一つである「鹿田荘」の故地に比定されている。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/35,000)

1 朝寢鼻貝塚	2 百間川沢田遺跡	3 津島岡大遺跡	4 津島遺跡
5 南方遺跡	6 伊福定国前遺跡	7 鹿田遺跡	8 都月坂2号墳丘墓
9 都月坂1号墳	10 七つ塙1号墳	11 掘山109号墳	12 網浜茶臼山古墳
13 神宮寺山古墳	14 岡山城跡・岡山城下町	15 百間川一の荒手及び背割堤	16 百間川二の荒手

2 岡山城史

現在の岡山城主要部は南北朝時代から城があったとする説もあるが、近世岡山城に直接関連するのは室町時代後期に金光氏が城主となってからで、江戸時代の編纂物である『備前軍記』に金光与次郎宗高の名が見える。一方、備前国西部で権力を確立しつつあった宇喜多直家は、この宗高を謀略によって滅ぼした。そして直家は城地の拡張を行い、天正元（1573）年に岡山城に入城する。この時、岡山の南麓にあった蓮昌寺や岡山寺、三社明神を移転させたといわれる。天正10（1582）年、直家が没すると、その跡目を次男の秀家が継いだ。秀家は羽柴（豊臣）秀吉の天下一統事業に従い、備中高松城攻めの後、備前・美作・備中半国からなる57万石の所領を認められた。天正19（1591）年、秀家は秀吉の助言に従い岡山城の本格的な城郭建築に乗り出し、慶長2（1597）年に竣工した。その城郭整備は、本丸を石山から岡山に移して南に大手を構える櫛張りとするもので、旭川を城地北側へ付け替えて天然の堀とするとともに、丸の内を取り巻く三重の内堀を設けた。

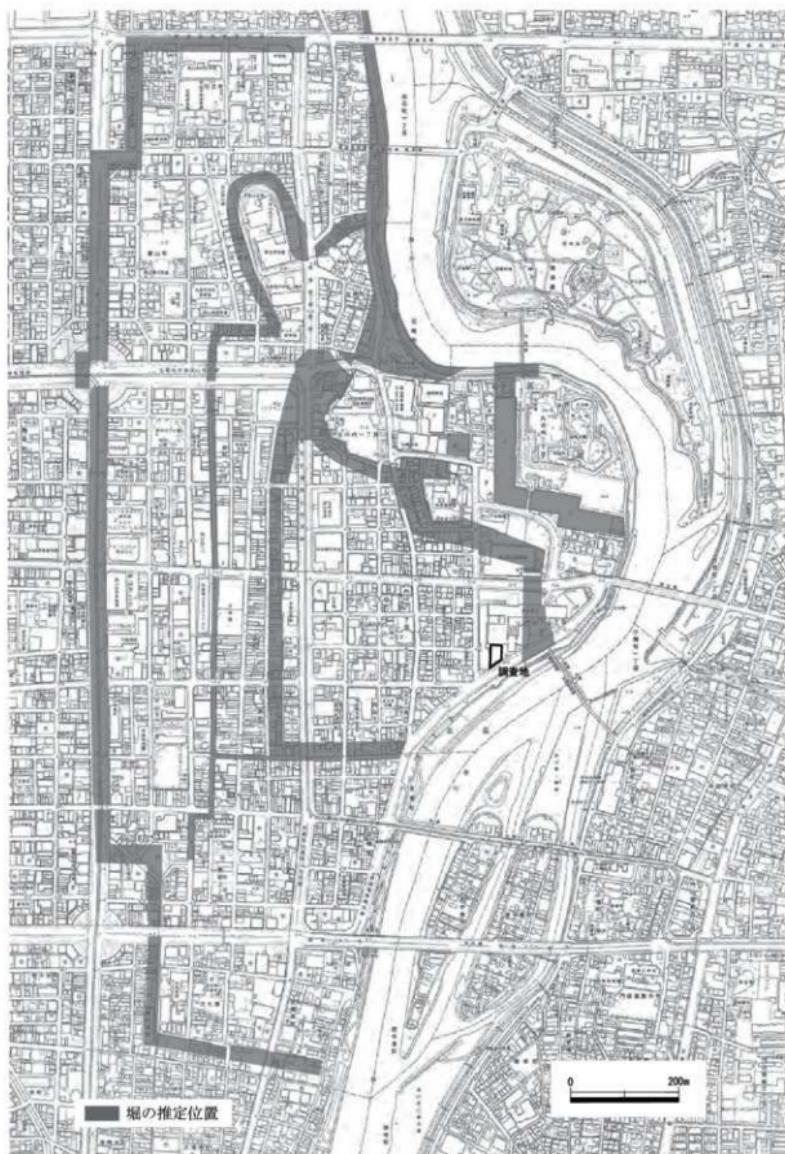
慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いにおいて敗北した秀家に変わって、小早川秀秋が入城した。秀秋は、外堀（二十日堀）を掘削して三の外曲輪を新設するなど積極的に西側外廓の整備を図るなどしたが、在城二年にして病没する。継嗣がなかったため、代わって姫路城主池田輝政の次男忠維が備前一国を継承した。しかし幼年であったため、兄の利隆が監国として岡山城に入城することになった。忠維は慶長19（1614）年に岡山城に入ったが、翌年、17歳で病没した。そのため忠維の実弟、忠雄が岡山城主となった。忠雄は月見櫓や小納戸櫓などを築造し、近世城郭としての岡山城を完成させ、さらには西川を掘削して岡山城下の整備も行っている。忠雄時代に制作された最古の岡山城下絵図である『岡山古図』は後の城下図と重なる部分が多く、城下町もこの時点ではほぼ完成を見ていたようである。

寛永9（1632）年、忠雄は江戸藩邸で死去し、嫡子の光伸が跡を継いだ。だが、幼少であることを理由に因幡・伯耆へ国替えとなり、代わって鳥取城主であった池田光政が岡山城に入る。光政治世下の承応3（1654）年、岡山城下で侍屋敷439軒流出、溺死者156名という甚大な被害を出した大洪水が発生した。この洪水を受け、光政は寛文9（1669）年に百間川の築造工事を開始し、貞享3（1686）年に完成を見た。これは熊沢蕃山の献策した『川除の法』に基づくもので、荒手と呼ばれる越流堤と放水路を組み合わせて旭川の氾濫を誘導・放水させるというものであった。

光政入城以降、幕府の統制が厳しくなり、岡山城では櫛張りの改造や櫓の新設などは一切行われず、明治維新を迎えていた。明治2（1869）年、藩主であった池田章政は版籍奉還を行い、岡山城二の丸より内側は兵部省（後の陸軍省）の所管となった。以後、明治15（1882）年までには天守・月見櫓・西丸西手櫓・石山門など一部除いて建物が廃棄された。その後、岡山城二の丸一帯は岡山県病院や県立商業高校等の用地となったほか、一般宅地化が進み、屋敷地としての姿を徐々に失っていった。今回の調査地でも昭和7（1932）年に柳原病院が開業している。

昭和20（1945）年6月の岡山大空襲により天守と石山門が焼失し、城郭建築は月見櫓と西丸西手櫓を残すのみとなった。戦後、本丸周辺は都市公園として本格的な整備がなされ、昭和41（1966）年には天守を含むいくつかの建物が復元された。一方、二の丸跡では岡山県庁舎が昭和32（1957）年に同地へ移転してきた。

近年、岡山城二の丸跡では県庁舎増築工事、中国電力変電所建設や岡山県立図書館建設に伴い発掘調査が実施されており、その成果が公表されている。
(和田)



第3図 岡山城と調査位置図 (1/9,000)

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

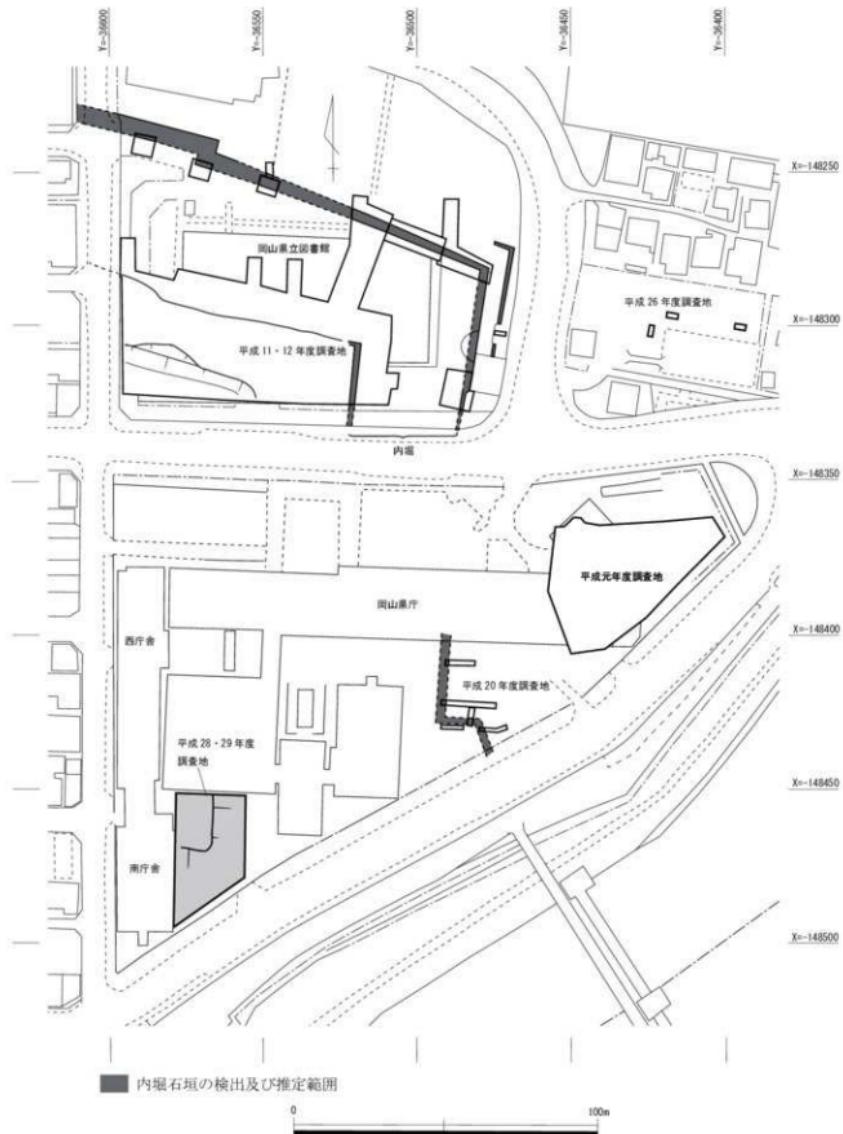
警察本部庁舎は県民の安全・安心を確保する治安対策の拠点であり、また近年注視される大規模災害等の緊急事態発生時には危機管理の指揮本部となる対策基地である。この警察本部庁舎の喫緊の課題として、耐震未対策の県庁舎内外に分散していることによる機能の非効率性と脆弱性、さらにセキュリティ対策においてもその潜在的危険性が問題となっていた。このため、県民の安全・安心を確保するため警察本部機能を集約する新本部庁舎の建設が待ち望まれていた。こうした中、平成24年9月の県議会本会議上で石井知事（当時）が、県庁南庁舎建て替えによる新警察本部庁舎建設の検討を明らかにし、平成25年4月には本部庁舎建設準備室が開設され、整備基本計画策定に着手した。

現在の岡山県庁は昭和32年に岡山城二の丸跡の位置に移転し、増改築を経ながら今日に至っている。県庁舎敷地内における埋蔵文化財の取扱いは、教育庁文化財課と事業関係機関間で協議が重ねられ、対応が図られてきた。平成元年には県庁舎東増築部分の記録保存調査を実施し¹、また県庁北側では県立図書館建設に伴って平成11～13年に発掘調査を実施している²。この2地点の発掘調査の成果によって岡山城築城期から江戸時代末までの二の丸の様相の一端が明らかとなってきた。また、平成20年に県庁舎南側の中庭において実施した確認調査では、二段内堀の石垣が庁舎敷地内に残存していることが判明した³。

ところで、岡山城本丸と内堀内側は昭和62年に史跡指定されている。さらに上述の県立図書館建設時には、二段内堀石垣を保存するよう協議調整の上、図書館の建物設計を行い、平成19年に二段内堀石垣と外下馬門周辺等が追加指定されるなど、その保護が図られてきた。

この度の警察本部庁舎整備においても、平成25年5月の警察会計課本部庁舎建設準備室との具体的な協議を皮切りに関係各課と協議調整を重ねた。また、警察本部庁舎建設地はこの時点で南庁舎と議員駐車場として利用されており、その建設のためには南庁舎地下に設けられていた駐輪場と議員駐車場の代替え施設が必要となった。そこで駐輪場については県庁北側の駐輪場施設の増築、議員駐車場については県庁舎南側の中庭が新設地となり、同時に並行で協議と対応を図ることになった。これらは、いずれも岡山城二段内堀の内側にあり、その重要性に鑑み、警察本部庁舎整備と併せて、文化庁記念物課並びに埋蔵文化財専門委員の指導を適宜受けながら、その保護に努めた。北駐輪場については、平成26年11月に確認調査を実施し、重臣家老屋敷の遺構面を確認したため、構築物の基礎構造について、遺構面に影響のないよう基礎深度を浅くするなど設計の工夫を行い、保護対応を図った。また、議員駐車場については、前述の平成20年の確認調査で判明した二段内堀石垣部分を保護して避けるなど地下遺構に影響のないように基礎構造の設計と施工を行った。

警察本部庁舎建設地については、明治以降の土地利用、建築物によって多くの遺構が破壊されていくことも想定されたことから、事前に確認調査を実施し、まず内容を把握することとした。平成26年7月に確認調査を実施し、江戸時代の遺構が残存していることが明らかとなり、その成果に基づいて



第4図 調査区配置図 (1/1,600)

協議を進めた。こうした協議を経て、南庁舎部分についてはその地下構造によって既に遺構面が破壊されていると判断し、それを除いた東側部分798mについて記録保存調査の対象とした。そして、南庁舎解体後の平成28年9月から12月まで4か月間の発掘調査実施計画を策定し、各関係機関と調査に向けた協議、準備を進めた。ところが、平成28年1月、景観法の問題から警察本部庁舎基本設計の見直しをする必要が生じ、また南庁舎解体工事が遅れたため、調査計画を急遽変更せざるを得ず、最終的に平成29年1月から着手し、4月までの調査となった。

文化財保護法に基づく手続きは、南庁舎解体工事についての保護法第94条の発掘の通知は平成28年5月に提出を受け、工事立会の勧告を行い、解体工事時に適時教育庁文化財課職員が工事立会した。警察本部庁舎建築工事についての保護法第94条通知は平成28年9月に提出を受け、発掘調査の勧告を行った。

(大橋雅也)

註

- 1 「岡山城二の丸跡 岡山県庁舎増築工事に伴う発掘調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」78 岡山県教育委員会 1991
- 2 「岡山城二の丸跡 県立図書館建設に伴う発掘調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」175 岡山県教育委員会 2003
- 3 「岡山県埋蔵文化財報告」38 岡山県教育委員会 2008

第2節 発掘調査及び報告書作成の体制**平成26年度****岡山県教育委員会**

教育長 竹井 千庫

岡山県教育庁

教育次長 伊藤 史恵

文化財課

課長 山田 寛人

参事（文化財保存・活用担当）

宇垣 匠雅

総括副参事（埋蔵文化財班長） 大橋 雅也

主任 岡崎 行康

主任 石田 炯成

岡山県古代吉備文化財センター

所長 村木 生久

次長（総務課長事務取扱） 大崎 智浩

参事（文化財保護担当） 光永 真一

総括参事（調査第一課長事務取扱）

<総務課>

総括主幹（総務班長） 岡部 一

主任 宮岡 佳子

主任 山内 基寛

<調査第一課>

総括副参事（第一班長） 高田恭一郎

主任 小嶋 善邦

(確認調査担当)

平成28年度		平成29年度	
岡山県教育委員会		岡山県教育委員会	
教育長	竹井 千庫	教育長	竹井 千庫
岡山県教育庁		岡山県教育庁	
教育次長	内田 広之	教育次長	日比謙一郎
文化財課		文化財課	
課 長	小見山 晃	課 長	小見山 晃
参 事（文化財保存・活用担当）	横山 定	参 事（文化財保存・活用担当）	横山 定
総括参事（埋蔵文化財班長）	大橋 雅也	総括副参事（埋蔵文化財班長）	柴田 英樹
主 幹	杉山 一雄	主 幹	平井 健太
主 任	平井 健太	主 任	上柳 武
岡山県古代吉備文化財センター		岡山県古代吉備文化財センター	
所 長	宇垣 匠雅	所 長	宇垣 匠雅
次 長（総務課長事務取扱）	成本 俊治	次 長（総務課長事務取扱）	高田 亮
<総務課>		参 事（文化財保護担当）	大橋 雅也
総括主幹（総務班長）	金藤 賢史	<総務課>	
主 任	浦川 徳子	総括副参事（総務班長）	金藤 賢史
主 任	山内 基寛	主 任	浦川 徳子
<調査第二課>		主 任	東 恵子
課 長	高田恭一郎	<調査第二課>	
	(調査担当)	課 長	高田恭一郎
総括副参事（第二班長）	氏平 昭則		(調査・整理担当)
	(調査担当)	総括副参事（第二班長）	尾上 元規
主 事	藤井 翔平		(調査・整理担当)
	(調査担当)	主 幹	小嶋 善邦
			(調査担当)
		主 任	和田 剛
			(調査・整理担当)

調査協力者 竹原伸之（岡山県立博物館）・乗岡実（岡山市教育委員会）

第3節 発掘調査の経過

平成28年度の調査は、調査員3名の体制で平成29年1～3月に実施した。調査は、平成28年12月までに行われた県庁南庁舎解体とそれに続く対象地内の近・現代の造成土及び建築物基礎の撤去後に開始した。まず、調査地全面に残る造成土を重機で除去し、その後遺構検出を行ったところ、調査区北半部で東西方向の石組溝を確認し、さらに石組溝間を含む調査区全面で土坑等の遺構を確認した。石

組溝のうち北側の2条は近代以降の構築と考えられ、現代の道路側溝の下層に位置する。これら近代以降の石組の撤去については、人力での作業が不可能であったため、小型重機で実施した。南側の石組溝2条は、石積と石材の観察から江戸時代の構築であり、城下絵図の道の位置に当たるものと考えた。この道を境に南北の江戸時代の屋敷地には高低差があり、低い南側には屋敷地造成土が厚く残存しており、その理由として屋敷地造成土の下に厚く堆積する砂層の存在に由来することが推定された。そこで、この砂層の時期や規模等を把握するため、調査区南半部の遺構の調査を優先して行うこととしたが、遺構の多くが大量の瓦や陶磁器類で充填された廃棄土坑であり、規模も大きなことから調査に時間を要した。なお、大量に出土した瓦類については、現地で重量を計量したのち搬送して取り上げている。その後の砂層の掘り下げについては、厚さが2m以上に達すると考えられたことから重機を使用して実施した。その結果、海拔1mまでが砂層の堆積で、その下は海拔0.4mまでの水成堆積であり宇喜多期の遺物を包含することから、同期の堀と判断した。

平成29年度の調査は、調査員4名の体制で平成29年4月に実施した。前年度から引き続き、調査区北半部の江戸時代屋敷地の遺構調査を行い、その終了後に南北方向の堀を調査した。堀の調査では、西岸肩口に石積を確認するなどの新たな発見があった。

なお、調査成果を公開するため、平成29年3月18日に現地説明会を開催し、150名の参加者があった。
(和田・高田恭一郎)

第4節 報告書作成の経過

報告書作成は、平成29年5月1日～8月31日に文化財センター職員が担当した。遺物整理では、遺構ごと、層位ごとに復元作業を行い、実測対象遺物の抽出等を進めた。その後、実測・浄書作業を行い、一部の遺物は写真撮影を実施した。遺構整理では、遺物の整理成果を基に掲載等を検討した上で浄書作業を行い、掲載用写真を選別した。これらの整理成果を基に割付、原稿執筆及び編集作業を実施した。

なお、陶磁器類については佐賀県立九州陶磁文化館の家田淳一氏と大橋康二氏に、石製品については岡山大学の鈴木茂之氏に、動物遺存体については岡山理科大学の富岡直人氏に教示を仰いだ。

(和田・高田)

第5節 日誌抄

平成26年度（確認調査）

平成26年

- 7月22日（火）確認調査開始
- 7月28日（月）確認調査終了

平成28年度（発掘調査）

平成29年

- 1月4日（水）発掘調査開始
- 1月5日（木）重機による表土掘削
- 1月10日（火）調査資材搬入、発掘調査開始
- 2月27日（月）重機による表土掘削
- 3月3日（金）埋蔵文化財専門委員会開催
- 3月18日（土）現地説明会開催

平成29年度（発掘調査・報告書作成）

平成29年

4月7日（金）岡山大学鈴木茂之氏現地指導

4月30日（日）発掘調査事業終了

5月1日（月）報告書整理事業開始

8月31日（木）報告書整理事業終了

表1 文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (m ²)	原因	伝蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
岡古調 第48号 H26.8.19	周知	城館跡 岡山城二の丸跡	岡山市北区内山下 2-4-6	14.6	警察本部庁舎	有	岡山県古代吉備 文化財センター所長	小嶋善邦	H26.7.22～ H26.7.28

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

岡山県文書番号 勘合等の日付	道路の名称 時代・種類	所在地	目的	通知者	通知日	主な勘合事項
教文理第795号 平成28年9月13日	岡山城二の丸跡 中世・近世 城跡	岡山市北区内山下 2-4-6	その他建物 (岡山県警察本部庁舎)	岡山県知事	平成28年9月9日	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (m ²)	原因	報告者	担当者	期間
岡古調 第107号 H29.1.4	周知	城館跡 岡山城二の丸跡	岡山市北区内山下 2-4-6	598	警察本部庁舎	岡山県古代吉備 文化財センター所長	高田恭一郎・氏平昭則・ 藤井畠平	H29.1.4～ H29.3.31
岡古調 第1号 H29.4.1	周知	城館跡 岡山城二の丸跡	岡山市北区内山下 2-4-6	200	警察本部庁舎	岡山県古代吉備 文化財センター所長	高田恭一郎・尾上元規・ 小嶋善邦・相田剛	H29.4.1～ H29.4.30

埋蔵文化財発見通知（法第100条第2項）

文書番号 日付	物件名	出土地・名称 時代・種類	出土年月日	発見者	土地 所有者	保管場所
教文理 第580号 H26.7.28	瓦・陶磁器 計整理箱1箱	岡山市北区内山下2-4-6 岡山城跡 中世～近世 城館跡	H26.7.22～ H26.7.28	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	岡山県	岡山県古代吉備文化財 センター
教文理 第146号 H29.5.1	須恵器・陶磁器・瓦・埴輪・ 金属製品（鉄針・銅錢） 計整理箱100箱	岡山市北区内山下2-4-6 岡山城二の丸跡 近世 城跡	H29.1.4～ H29.4.30	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	岡山県	岡山県古代吉備文化財 センター

第3章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

今回の調査地は、岡山県庁旧南庁舎跡の隣接地に位置する。周知のとおり、岡山県庁舎は岡山城二の丸跡に位置し、今回の調査地点もこれに含まれる。そのため平成26年度に確認調査を実施した結果、調査地全体に屋敷地が広がっていることが予想された。調査地は近・現代造成土に覆われており、調査は重機を用いたこの除去から開始した。その結果、近・現代から江戸時代初頭までの遺構が一面に検出された。

ここで、東壁及び南壁の断面図を参照しながら、この地点の調査成果について概観しておきたい（第5・6図）。東壁では近・現代造成土の直下で粘性を帯びた第5図第12～15層を確認した。近・現代の廐棄土坑などはこれらの土層の上から掘り込まれる一方、近世の遺構は一部がその下層より検出されることから、第12～15層については近世段階の造成土である可能性が高い。また、調査区東端で検出した、第12層を切り込む土坑12からは、見込みに胎土目を残し、鉄絵を描いた唐津皿が出土した。このことから、調査地点での屋敷地の造成開始が江戸時代初頭にまで遡ることが明らかとなった。さらに造成土の下層には、2mを超える厚さの洪水砂層（第27層）が観察された。南壁ではこの洪水砂層の下層は青灰色シルト～オリーブ黒色粘土の互層堆積（第6図第17・18層）となっている。この互層堆積層からは漳州窯や景德鎮産の青花碗、備前焼V期の擂鉢、コビキA痕を主体とする瓦などが出土しており、その堆積が江戸時代初頭よりもさらに遡ることが判明した。以上の洪水砂層とその下層堆積で埋没した堀1は、調査区内で鍵形に屈曲するもので、堀の肩口には最大で高さ約0.9mを測る石積が伴っており、石の大きさや構造などから見て、宇喜多期まで遡る可能性が高いものと思われた。

(和田)

第2節 近・現代の遺構

近・現代の遺構は、調査地北半部で検出した肩口に石積を伴う溝2条のほか、土坑、柱穴、たわみ等を検出した（第7図）。溝2条は、約6m間隔で平行するもので、調査区を東西に横断している。これを延長すると西側で現在の道路につながることから、両溝の間が道路として機能していたことが推察される。この道路は、昭和22（1947）年に米軍が撮影した空中写真にも撮影されており（国土地理院ホームページ地図・空中写真閲覧サービス<http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>）、現在の県庁建設以前の道路の一部であったことは間違いない。その他、土坑や柱穴の性格については不明ながら、昭和7（1932）年にこの地に開業し、昭和29（1954）年に現在の岡山市北区丸の内2丁目に移転した、榎原病院に関連する施設跡の可能性がある。加えて、南壁断面（第6図）に見る第1～3層については、特に第1層が近・現代搅乱層をえぐり込んでいる状況が観察できた。このことから、これら砂層は昭和9（1934）年に発生した洪水跡の一部である可能性を想定できる。

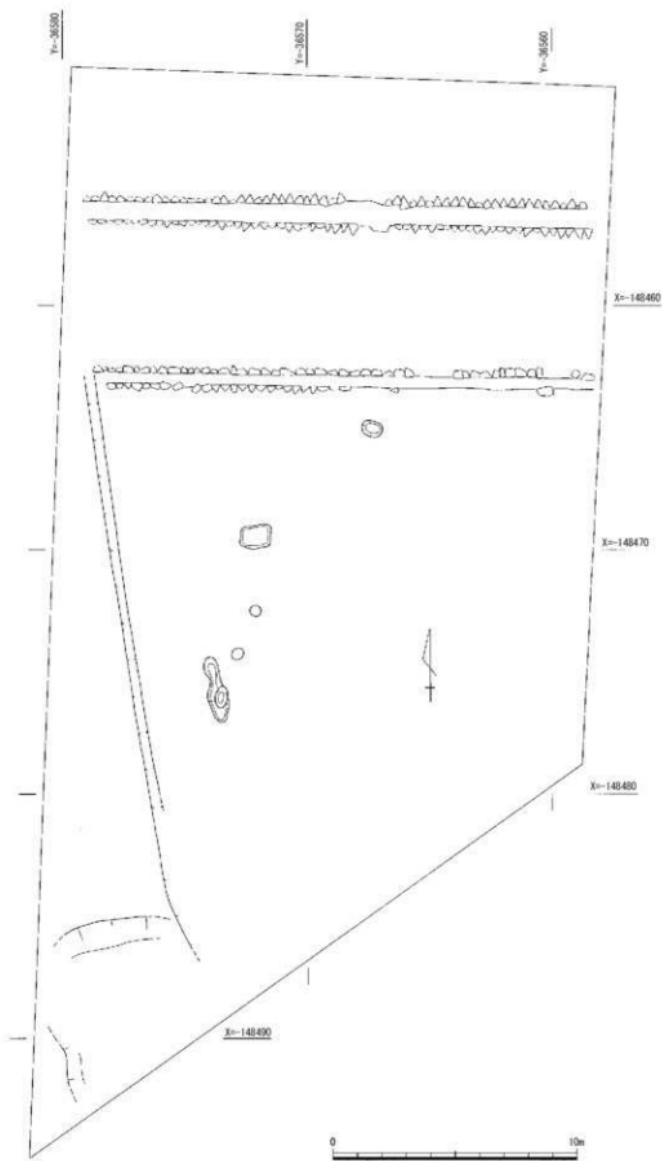
(和田)



第5図 調査区東壁断面 (1/100)



第6図 調査区南壁断面 (1/100)



第7図 近・現代遺構配置図 (1/200)

第3節 近世の遺構・遺物

1 遺構の検出状況（第8図、図版1-2・3）

近世の遺構は、調査区中央を横断する道1を境として南北に展開する。遺構検出面のレベルは海拔約3.8m～2.8mと幅があり、旧地形は調査地の南側に流れる旭川に向かって傾斜しているようである。土地造成も江戸時代を通じて調査地南側を中心に繰り返しなされているものと思われ、これは調査地南側に位置する土坑29を造成土と考えられる第5図第14・15層の下層で検出したことからも追認できる。

今回検出した近世の遺構の内訳は、石組溝3条、溝6条、暗渠1条、柱穴列5基、土坑41基、塹1本である。石組溝1と3は調査区中央を横断するような位置に検出した。現在残る江戸時代の岡山城下の絵図面（巻頭図版2～4）によると、この地点は江戸時代を通じて武家屋敷地の一角に当たる。そして道が東西に横断しているようであり、この両溝が道路側溝であり、溝間が道路面として機能していたと思われる（道1）。一方、石組溝2は石組溝1から3へ向かって道1を南北に縦断するように検出している。次に他の溝であるが、溝1・2のように屋敷地を区画するように南北に流れるものと、溝4～6のように道1に関連して掘削されるものの2種に大別できそうである。続いて柱穴列であるが、調査地北端で検出した柱穴列1が南北方向に配列されているのに対し、調査区中央付近並びに南側において検出した柱穴列2～5は東西方向に配列されている。暗渠1は調査地南側で検出した溝6（第9図）に始まり、石組溝3と道1の下層を通って石組溝1の南側石積2段目に接続している。土坑は道を挟んで調査地全体に検出された。調査地全体が近・現代造成土に覆われ、残存状況の悪いことが予想されたが、存外残りは良く、深さ1mを超える土坑を多数検出した。

(和田)

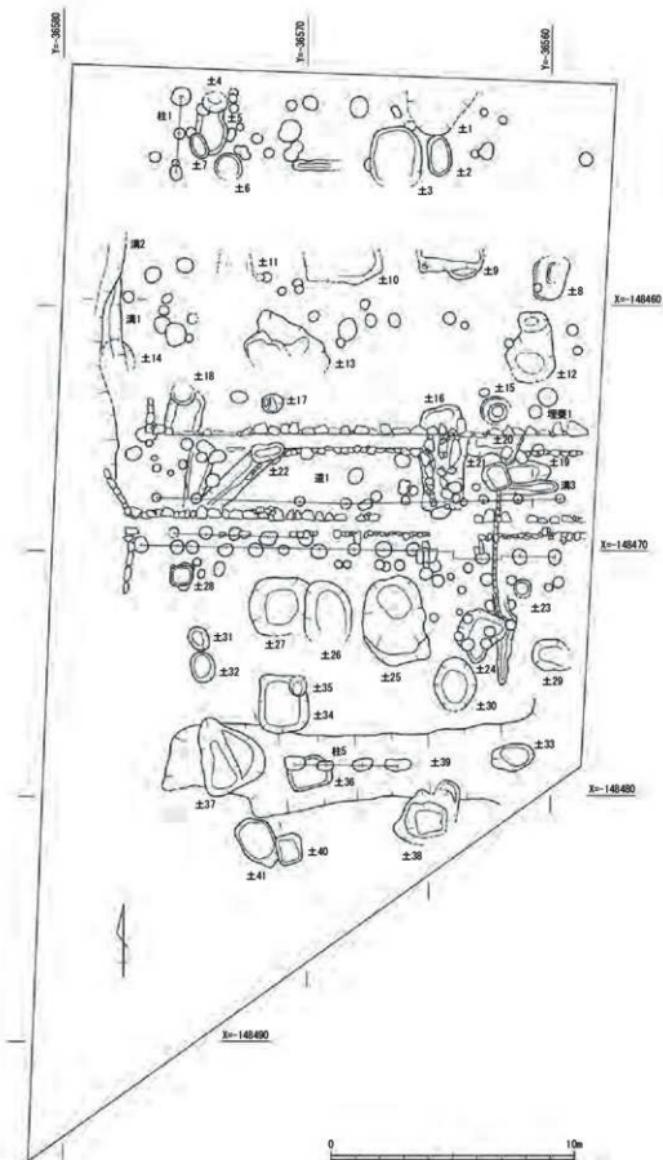
2 遺構

石組溝（第8～11図、図版2・3）

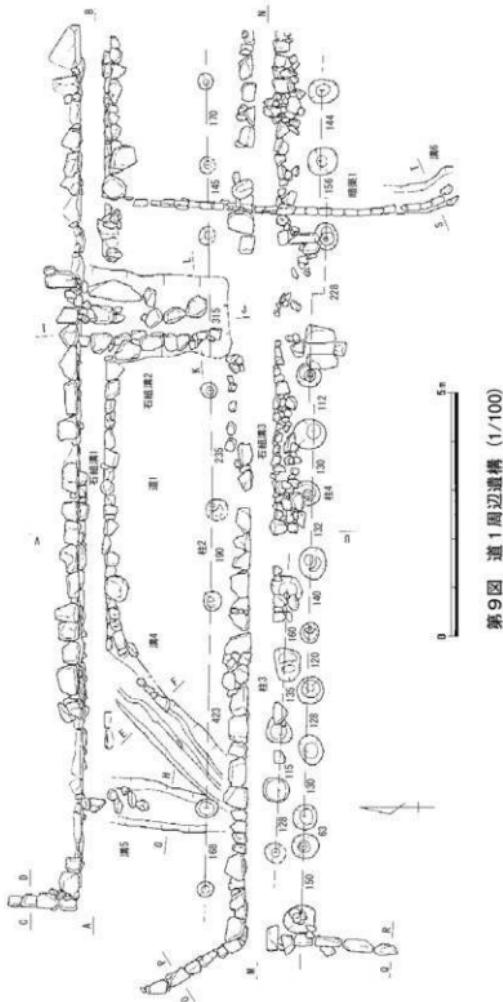
石組溝1は、調査区中央北寄りで全長約18.3mに渡って検出した。幅約0.5mを測り、南北ともに石積を伴っている。また、北側の石積のほうが高く積まれている。この北側石積が調査地北側に広がる屋敷地と溝ないし道1の北側を画していたものと思われる。北側の石積で用いられる石材の大きさは様々で、幅約0.1～1mと多岐にわたる。最大で3段に積まれており、最上段は横長で平坦な石材を用いて高さを整えている状況が窺われる。高さは最大で1mを測る。矢穴を穿つ石材は1点しか確認できず、大半が花崗岩の自然石と荒削り材を用いている。溝を挟んで南側の石積で用いられる石材は、おおむね幅約30～40cmで、一部を除いて2段に積まれている。

掘削時期は、石積に自然石を交えること、ほぼ垂直に立ち上がる石積の形態が本丸中の段の第IV期の下層西側石壁に近いこと、隣接する土坑12から出土した鉄経唐津皿36・37の年代観から、17世紀初頭に遡ると考えられる。

石組溝2は、調査区中央東寄りで南北約2.8mに渡って検出した。北端は石組溝1の北側石積に接し、南端は石組溝3にほぼ接しており、ちょうど道1を縦断する状況を呈す。また、溝の東西に石積を伴い、東側で1段、西側で2段積まれている。その高さは低く、最大でも約30cmを測るにすぎない。



第8図 近世遺構配置図 1 (1/200)



時期幅がある。何度かの掘り直しを想定できるであろう。

道1に関連する溝（第8・9・11図、図版5-3）

溝4は、調査区中央西寄りで検出した。石組溝1から分かれ、石組溝3へ向かって流れる溝である。石組溝1の南側石積2段目をこの溝に沿うように屈曲して検出したことから、洪水時などにあふれた水を流した緊急的な溝であろう。検出レベルから掘削時期は17世前葉以降である。

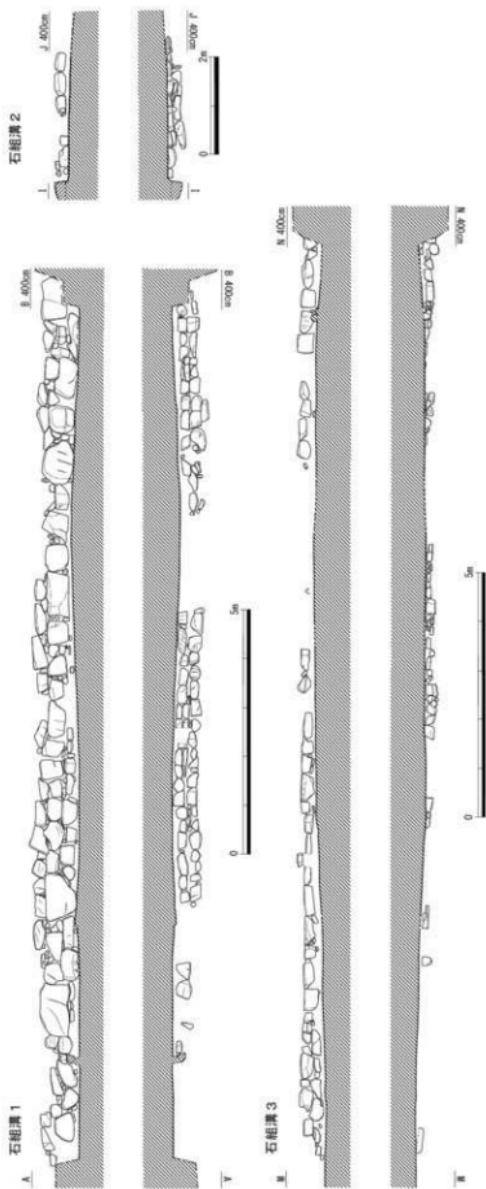
検出レベルは海拔約3.8mで、今回検出した石組溝の中では最も高い。検出状況などと合わせてみて、道1北側に広がる屋敷地から南側の石組溝3へ向かう流路であったと見られる。掘削時期は、図示していないが、出土した肥前磁器碗や関西系陶器の年代観から19世紀代まで下ると想われる。

石組溝3は、調査地中央、南寄りで東西約19mに渡って検出した。溝の幅は約50cmである。溝の南北に石列を伴うが、残存状況は悪い。南側では長さ10cmにも満たない石材を使用しているが、これは控え積みであろう。石列は南北ともほとんどの部分で1段積となっている。

断面図(第5・11図)によると、新古の2段階があるようであり、古段階は海拔高3.3mで検出された。新段階は厚さ40cmの造成土を挟んで海拔高3.7mで検出されている。第9・10図に図示し得たのはこの新段階の溝である。

存続時期は古段階が石組溝1と同時期と考えられることから江戸時代初頭、新段階が石組溝2や後述する溝4・5と同時期に機能していたと考えられることから、17世紀前葉～19世紀と

(和田)



第10図 石組溝1～3（立面：1/100）

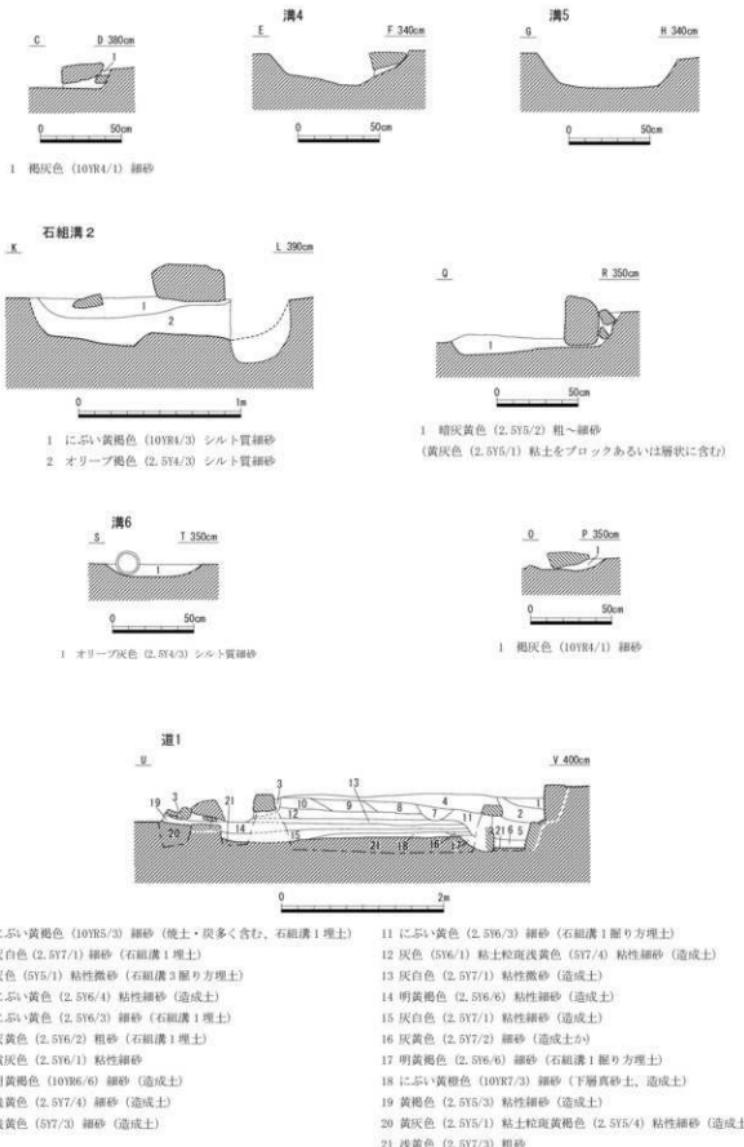
溝5は調査区中央西寄りで、道1を南北に縦断するよう検出した。中央に石列が見られ、溝4と同様に緊急的に水を流すための溝であろう。掘削時期は溝5同様に17世前葉以降と思われるが、溝4に切られることからこれより古いことは確実である。

溝6は調査区中央の東端付近で検出した溝で、南北方向に約6.5m遺存していた。検出状況からみて暗渠1を固定するために掘削された溝と思われ、掘削時期は後述する暗渠土管の年代観から17世紀前葉である。
(和田)

暗渠1（第8・9・11図、図版3-1）

暗渠1は、調査区中央の東端から西へ約3.5mの地点で、南北6.5mに渡って検出した。北端は石組溝1の南側石積2段目に接続し、道1と溝3の下層を通過し、南は溝6の南端まで続く。暗渠は瓦質の特製土管を用いて構成されている。現状で25個が残存する。検出高は石組溝1側のほうが高く、海拔3.5mを測る。そのため石組溝1から南の屋敷地へ導水することを目的に敷設されたと推察される。敷設時期は内面に細布目とコビキB痕を残す特製土管の特徴から、17世紀前葉である。

(和田)



第11図 道1周辺遺構 (断面: 1/30・1/60)

道1とその周辺の遺構の変遷（第12図）

ここでは道1とその周辺の遺構の変遷について整理しておきたい。なお、石組溝1の北石列と、石組溝3の南側石積の間は約4m（二間二尺）を測り、宝永5（1708）年製作の『岡山内曲輪絵図』（巻頭図版3-2）に記される道幅「二間」に近い数値となっている。

前期段階

調査地点での屋敷地と道路面の造成が開始された時期である。調査地中央の砂層（第11図第21層）の上に第18・15・14層が盛られ道路面が形成されている。さらにこれを掘り込んで石組溝1の南側石積の掘り方（第11図第17層）が切り込まれていることから、道1の造成と石組溝1の構築の開始がほぼ同時であったことがわかる。東壁では、石組溝1の北側石積が北側の屋敷地を掘り込んで構築されていることがわかる（第5図）。北側屋敷地の造成開始年代は総唐津皿の製作年代（1600～1610年）を上限とすることから、石組溝1の掘削年代と道1の造成開始年代もこれに近いものと思われる。なお、石組溝3にはまだ溝が伴ってはいない。

中期段階

中央断面で第13・12・10・9・8・3層が盛り土され、石組溝1の南側石積修築のための掘り方として11層が掘り込まれている。この修築に併せて暗渠1が敷設されている。道1の南側では石組溝3の南北石積が設置されており、これで道を挟んで南北に溝が掘削された。検出レベルからみて溝5・6はこの時期に掘削されたか。時期は、暗渠1が敷設された17世紀前葉以降か。

後期段階

中央断面において第4層が造成され、石組溝1の溝部分が完全に埋まった段階である。前後関係から石組溝2はこの時期に掘削されたと思われる。検出状況から石組溝3はまだ機能していた。道1が道路として機能していた以上、これを縦断する石組溝2が開口していたとは考えにくく、木蓋などを被せて暗渠としていたのであろう。時期は、石組溝2の掘削時期である19世紀代。（和田）

柱穴列（第8・9・13図、図版3-3）

柱穴列1は、調査区北東端付近で検出した柱穴列である。2間からなるが調査区北側へ続く可能性もある。今回検出した柱穴列の中では唯一南北方向に延びており、残存長は3.9mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

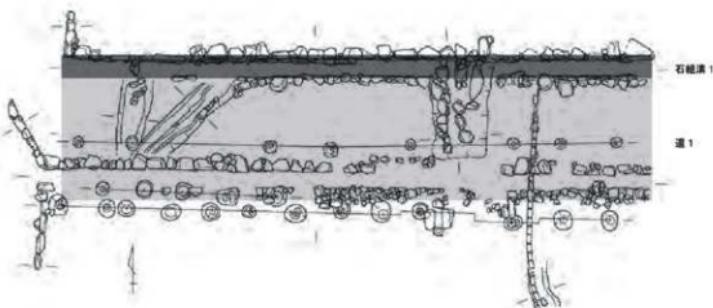
柱穴列2は、道1南端付近で検出した東西に延びる柱穴列である。7間からなり、残存長は16.9mを測る。柱間は145～423cmとばらつきがある。道1南側を画する柵列のようなものであったか。検出レベルから時期は17世紀前葉以降である。

柱穴列3は、柱穴列2の南側、石組溝3の下層で検出した。残存長は5.9mを測るが、掘り方は30～60cmとばらつきがある。石組溝3の南側石積下層で検出されていることから、時期は、17世紀前葉以前に遡ると思われる。

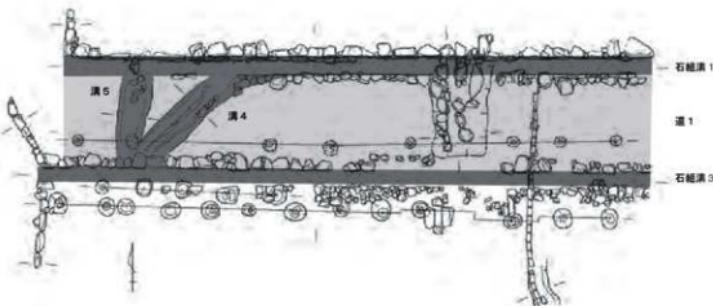
柱穴列4は、石組溝3の南に接して検出した東西方向に延びる柱穴列である。12間からなり、柱間は63～228cmと開きがある。検出状況から、南側屋敷地の北端を画する柵列であろう。一部の柱穴を石組溝3の石材の下から検出しておらず、時期は17世紀前葉以前と考えられる。

柱穴列5は調査区南側の中央、土坑36・39を切り込む状況で検出した。全長は5.2mを測る。掘り方は15～30cmと浅く、屋敷地内を区画する小規模な柵列のようなものであったものと推察される。時期は、土坑39を切ることから18世紀前半以降であろう。（和田）

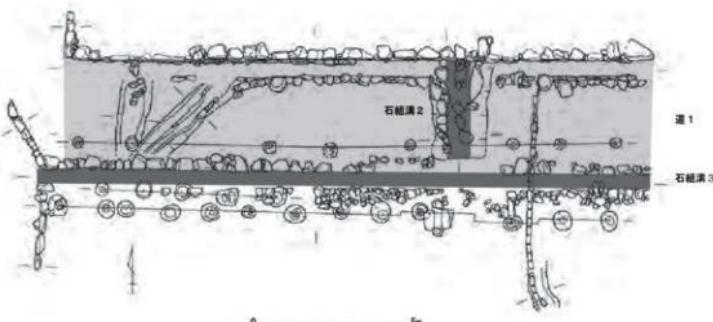
前期段階



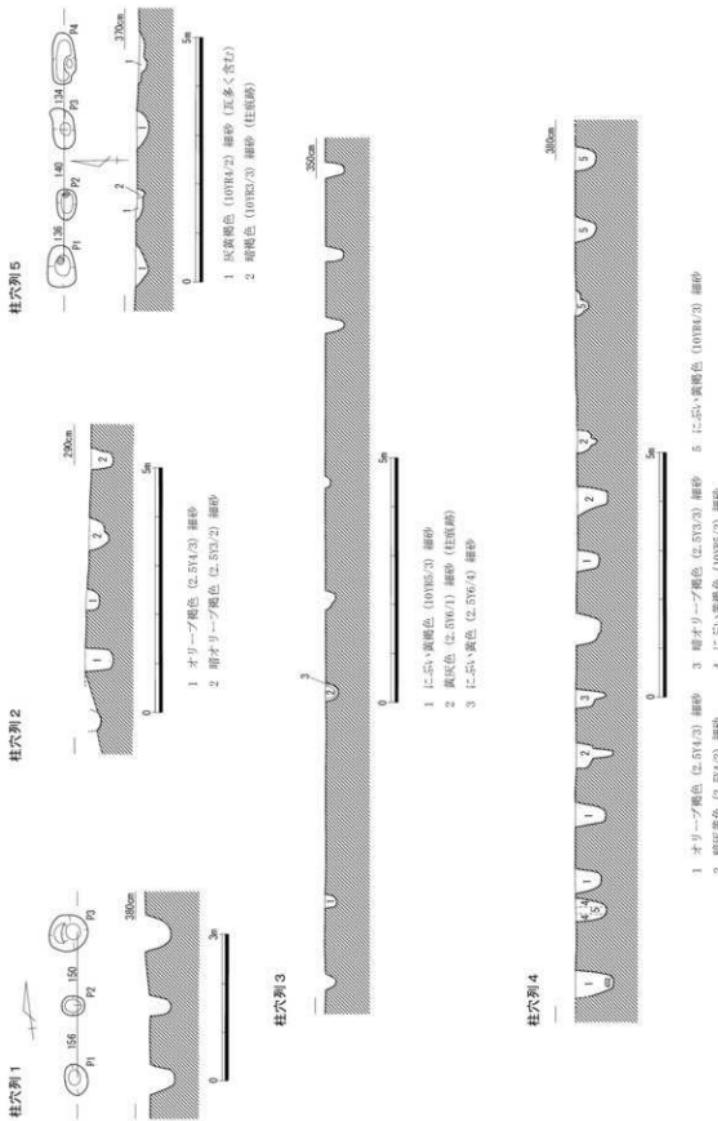
中期段階



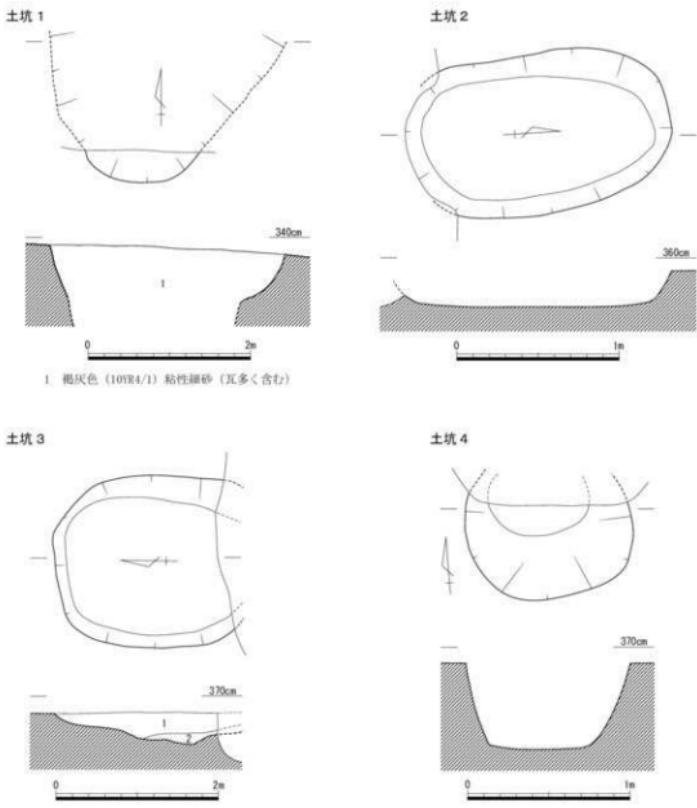
後期段階



第12図 道1周辺遺構変遷図 (1/150)



第13図 柱穴列 1～5 (1/100)



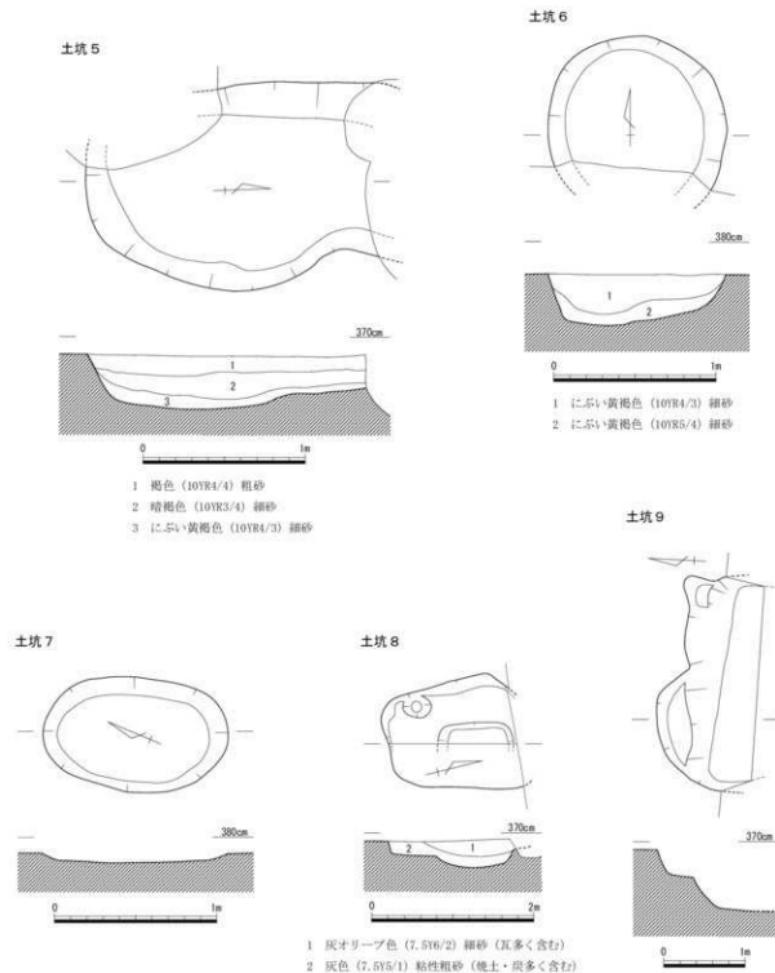
第14図 土坑 1～4 (1/30・1/60)

土坑 (第8・14～22図、図版4-2・3、5-1・2)

調査区の全面で検出し、道1の北側と南側で時期的なまとまり等が見られる。すなわち、北側に位置する土坑1～18は17世紀前半代までに属するものが多く、南側に位置する土坑23～41はおおむね19世紀代に属するもので、それらの多くが磨芥等の廃棄土坑と考えられる。また、道1に重なる土坑19～22は、道の造成途中に掘り込まれたものと、一部19世紀代のものがある。

道1の北側に位置する土坑のうち、土坑1～3は調査区北端付近にまとまるものである。土坑内からは陶磁器類や瓦、動物遺体など多量の遺物が出土し、これらの遺物から土坑1と2は近世末、土坑3は17世紀末～18世紀前半代の時期に属すると考えられる。

土坑4～7は調査区北西隅に位置する。土坑内からは陶磁器や炻器、土器と動物遺体等が出土して

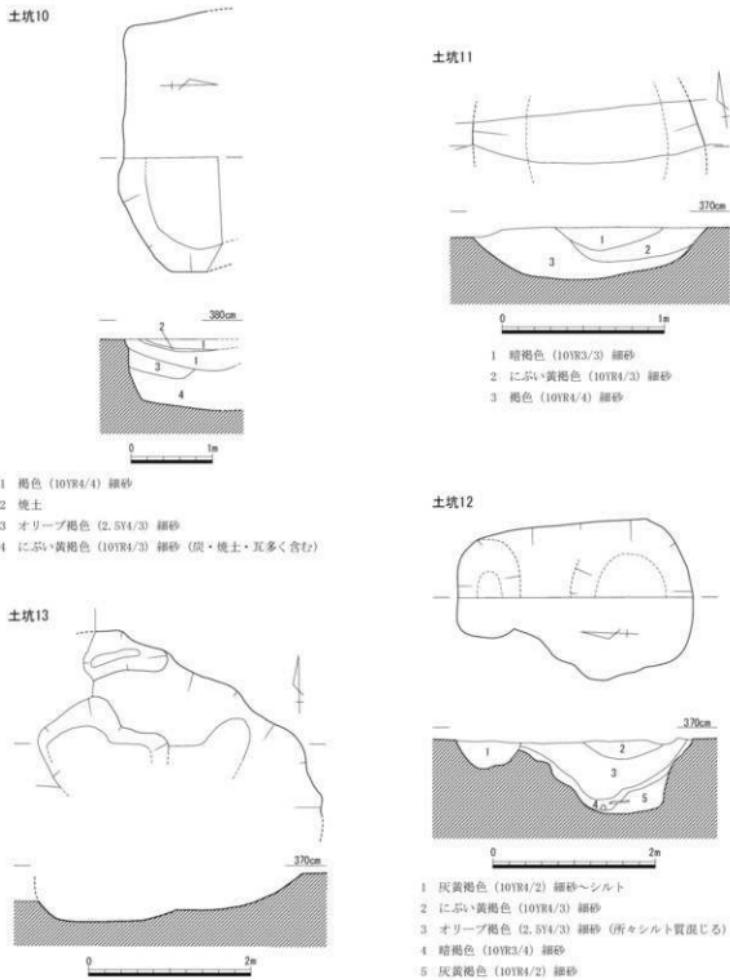


第15図 土坑 5～9 (1/30・1/60)

いる。掲載遺物では、唐津の皿40が土坑4、土師器82と85が土坑5からの出土である。

土坑9は、土坑8の西2mに位置し、長さ267cm、深さ76cmを測る大形の土坑である。肥前の陶器椀31のほか、備前焼の擂鉢や徳利、土師器皿等が出土している。

土坑10は、土坑9の西1.5mに位置し、長さ318cm、深さ90cmを測る大形である。多量の瓦とともに、

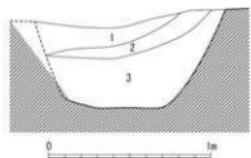
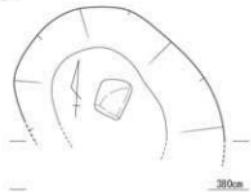


第16図 土坑10~13 (1/30・1/60)

土師器皿86・87・90のほか唐津の椀や焼塩壺、動物遺体等が出土している。

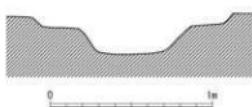
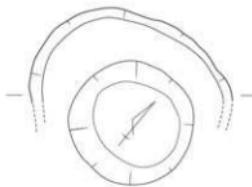
土坑12は、調査区東端に位置し、土坑8の南に接して検出した。この場所は、堀1埋没後の近世城下造成地点に当たる。長さ249cm、幅191cm、深さ90cmの隅丸方形を呈する大形土坑で、景德鎮の磁器碗17、唐津の皿35~39、土師器鍋98のほか、底面近くから出土した軒丸瓦R8、丸瓦29・30がある。遺物の時期は、16世紀末~17世紀初頭に属するが、これは近世城下の形成時期の下限に近いものと考

土坑14

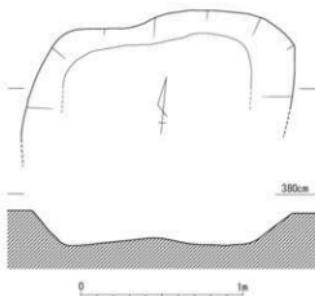


- 1 浅黄色 (2.5Y7/3) 砂面にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細砂
 2 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂面にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細砂
 3 灰色 (5Y5/1) 細砂

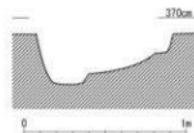
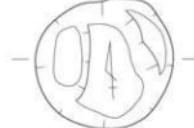
土坑15



土坑16



土坑17



第17図 土坑14~17 (1/30)

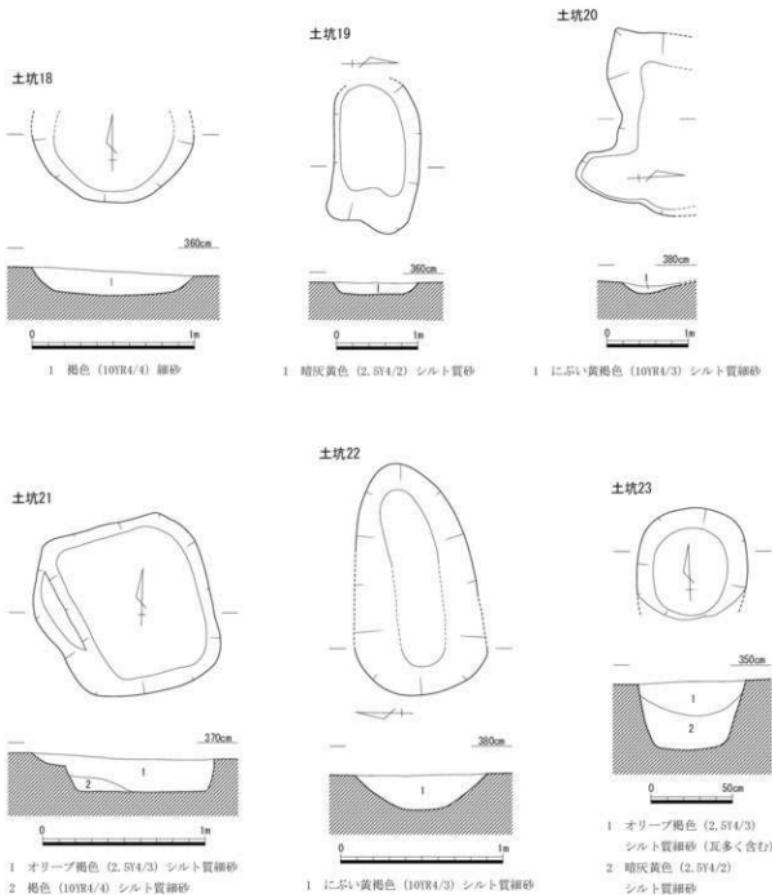
えられる。

土坑13は、土坑10・11の南側1~2mに位置し、長さ350cm、幅225cm、深さ48cmの不整形を呈する大形土坑である。多量の瓦とともに陶磁器や動物遺体等が出土している。

土坑14は、調査区西端に位置するもので、溝1と2と重なり、それらよりも古い。掲載遺物は備前播鉢62がある。

土坑15は、土坑12の南西1mに位置し、石組溝1に近接する。底面が2段に落ち込み、鞆の羽口が出土しているが、詳細な時期は不明である。

土坑16は、土坑15の西側1m、石組溝1に接して検出した。石組溝2が始まる地点の北側に位置することから、石組溝1の北側屋敷から石組溝2へ排水する枠等の役割が想定できる。



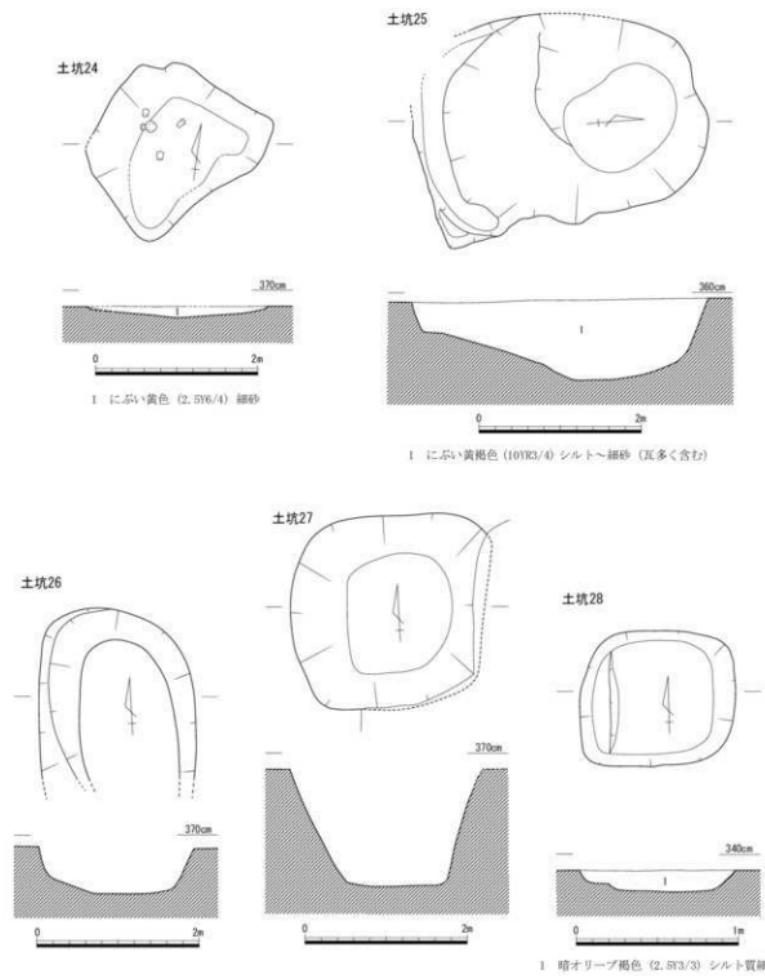
第18図 土坑18~23 (1/30・1/60)

土坑17・18は、土坑13と石組溝1間に位置し、いずれも17世紀初頭の遺物が出土している。

道1の南側に位置する土坑は、17世紀後半～18世紀前半に属する土坑39を除き、ほとんどが19世紀代と考えられる。長さ2m以上、深さ1m前後を測る大型が多く近接する位置にあることから、連続して掘削された廃井等を廃棄した土坑群と考えられる。土坑25～27は、いずれも石組溝3と1.8mの間隔を保つなど、その検出状況は屋敷地内の空間利用の実態を示すものと考えられる。

土坑24は、暗渠1や溝6を切るもので、長さ222cm、幅204cm、深さ34cmの不整方形を呈する土坑である。図示した土師器Ⅲ89・91、焼塙壺93～95のほかに植物遺体を多く含む。

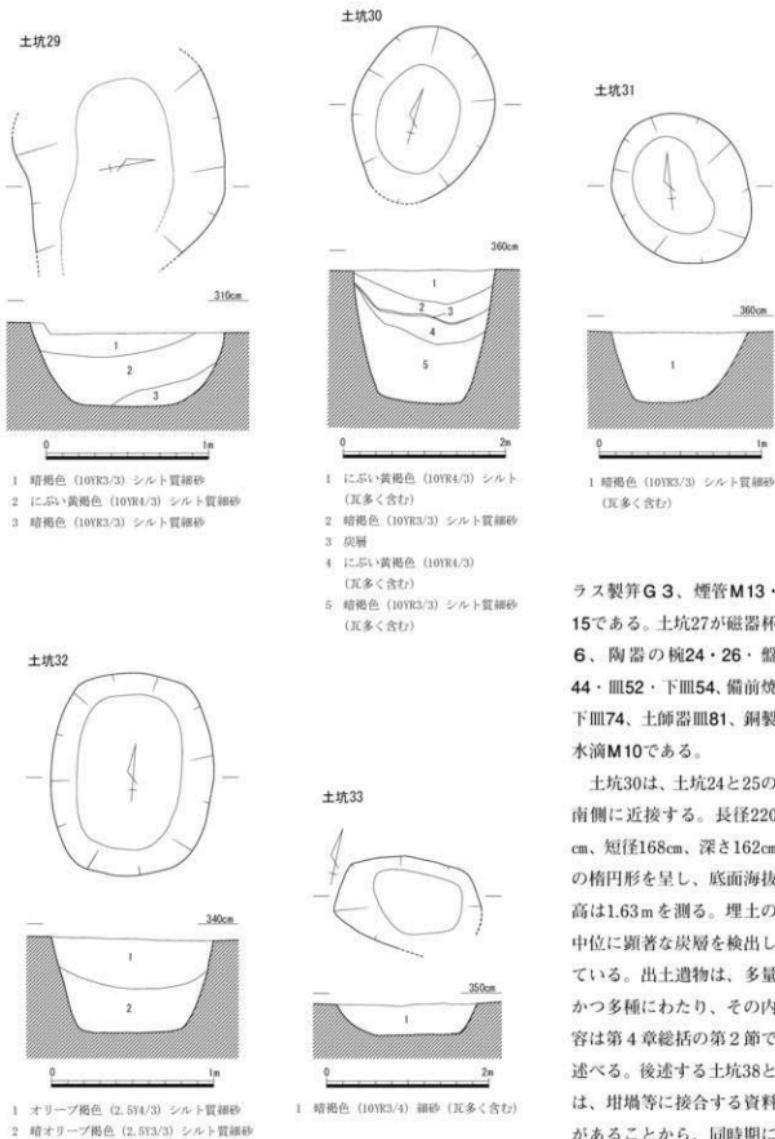
土坑25は、長さ363cm、幅257cm、深さ96cmの長楕円形を呈する大型土坑である。多量の陶磁器、瓦



第19図 土坑24~28 (1/30・1/60)

類とともに貝や帆魚骨、炭や焼土塊等が出土した。肥前磁器の碗4と紅皿5、瀬戸・美濃の猪口13、青磁瓶16、信楽などの陶器の楕25・27・33、土瓶46、壺50、備前焼の匣鉢59、油皿や下皿70・72・73・75、軒丸瓦R2・3、銅錢の寛永通宝M1・2・5・6、銅製の毛抜きM17等がある。

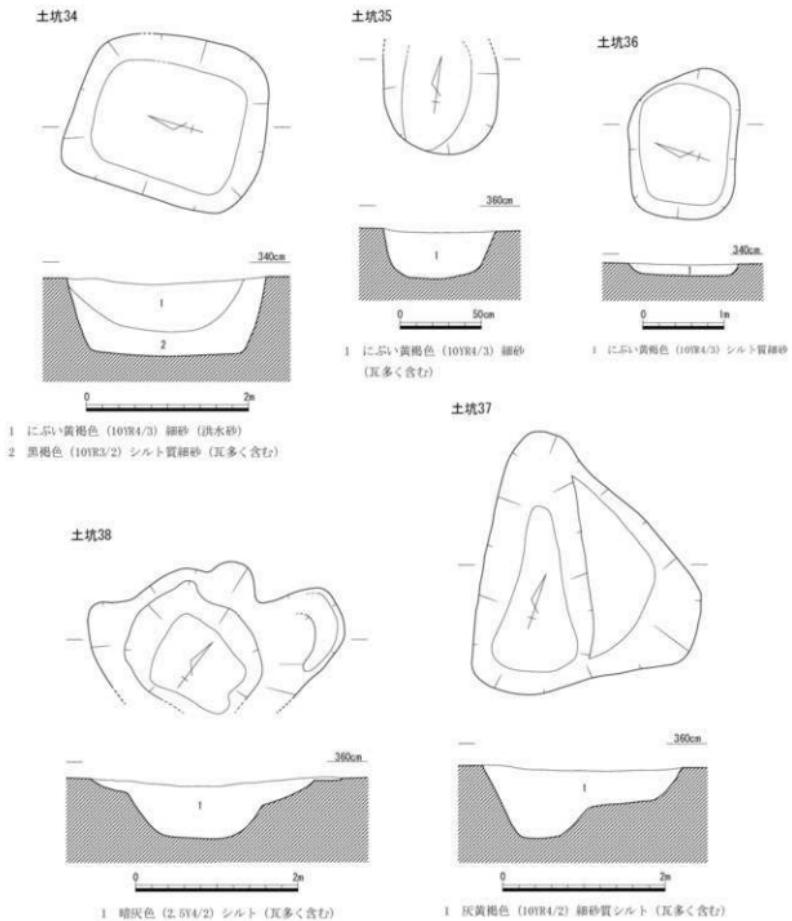
土坑26・27は、土坑25の西側に接する大形土坑である。一部が重なるが前後関係は不明で、短期間に連続して掘削されたと考えられる。両土坑とも多量の陶磁器や瓦類が出土している。掲載遺物は、土坑26が京系陶器の皿42・盤43・火入れ51、陶器瓶49、備前焼油皿71、硯S1・2、碁石S6、ガ



第20図 土坑29~33 (1/30・1/60)

ラス製笄 G 3、煙管 M13・15である。土坑27が磁器杯 6、陶器の椀24・26、盤44・皿52、下皿54、備前焼下皿74、土師器皿81、銅製水滴 M10である。

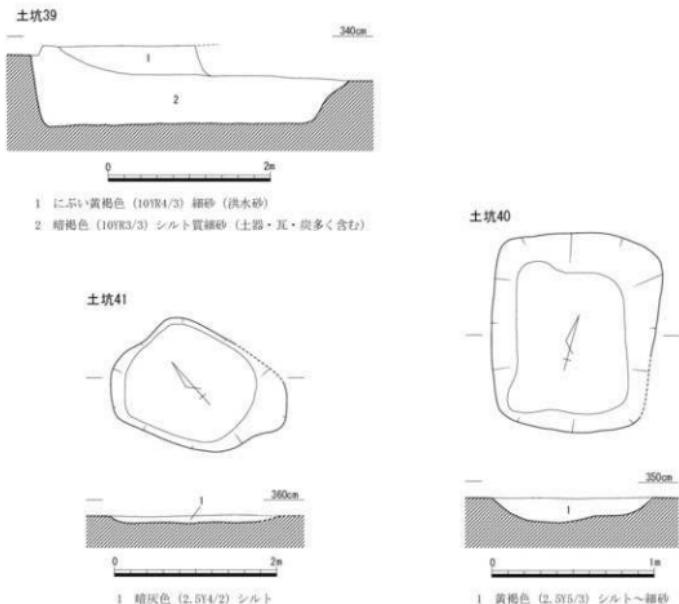
土坑30は、土坑24と25の南側に接続する。長径220cm、短径168cm、深さ162cmの楕円形を呈し、底面海拔高は1.63mを測る。埋土の中位に顯著な炭層を検出している。出土遺物は、多量かつ多種にわたり、その内容は第4章総括の第2節で述べる。後述する土坑38とは、坩堝等に接合する資料があることから、同時期に廃棄された可能性が高いものと考えられる。



第21図 土坑34~38 (1/30・1/60)

土坑38は、調査区南東端で検出したもので、長さ310cm、幅196cm、深さ84cmの不定形を呈する。多量の出土遺物があるが、掲載したものは、いずれも関西系の磁器碗2、陶器碗23・29、備前焼徳利67、人形C10、切羽M7である。

土坑34は、土坑26・27の南側1.5mに位置し、長さ235cm、幅205cm、深さ96cmの隅丸方形を呈する。上層は洪水砂と考えられる砂層、下層は陶磁器と瓦類、動物遺体等を多量に含む層である。掲載遺物は、染付壺15、外面に金箔を貼る陶器碗41、備前焼皿57、硯S4、象牙製の印B6、銅錢の寛永通宝M3、銅製匙M18である。



第22図 土坑39~41 (1/30・1/60)

土坑37は、土坑34の南西側に近接する。長さ330cm、幅275cm、深さ85cmの隅丸三角形状を呈し、底が2段に落ち込むものである。多量の瓦類で充填された土坑である。

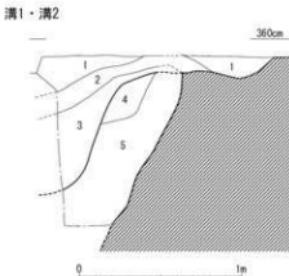
土坑39は、調査区の南端近くに位置する。その規模は、東西方向で23.6m以上、幅5.2m、深さ0.87mを測り、東端は調査区外に延びると考えられる。土坑33・34・37・38等と重なり、それらよりも古い。埋土は上下2層に大別され、上層は洪水、下層は瓦類を多量に含んでいる。掲載遺物は、軒丸瓦R5、軒平瓦R9、鳥食R14、土鍤C5、砥石S10、銅製金具M9である。出土遺物に17世紀後半～18世紀前半代のものがあることから、近世末の土坑群とは異なる時期が与えられる。
(高田)

埋甕1 (第8・23図)

調査区東端の土坑12と石組溝1間で検出した遺構である。底部を打ち抜いた瓦質の甕99を据え付けるもので、検出時は甕の下部のみが残り、口縁部等は内部に転落した状態であった。据え付けるための掘り方は甕の径にほぼ等しく、底面の海拔高は3.43mを測る。

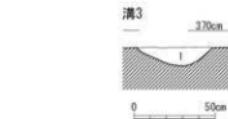
第23図 埋甕1 (1/20)

(高田)



- 1 黄灰色 (2. 5Y6/1) 粘性微砂 (溝2 埋土)
- 2 浅黄色 (7. 5Y7/3) 粘土斑明黄褐色 (2. 5Y7/6) 粘性微砂 (溝2 埋土)
- 3 明灰黄色 (2. 5Y5/2) 粘性微砂 (溝1 埋土)
- 4 灰黄色 (2. 5Y7/2) 粗砂 (溝1 埋土)
- 5 黄灰色 (2. 5Y5/1) 粗砂 (純土多く含む、溝1 埋土)

第24図 溝1～3 (1/30)



1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト質細砂

その他の溝 (第8・24図)

ここでは道1との関連性が薄いと思われる、その他の溝について述べる。

溝1は調査区西端を南北に貫流する。検出長は約3.7mで、検出面からの深さは約1mであるが、完掘しておらずこれより深いものと思われる。検出状況からみて屋敷地境の溝かとも思われるが絵図に表記はない。後述する溝2に切られ、18

世紀後半の肥前皿を含むが混入の可能性が高く、掘削時期は近代まで下る可能性がある。

溝2は溝1の上層で検出した。溝1と同様に調査区西端を南北に貫流し、検出長は約9.6mを測る。溝底は調査区外にあると見られ、深さは不明である。また、江戸時代を通じて絵図に描かれている道1を切っている。そのため掘削時期は近代に入り、岡山市街地の整備が進んで以降のこととみられる。なお、織部の向付45が出土しているが、混入と思われる。

溝3は調査区東端、道1のほぼ中央で検出した。検出長は約2.5m、検出面からの深さは約10cmである。東端は道1の中途から始まり、西端は土坑21に接続して終結することから、常時水が流れていたとは考えにくい。周辺の土坑同様、洪水時などに形成された水溜まりのようなものと考えるのが自然である。時期は検出レベルから19世紀代まで下るか。

(和田)

堀1 (第25~27図、巻頭図版1、図版6)

堀1は調査区の北東から南西にかけて鍵形に検出したものである。堀1は調査地全域に広がる江戸時代初頭から幕末までの屋敷地に広がる構造を検出し、掘り下げ後、基盤層となる粗砂と粘土粒からなる造成土層 (第5図第26層) と、洪水砂層 (第5図第27層、第27図第1層) を掘り下げた後に検出している。従って、この地点の近世の屋敷地は堀1の埋没後に形成されたことが判明する。

堀1は、隣接する県庁舎のある調査区北方向から続き、調査区のほぼ中央で西方向へ向かって直角に向きを変えている。検出した堀1の肩口の長さは南北方向に約18m、東西方向に約10mである。堀1の面積は調査地全体の面積のおよそ3/4を占めている。南北方向に続く部分では西肩口を検出したのみである一方、東西方向に続く部分でも北側肩口を検出したにすぎず、検出幅も南北方向部分では約11m、東西方向部分では約27mを測る。

この堀1により区画された北西側の高地部分は、後述するとおり造成土で嵩上げされており、堀1掘削段階ではその上面に生活面があったかと思われる。第27図第9~15層がこれに当たる。これが堀1機能時の屋敷地の基盤層となるものと思われる。なお、図示はできていないが、この地点にある土坑18からは慶長年間まで遡りうる景徳鎮の青花碗や唐津皿等が出土しており、初期岡山城下の町割の



第25図 近世遺構配置図2 (1/200)

一区画であった公算は大きいものと考える。

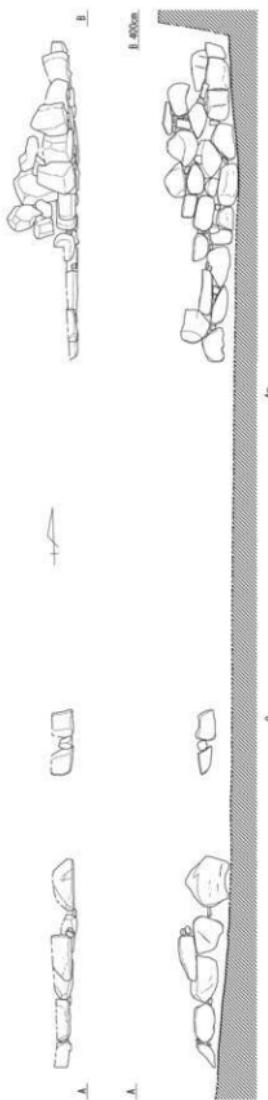
さて、堀1の西岸の肩口では南北方向の石積を検出している。残存長は南北12.5mに渡る。縦じて北側の石積の残存状況が良く、南側部分はほぼ最下段のみが残存した状況であった。なお、石積の中央部分の間隙は近代以降の溝の掘り方による削平を受けて欠失していた。

石積最下段の基底の高さは海拔高2.8m～3.0mで、ほぼ水平である。天端高は北側で海拔高3.7～3.6mで、近・現代の造成土直下で検出できた。南側はおよそ海拔高3.4mで検出している。遺存高は最大で0.9mを測る。石積は最大で4段積となっており、平均的には2～3段を数えるにすぎない。だが先述したとおり石積上部については削平を受けている可能性が高く、實際はこれより高かったものと推察される。

築石は花崗岩の荒削り材が主体であるが、一部に丸みを帯びた自然石も用いられている。また、最大長でも60cm程度を測るに過ぎず、平均的には30～40cmとなり小振りの石を用いている。矢穴を穿つ石は一切見られない。石積みに当たっては広口積、小口積を交えながら積んでいるものの、平面的な石積面を形成している。また、築石の安定のため、石と石の間に長さ10cm程の角礫、円礫からなる間詰石を用いた箇所が散見される。

断面図（第27図）を見ると傾斜角は80°を測り、ほとんど垂直に近い。裏込めは石積面から測って奥に、平均で1.2mの範囲で施されている。裏込め中には栗石は一切見られず、粘性の微砂で埋め戻されている。また、埋土からは瓦片や磁器片などの遺物が一切出土しなかった。なお、石積はやや硬質の微砂層の上に構築されているが、胴木など、下部構造の存在の有無については確認できなかった。

縦じてこの石積は弱体であり、石積が堀内に溜まった水の防波堤となっていたとは考えにくい。検出状況から見ても、堀1の肩口を区画し、屋敷地を町割する機能を担っていたと考えるのが妥当であろう。これは堀1内部に當時水がどのように滞水していたかに関連がある。次にこれらについて述べていこう。

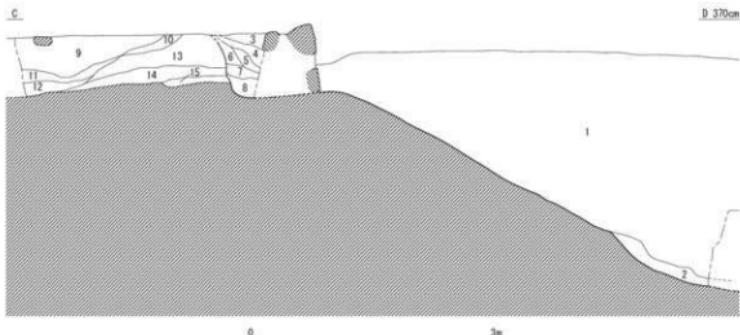


第26図 堀1石積(平・立面: 1/60)

断面図（第27図）を参照すると、最下層は青灰色のシルト（第2層）となっており、その上層には灰白色の粘土粒を含んだ黄褐色粗砂（第1層）が2.7mもの厚さで堆積している。黄褐色粗砂は均質で、表面にはラミナが形成されていた。これらのことから、洪水によって一時に埋まった状況を想定できるだろう。堀1は約30°の傾斜角を測るが、堀底に近い最下層の青灰色シルトの堆積が始まる海拔高1.2m付近で傾斜角が変わって、抉れたような形状をなす。堀1最下層は調査地北側では青灰色シルト、調査地南側ではオリーブ黒色粘土と灰黄色粘土の互層堆積となっていることから、水性堆積と考えられる。こうした状況から堀底付近は淀み状に滞水しており、浸食作用で抉れが生じたのであろう。以上から堀1は基本的には空堀であり、最深部のみに水が滞水していたと思われる。なお、第27図に見るとおり堀底は傾斜を続けており、堀1最深部は海拔高0.5mよりもさらに深く、調査区東外にあると推察される。

ところで、堀1が機能していた時期の堆積と考えられる堀底の互層堆積中から、漳州窯や景德鎮の磁器碗18~21、コピキA痕の瓦R2~27、鉄滓、V期の備前焼擂鉢60~61が出土している。この地点が堀1埋没後に屋敷地として造成されたのは、土蔵12から出土した絵唐津皿37の焼成年代（1590~1610年）を上限とする。このことから、堀1が機能していたのは慶長年間を遡って享和多期にかかり、埋没したのは16世紀末頃~17世紀初頭と考えられる。池田忠雄治世下に製作されたとされる『岡山古図』に描かれ、現在岡山県立図書館敷地内一部復元されている内堀は、位置関係から今回検出した堀1の北東に位置していると見られる。このことからも、今回検出した堀1が池田光政に絵図が引き渡された寛永9（1632）年までには埋没し、新たに内堀が掘削し直された証左と言える。

(和田)



- | | |
|--|---|
| 1 灰白色 (10YR5/1) 粘土粒斑黄褐色 (2.4Y5/4) 粗砂 (洪水砂) | 9 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂 |
| 2 青灰色 (5R5/1) シルト | 10 反白色 (10YR7/1) 粗砂 |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 黏性微砂 (堀1石積覆り方理土) | 11 楔灰色 (10YR6/1) 粘土ブロック斑にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粗砂 |
| 4 灰黄褐色 (10YR6/2) 黏性微砂 (堀1石積覆り方理土) | 12 反黄色 (2.5Y6/2) 粘土ブロック斑にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粗砂 |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性微砂 (堀1石積覆り方理土) | 13 黄褐色 (2.5Y5/4) 粗砂 |
| 6 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性微砂 (堀1石積覆り方理土) | 14 黄褐色 (2.5Y5/3) 粗砂 |
| 7 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 黏性微砂 (堀1石積覆り方理土) | 15 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粗砂 |
| 8 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘性粗砂 (堀1石積覆り方理土) | |

第27図 北壁断面 (1/60)

3 遺物

遺物は、大半が土坑からの出土である。多量の陶磁器類や瓦とともに、土製品、石製品、金属製品、ガラス製品、骨・象牙製品と、動物遺体等の食物残滓が出土している。また、堀1については、砂層から瓦類、最下層から輸入磁器と炻器や土師器、瓦、木製品が出土している。なお、大半を占める近世後半期の遺物については、その代表的なものを掲載している。

第28・29図には国産磁器を掲載する。碗1・2・4、湯呑3、紅皿5、杯6、白磁皿7、皿8・9、鉢10・11、段重蓋12、猪口13、小瓶14、壺15、青磁瓶16がある。これら掲載遺物はすべて、土坑25・30等調査区南半部の土坑から出土している。時期は、18世紀前半の碗1、17世紀末～18世紀初頭の手塙皿8以外は、18世紀後半～19世紀後半に属するものである。肥前磁器に加えて瀬戸・美濃と肥前系・関西系磁器がある。

第30図には輸入磁器碗を掲載する。17は土坑12出土、18・19・21は堀1の最下層出土、20は堀1の砂層出土である。また、17・18・21・22は景德鎮窯、19は漳州窯製で、18・19は16世紀後半、17・20・21は16世紀末～17世紀初頭に比定される。

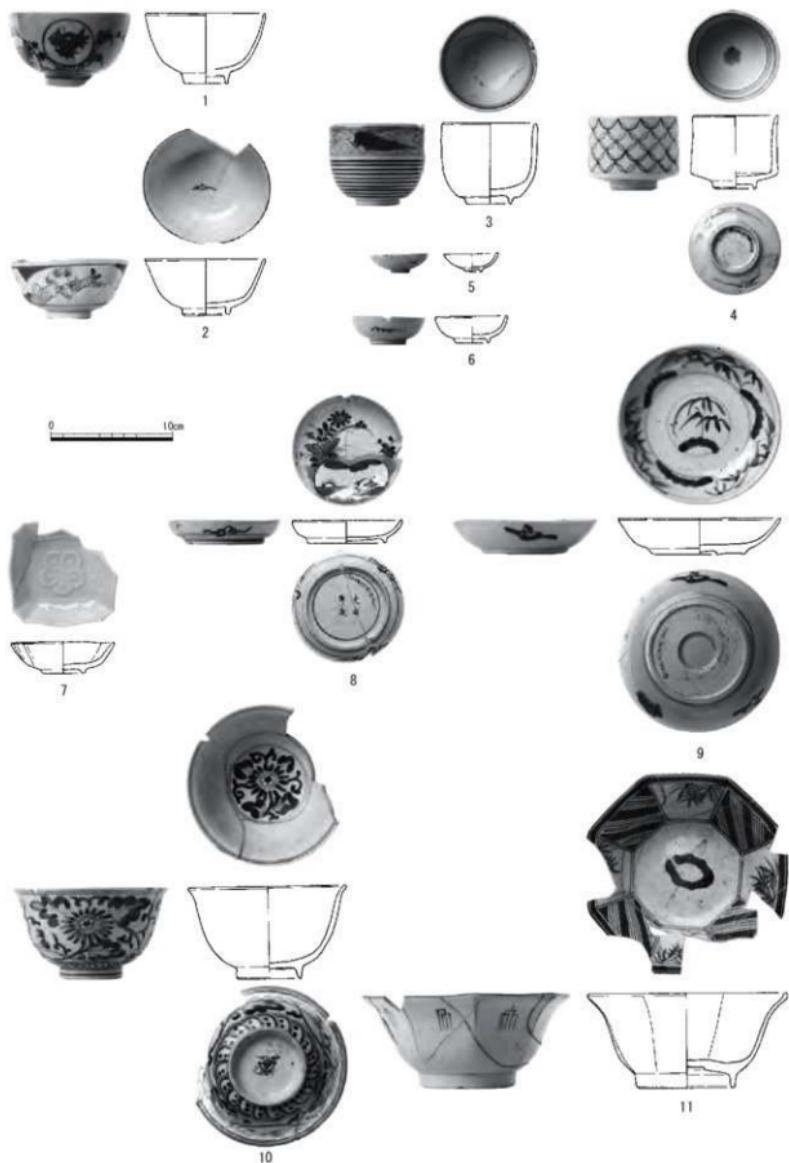
第31～33図には国産陶器を掲載する。椀22～34・41、皿35～40・42、盤43・44、向付45、土瓶46、鉢47・48、瓶49、壺50、火入51、灯火具の油皿52・53と下皿54、甕55である。このうち、調査区中央から北半部に位置する石組溝2、土坑9、溝2、土坑12、土坑4からの出土品については、椀と皿30・31・34～40は肥前及び唐津、向付45は織部である。また、それら以外については、調査区南半部に位置する土坑からの出土で、関西系や京系のものが多い。時期は、前者の肥前、唐津、織部が16世紀末～17世紀前半、後者の関西系や京系のものが概ね18～19世紀に属する。また、土坑12の唐津皿35～39は、口径12～14cmを測るもので、そのうちの36・37は見込みに胎土目を残し、37はさらに鉄絵を施す。椀41は外面に金箔を施す。55は丹波系の甕と考えられ、鉄釉の上に灰釉を流しかける墨流しが見られる。

第34・35図には炻器を掲載する。皿56～58、匣鉢59、擂鉢60～65、小型角徳利66、壺67、甕68、油皿69～71、下皿72～75がある。このうち、60・61は堀1の最下層出土、68は堀1の砂層出土で、62は土坑14から、63は土坑2からそれぞれ出土している。また、それら以外は調査区南半部の土坑からの出土である。皿56～58は型押しの煎餅皿である。擂鉢64・65は見込みに放射状の擂り目を施すもので、明石産と考えられる。

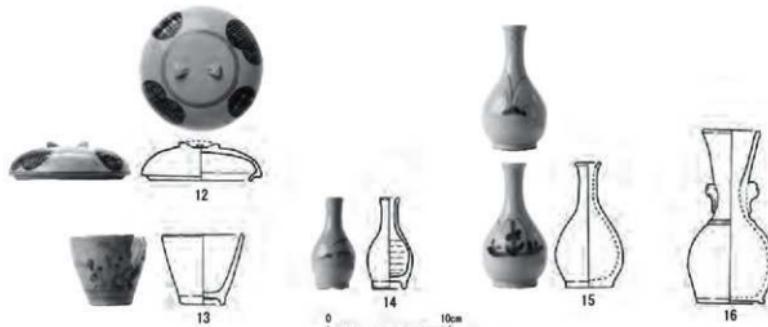
第36・37図には土器を掲載する。土師器皿76～91、坩埚92、土師器の焼塙壺蓋93と同身94・95、瓦質土器鍋96、土師器鍋97・98、瓦質土器甕99がある。このうち、76は堀1の砂層出土、77～80・97は堀1の最下層出土である。また、82・85は土坑5から、86・88は土坑10から、96・98は溝2から、99は埋甕1からそれぞれ出土している。それら以外は調査区南半部の土坑出土である。

堀1出土の皿は、いずれも底部に糸切を残すもので、煤が付着するものがある。堀1以外出土の皿も底部に糸切を残すものが多いが、86は板目を残す。焼塙壺94・95は、身の外面に壺塙屋を示す「難波淨因」を刻印する。身の成形技法は、芯の周りに粘土板を巻き付けて円筒を作り、その一端に粘土塊を詰めて底としている。また、甕99は口径54.6cm、底径64.1cm、高さは約70cmと考えられる大形品で、器表面に格子目叩きを施す大原焼と考えられる。底部を打ち欠き、胴部下半に内面から穿孔する。

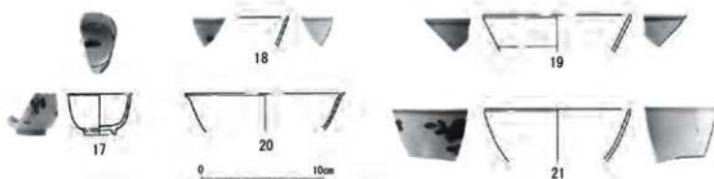
第38～44図には瓦類を掲載する。R1～8は軒丸瓦、R9～12は軒平瓦、R13・14鳥衾、R15・16



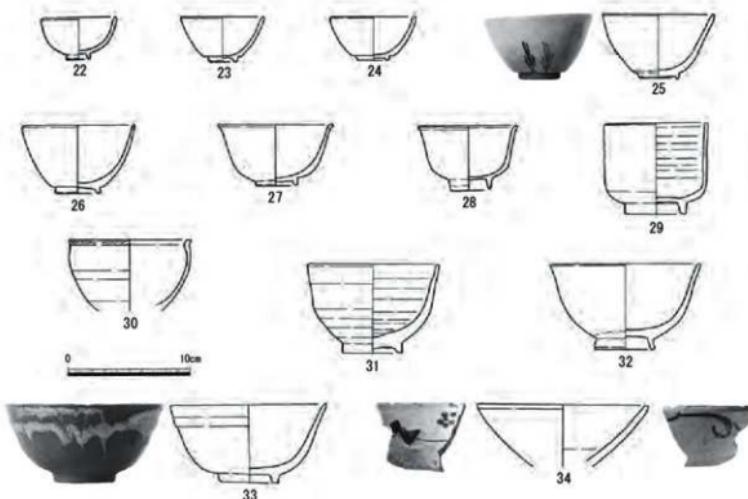
第28図 国産磁器 1 (1/4)



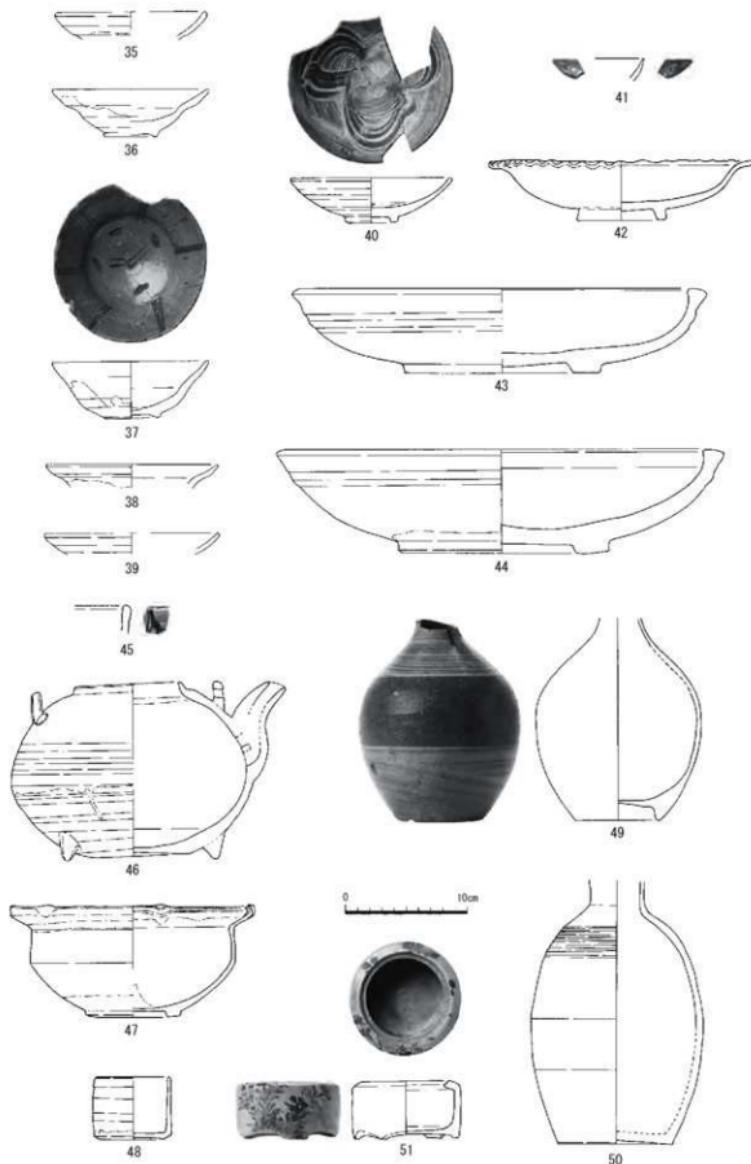
第29図 国産磁器2 (1/4)



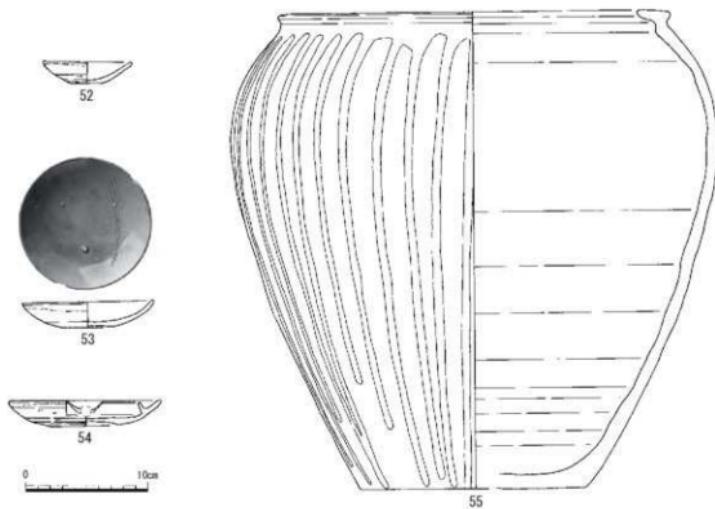
第30図 輸入磁器 (1/4)



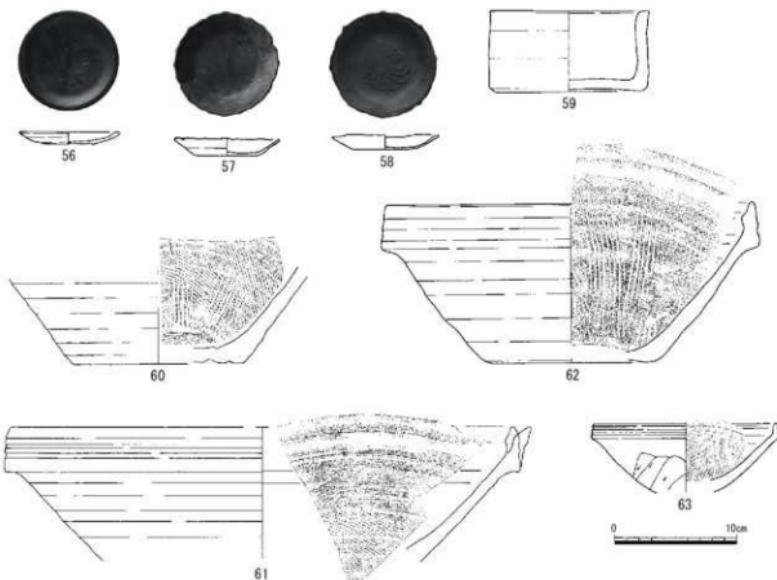
第31図 国産陶器1 (1/4)



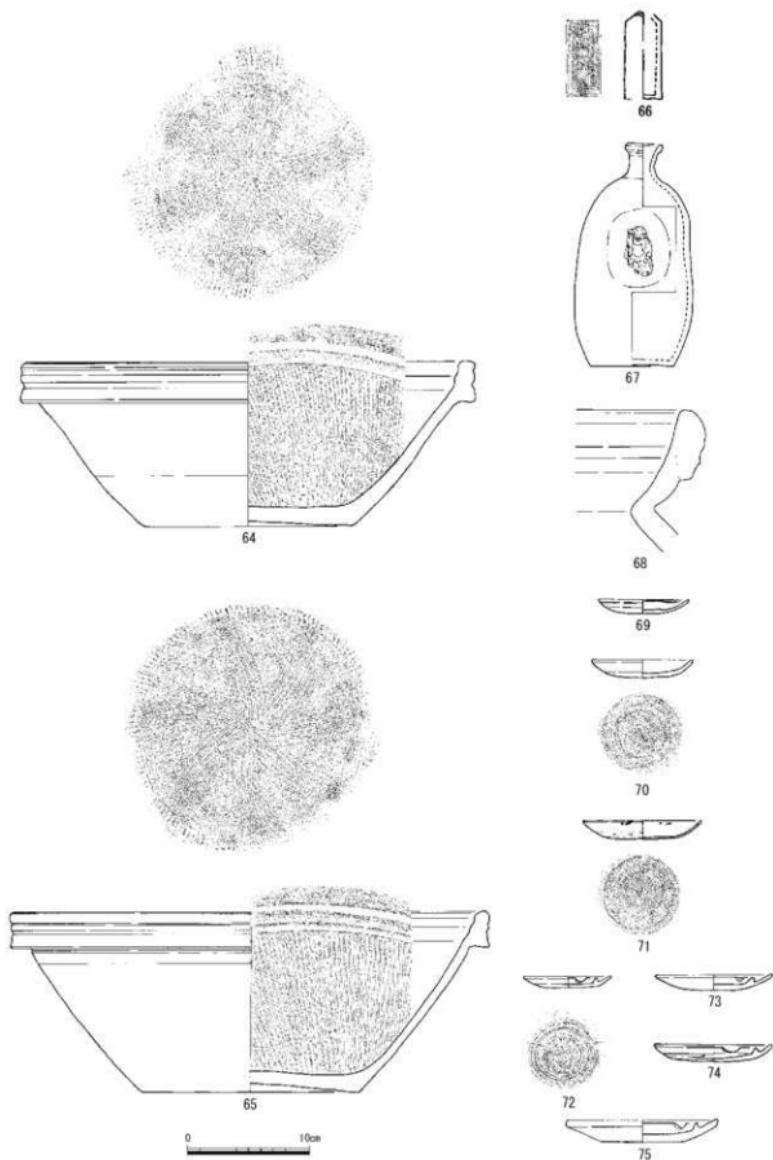
第32図 国産陶器2 (1/4)



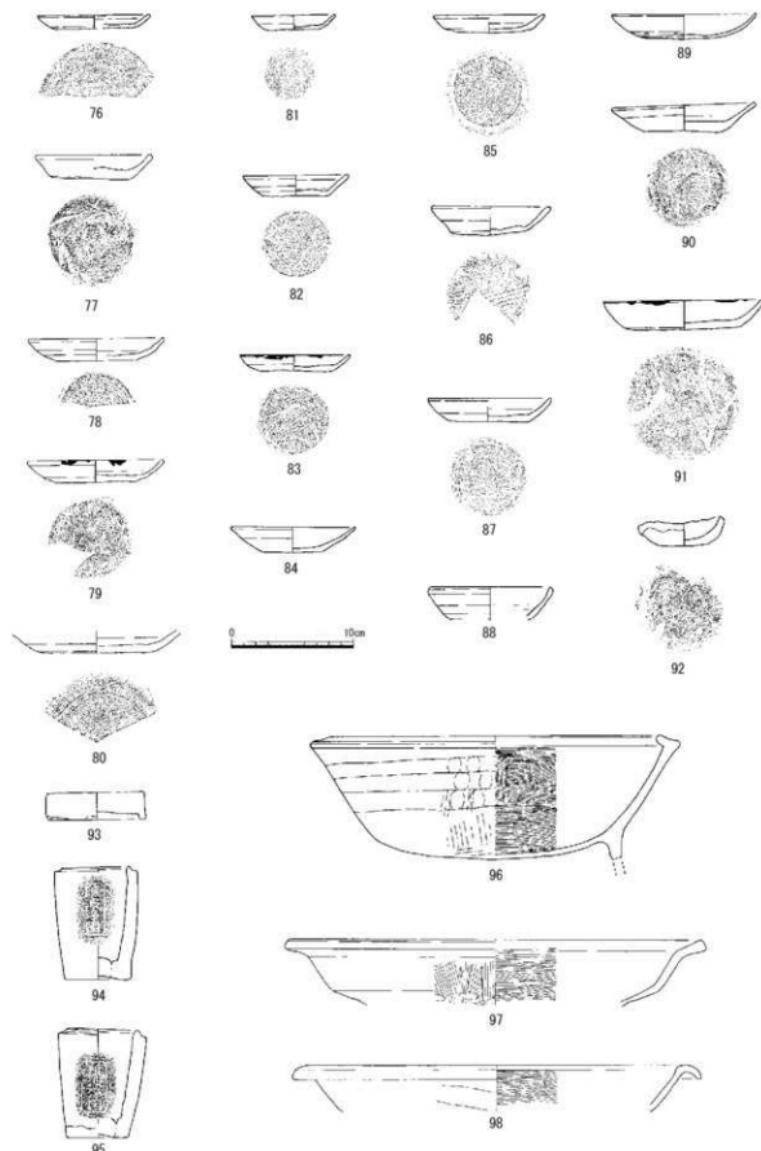
第33図 国産陶器3 (1/4)



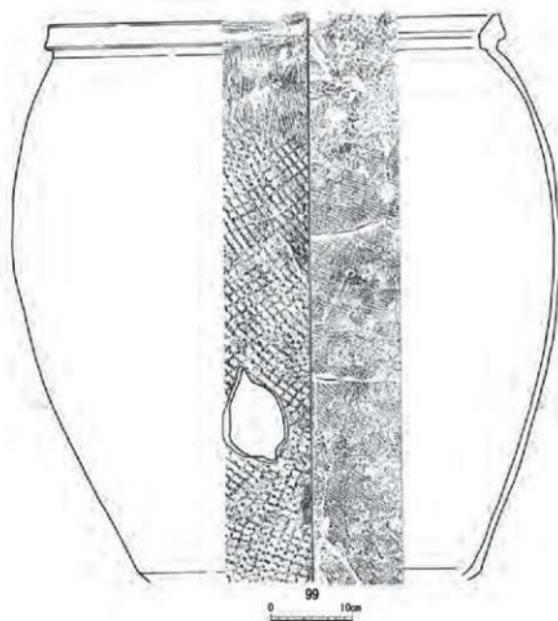
第34図 灼器1 (1/4)



第35図 灰器2 (1/4)



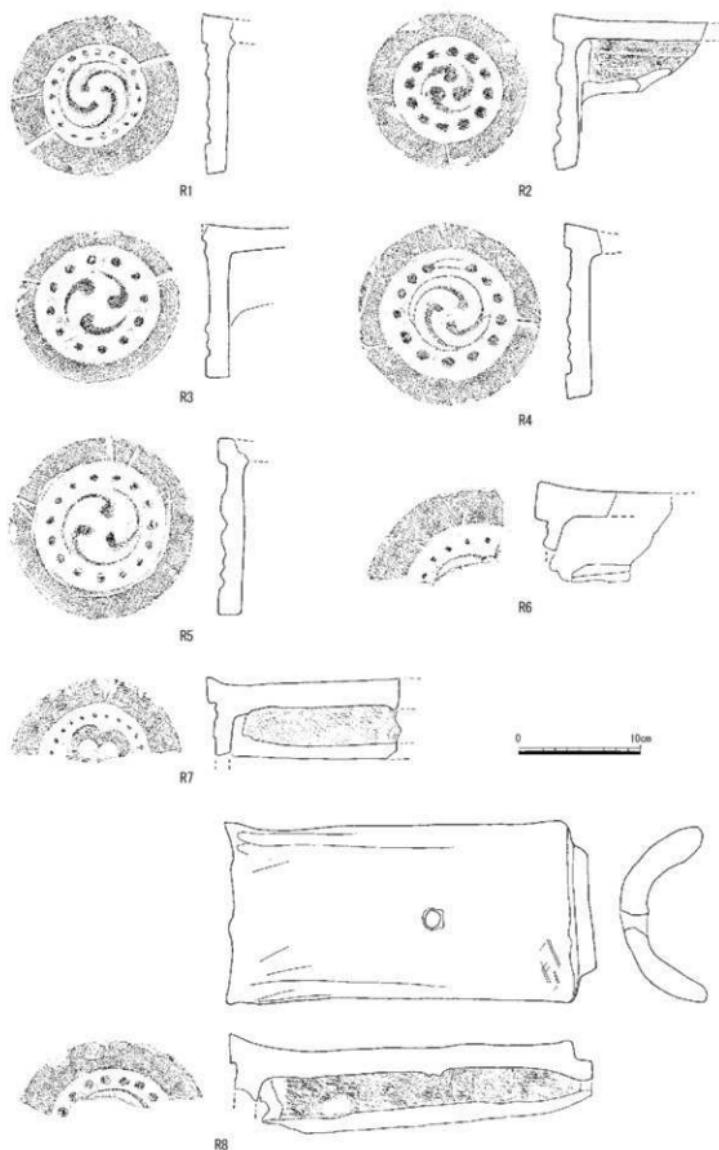
第36図 土器 1 (1/4)



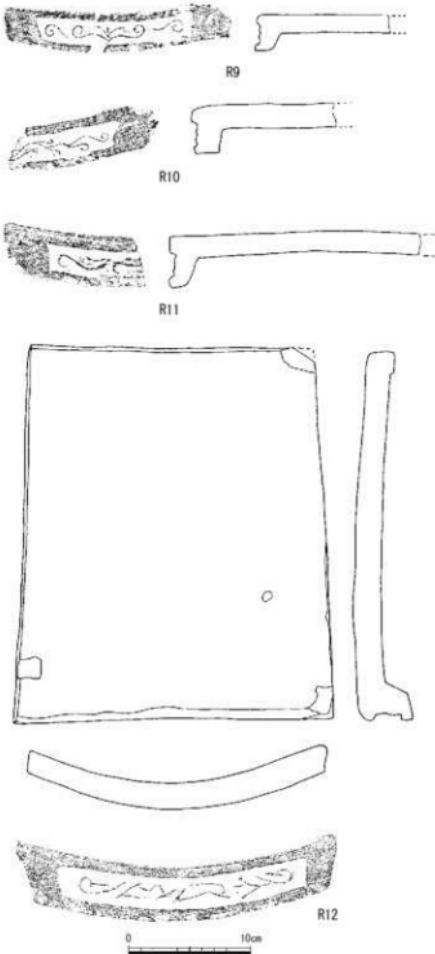
第37図 土器2 (1/6)

は棟込瓦、R17~21は鬼瓦、R22~30は丸瓦、R31~34は平瓦である。このうち、R1・6・7・10・11・13・17~20・22~24・26・27・31~33は、堀1の砂層からの出土、R25は堀1の最下層からの出土である。さらにR8・29・30は土坑12、R12は調査区東側側溝からの出土である。堀1からの出土瓦のうち確認できるものでは、内面コビキB痕を残すものは砂層出土のR13のみで、他はコビキA痕である。また、R22~25は吊り組痕が見られる。さらに土坑12から出土した瓦のうち、R8・30は内面コビキA痕を残し、R29はコビキB痕である。棟込瓦のうちR16は、二次的な焼成を受けており、図化をしていない同類の数破片も同様な状態であった。

軒丸瓦はR1が左三巴、R2~6・8が右三巴、R7は梅形文と考えられる。それらの珠文は、R1が19個、R2・3が12個、R4が13個、R5が15個である。平瓦はR9が三葉の中心飾りで唐草文、R10・11は唐草文である。R12は中心飾りのない変形文で、岡山城跡本丸中の段下層出土瓦に類似品がある¹。鳥衾R13は左三巴で珠文が17個、R14は右三巴で珠文が19個である。棟込瓦R15・16は左三巴である。鬼瓦R17~21はいずれも地板の裏面を削り込むものだが、仕上げた後の厚さは、厚手のR17・18と、薄手のR19~21とに大別される。R19~21は、深く削り込むことで周縁を形成している。また、R21は左三巴で、地板の裏面を荒く削り込み、その中央に削り込み把手をつくり出している。



第38図 瓦 1 (1/4)



第39図 瓦2 (1/4)

金属製品はすべて銅製で、調査区南半部の土坑からの出土品を掲載している。錢の寛永通宝のM1～6には、古寛永M1～3と新寛永M4～6の別がある。M7は印籠、M8は貴金具、M9は金具、M10は毛彫りを施す水滴、M11は切羽、M12は鎖金具の付いた笄と考えられる。M13・14は煙管の雁首、M15は同吸口である。また、M17は毛抜き、M18は匙である。M16は用途不明だが把手の可能性がある。

(高田)

第45図には土製品を掲載する。土管C1・2、錘C3～5、盤C6・7、人形類C8～14、ミニチュア製品C15～17がある。C1・2は、暗渠1に使用されていた瓦質の土管である。口縁部と先細りの尾部を入れ子に組いでいく筒形形式の専用材で、その焼成は17世紀前葉の瓦類と同質である。長さ29～30cm、口径14cm前後を測り、内面にはコビキB痕が残る。これらは、17世紀前葉の製作が考えられる²。人形類のうち、C8・10・11は陶製で彩色が施され、C13は磁器頭部、C14は泥面子である。C15・17は箱庭道具で彩色が施され、建物と灯籠の笠と考えられる。C16はままごと道具の陶器椀で彩色が施される。

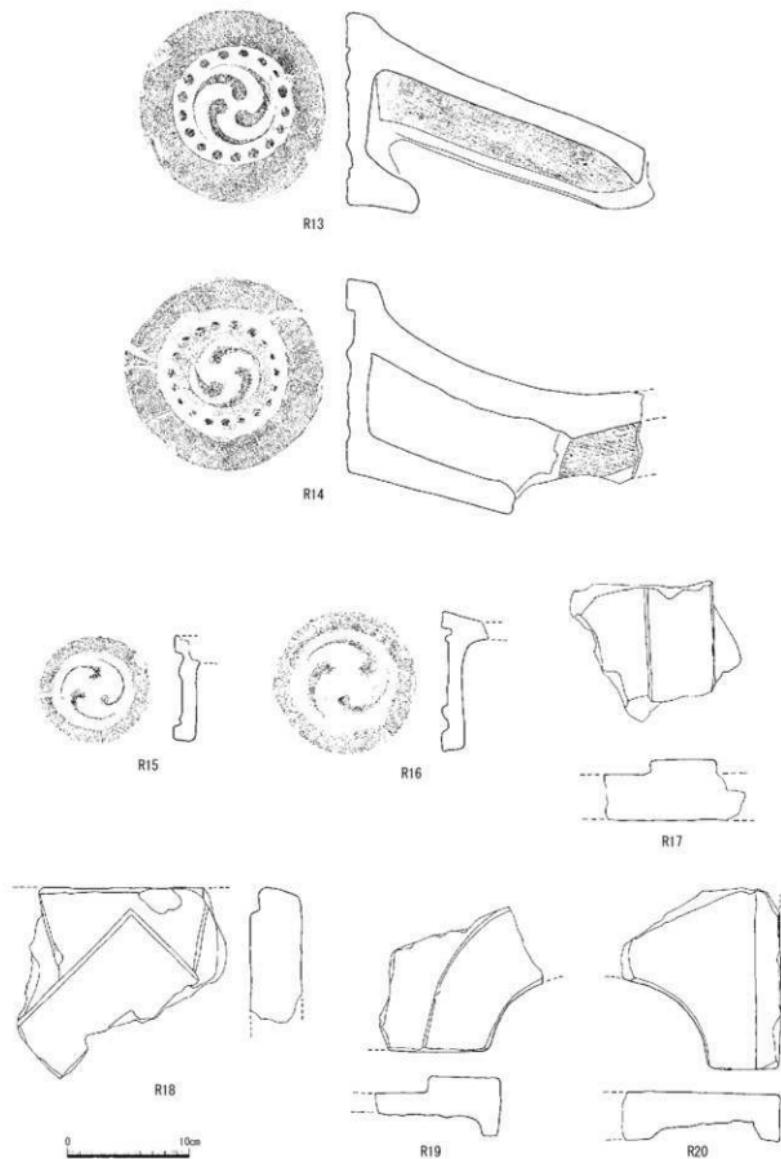
第46・47図には石製品を掲載する。S1～5は硯、S6は碁石、S7は五輪塔、S8は石臼、S9～11は砾石である。

第48図には木製品を掲載する。W1は内面朱、外面黒漆で仕上げた薄手の杯、W2は連歛下駄で、いずれも堀1最下層から出土している。

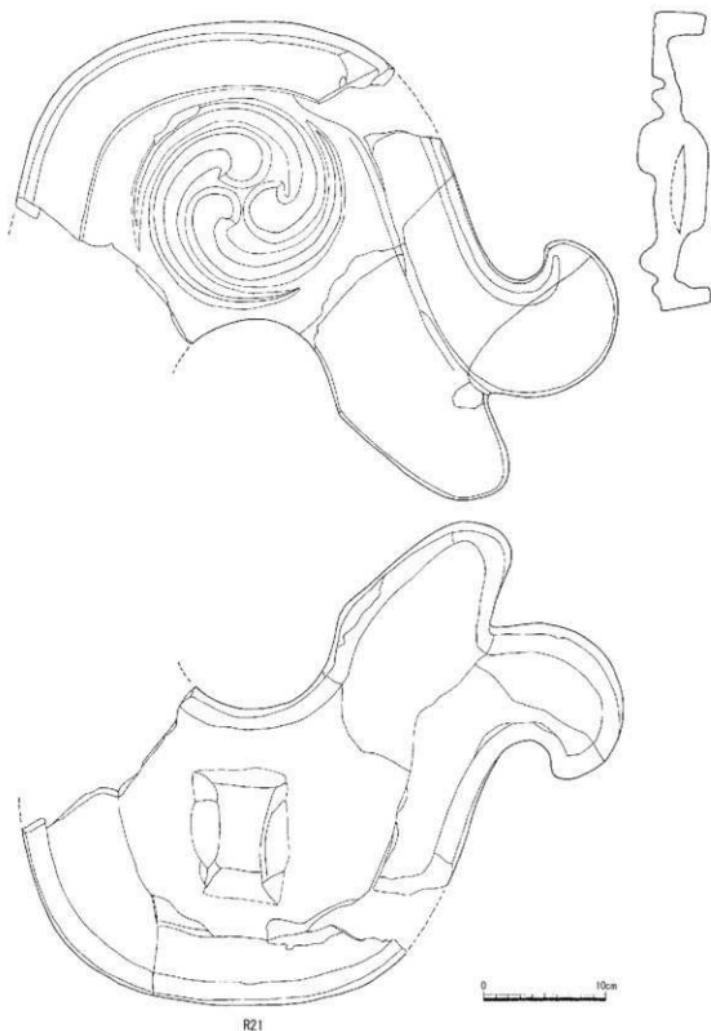
第49図にはガラス・骨・象牙・金属の各製品を掲載する。

ガラス製品G1～4はすべて笄と考えられる。

骨製品のB1・3は笄、B2は楊枝状、B4は刺突具と考えられる。また、B5は横櫛、B6は象牙製の印で印文は「實」である。



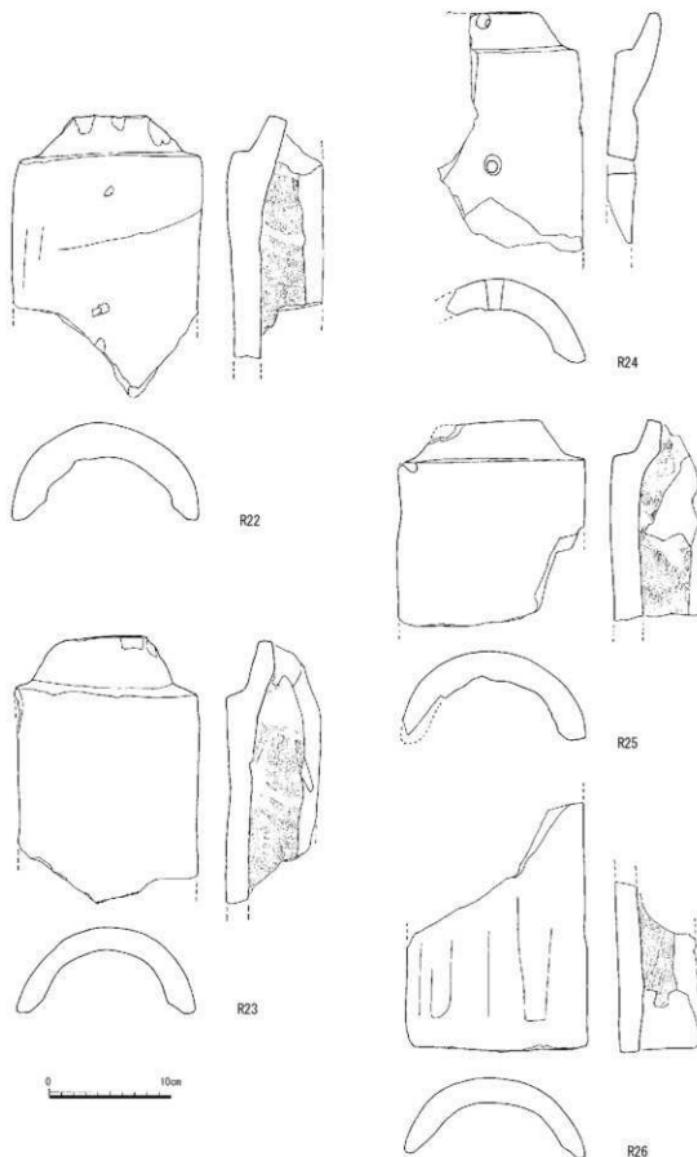
第40図 瓦3 (1/4)



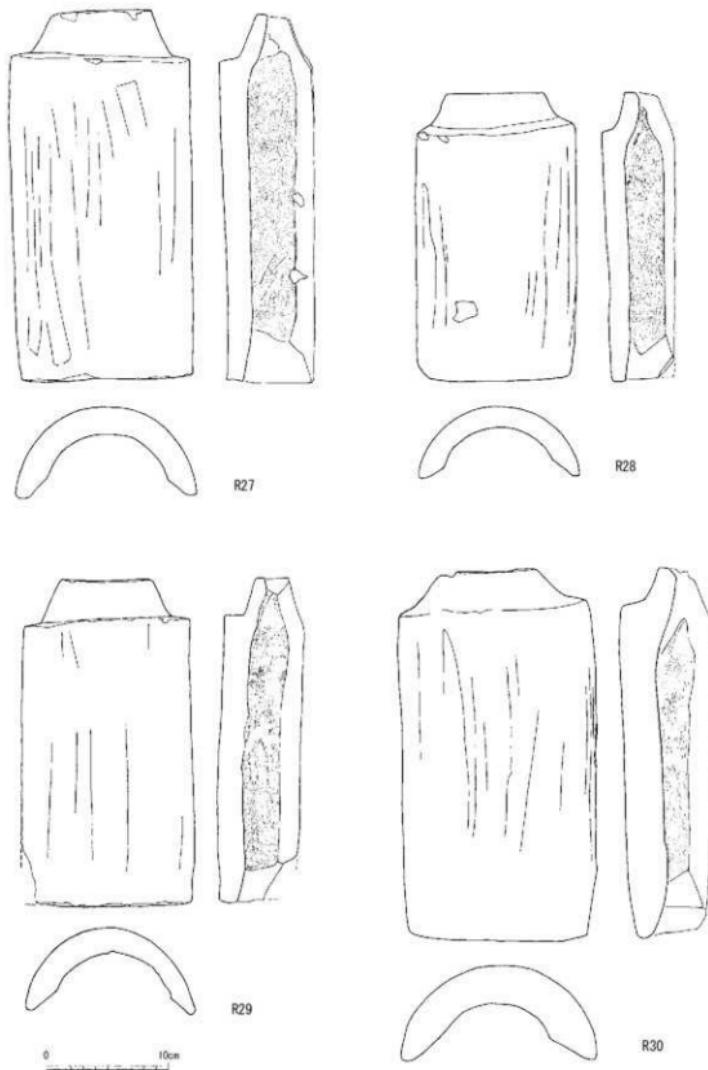
第41図 瓦4 (1/4)

第4節 中世以前の遺物

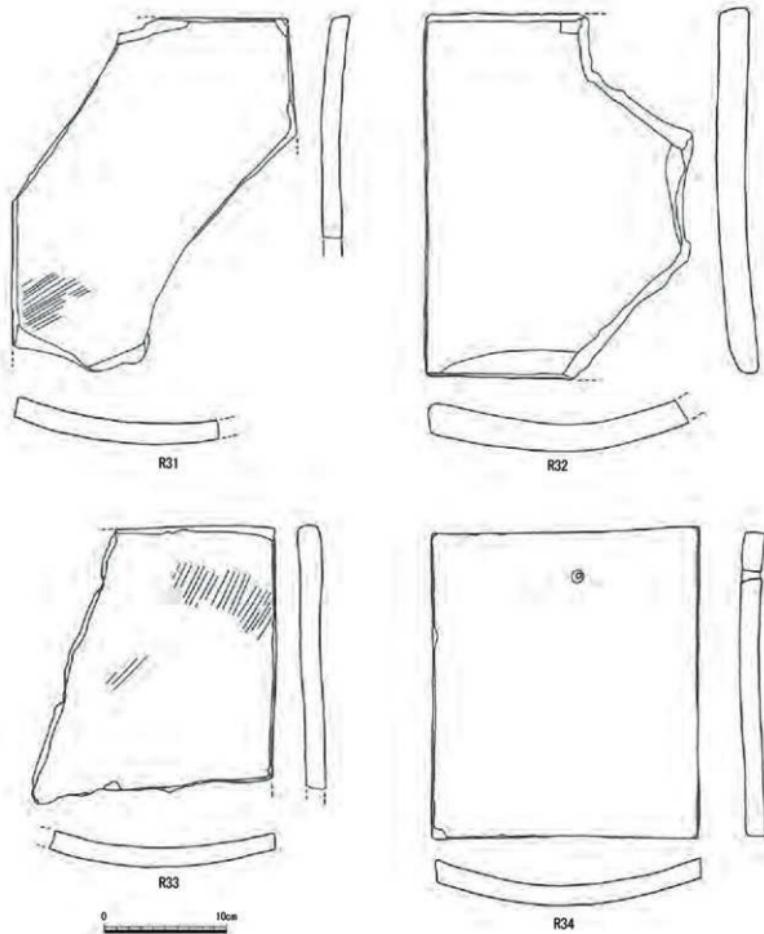
第50図には、中世以前の遺物を掲載する。全体に出土量は少なく、掲載した遺物以外には土師器碗



第42図 瓦5 (1/4)



第43図 瓦6 (1/4)



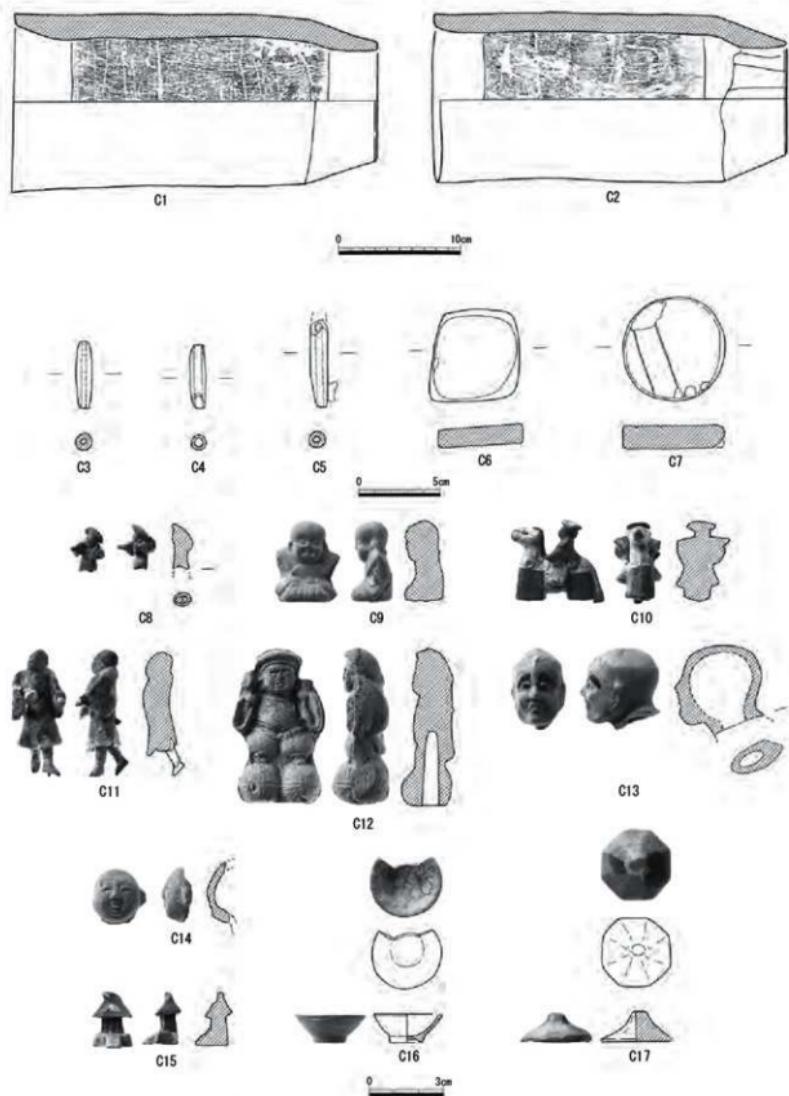
第44図 瓦7 (1/4)

の小片が見られる程度である。100は溝2出土、102は道1造成土出土、他は堀1出土であるが、いずれも磨滅が著しい。100は縄文土器の鉢、101と102は弥生土器の甕口縁と底部、103は須恵器の杯高台部、104は須恵器壺の肩と考えられる。また、105は円筒埴輪のタガ部分である。

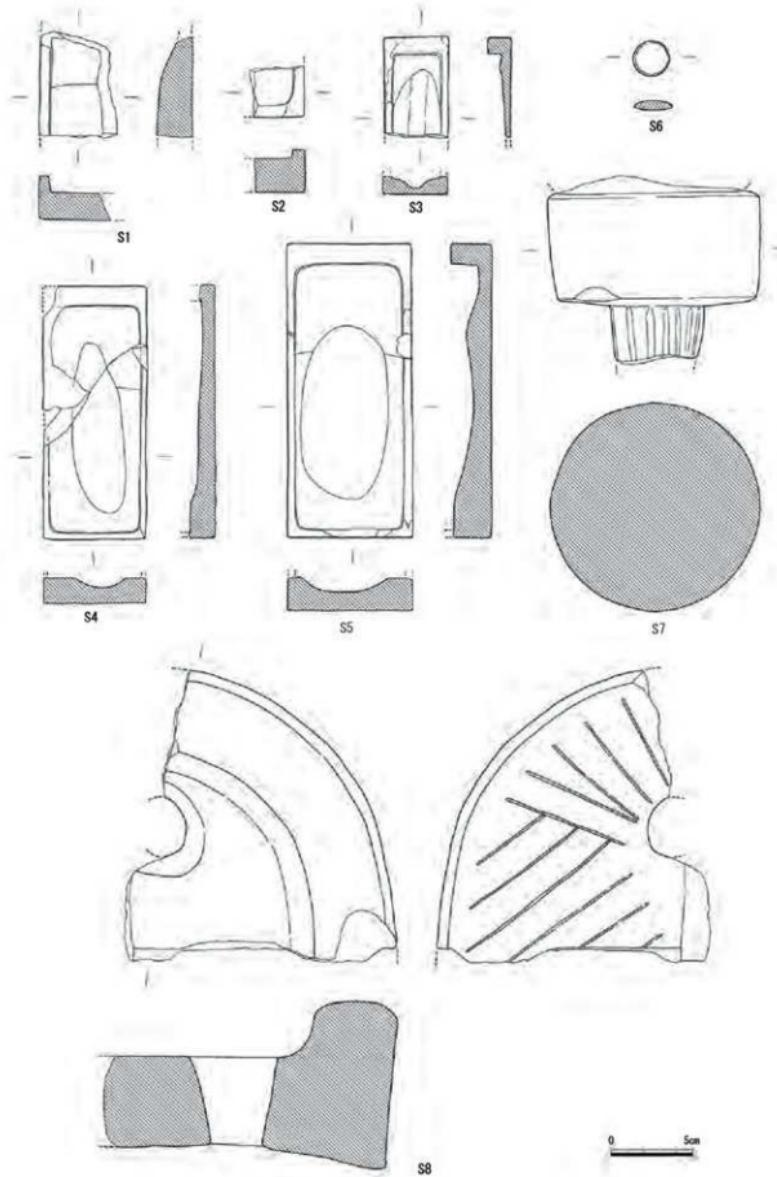
(高田)

註

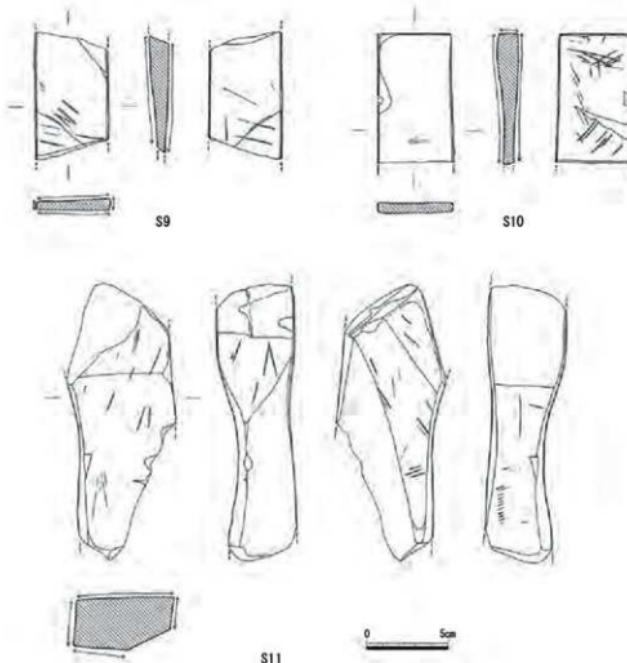
- 1 「史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告」岡山市教育委員会 1997
- 2 乗岡実氏の教示による。岡山城下での出土例として、以下の報告がある。
「岡山城三之曲輪跡 表町一丁目再開発ビル建設に伴う発掘調査」岡山市教育委員会 2002



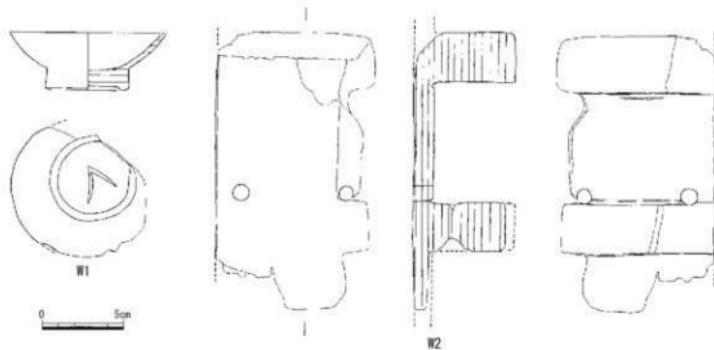
第45図 土製品 (1/4・1/3・1/2)



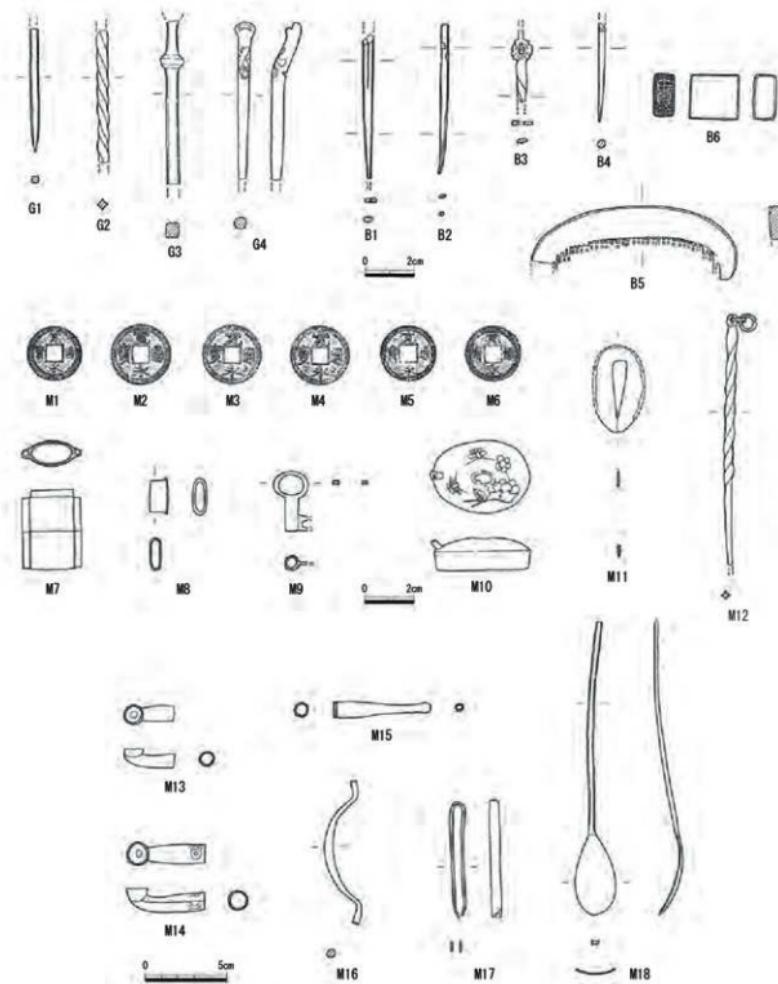
第46図 石製品1 (1/3)



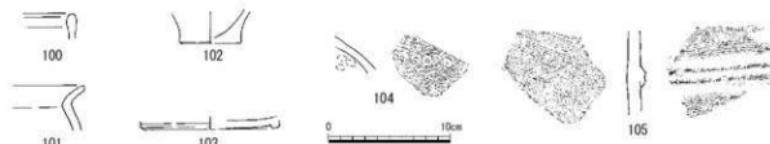
第47図 石製品2 (1/3)



第48図 木製品 (1/3)



第49図 ガラス製品・骨・象牙製品・金属製品 (1/3・1/2)



第50図 土器3 (1/4)

第4章 総括

第1節 遺跡・遺構について

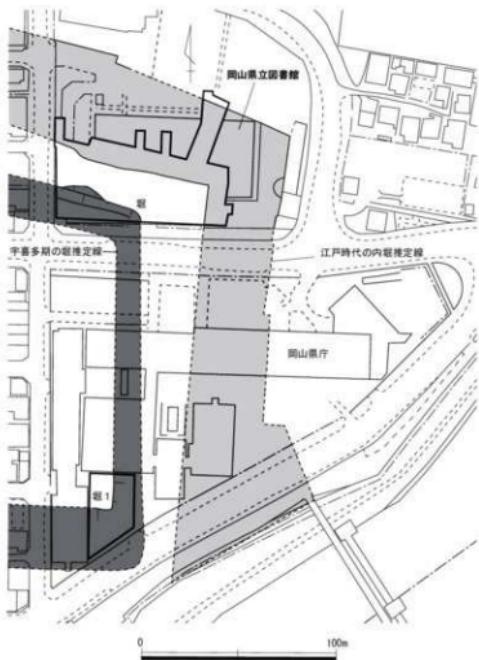
1 堀1の埋没と屋敷地化

今回検出した堀1は、調査地の北側から続き、調査地中央で西へ向かって鍵形に方向を変える。北壁断面（第27図）では、堀の最深部に到達していないことから、幅20m以上、深さ4m前後の大規模な堀と考えられる。堀幅は、南部分で30mを超えることから、さらに広かった可能性が高い。

堀1から北へ約100m離れた地点で実施された県立図書館建設に伴う発掘調査においても、今回発見されたものに統くと見られる堀が検出されている（第51図）。この堀についての調査所見は、北から東に並走する内堀の形状と一致することから、堀の位置を北ないしは東にずらして内堀が掘削された可能性が高く、堀の埋立てと内堀の掘削が連続してなされたとしている。また、その埋立て時期については、宇喜多ないしは小早川段階になされたとして、内堀の完成時期を北辺石垣の特徴から池田利隆期に当てている。さらに、堀の掘削時期については、宇喜多直家期（1573～1582年）にまで遡る可能性を検討しつつも、宇喜多秀家段階に機能していたことを確認したとしている¹⁾。

今回の調査で明らかとなったことは、堀1が西へ向かって向きを変えることから見て、江戸時代の絵図に描かれる内堀が、堀1の形状を継承していないことである。併せてその埋立て時期も、埋土の洪水砂からコビキB痕を残す鳥糞R13が出土していることから、小早川段階まで下る可能性が高まったと言えるだろう。

堀1の機能時期は、今回の調査



第51図 堀の位置関係図（1/2,500）

区から出土した遺物の年代観から見ても宇喜多期とすることに問題はないが、堀1の形状が内堀のそれに継承されていないことについては、説明が必要である。ここで改めて二の丸周辺を俯瞰してみると、図書館調査区の堀と堀1の形状と併せ、堀機能時には二の丸内を「コ」の字形に区画する幅20~30mの堀が掘削されていたことになる。そのため、本来は家臣団の屋敷地として設計されたであろう二の丸に、大幅な面積的制約が課されていたことになる。江戸時代の絵図に描かれる内堀は、本丸と旭川に取り付くように北東に移されていることと今回の調査成果から、堀1の埋立地に町割を施して屋敷地化したことが読み取れる。これにより、屋敷地の面積を増やして二の丸内に居住できる家臣団の増員を促したと見られる。それと同時に、内堀を空堀から水濠化して石垣を築くことで、本丸の軍事面での機能強化を進めたとも言えるだろう。

統いて堀1の掘削時期を検討したい。先述したとおり、堀1の肩口には一連の施設として石積が築かれ、その傾斜角は80°（築石平均高22.5cm）を測る。この堀1と本丸各時期²の郭内の石垣（石組）と段石垣の角度や断面形を比較したのが第52図である。これによると、本丸第I期が81°（同10cm）、同第II期が83°（同30cm）、同第IV期が88°（同36cm）と徐々に傾斜を強め、同時に築石も巨石化している。今回検出した石積は、本丸第I期と第II期の中間的様相を見せ、掘削時期が宇喜多直家在城期まで上がる可能性が出てきたと言える。しかし、本丸中の段の石壁内側石垣3・4（本丸第III期）が推定で80°（同45cm）を測ることから、必ずしも一連の変遷を遂げているとは言えないようである。



第52図 堀1肩口石積と岡山城本丸中の段「石組・石垣」との断面角度比較（1/40）

2 道1と町割の変遷について

ここでは、第3章で明らかにした、溝1が江戸時代を通じて3段階の変遷を遂げるという成果を基に、周辺の土坑や堀1の埋立て時期を交えつつ、近世遺構と町割の変遷について述べていきたい。

近世I期（17世紀初頭）

堀1の埋立て後、石組溝1と石組溝3（古段階）の掘削時期に該当する。道1の機能開始時期に当たり、同時に調査地点が屋敷地化された時期でもある。道1の上面レベルは海拔3.0mである。石組溝北側の石積の傾斜角は86°を測り、裏込石は伴わない³。築石は荒削り材に自然石を交じえ構築され、横口積を主体とする。間詰目石はほとんど用いられず、横目地のとおりが強い。こうした石積の形態

は本丸中の段第IV期⁴前半に近いと判断した。さらに、屋敷地化の際の造成土を切って掘削される土坑12から出土した鉄絵唐津皿の製作年代（1590～1610年）と、この地点の町割は、堀1の埋立てと連動して17世紀初頭に敷かれた可能性が高まる。そして、その主体として考えられるのは、慶長5（1600）年に岡山城へ入城した小早川秀秋（詮）か、監国期の池田利隆のいずれかであり、それは宇喜多期の町割を刷新するためのものであったと思われる。

近世Ⅰ期（17世紀前葉～18世紀代）

石組溝3に溝が伴うようになり（石組溝3新段階）、石組溝1とともに道1を挟んで平行に溝が掘削された時期である。道1の上面レベルは海拔3.3mである。この面が17世紀前葉～18世紀という江戸時代の大半の時期に機能していたようである。18世紀代に比定される土坑がほとんど見当たらないことから考えても、この時期に普請があった後の150年以上、屋敷地は大きな建て替えを経ることなく踏襲されていたものと見られる。時期は先述したとおり、石組溝1に接続する瓦質土管C1・2の時期から17世紀前葉まで遡る。石組溝3はほとんどの部分が1段積みで平均的な築石の大きさも高さ40cm、幅30～40cmに留まる。一方、北側の石組溝1の石積も荒削り材を主体とするが、石積の高さは最大約90cmを測ることと、幅100cmを超える石材が交じることを考慮すると、正面観の差異は明白である。この差異は、時期差ではなく格式の違いを示している可能性が高いと思われる。出土遺物の年代観から見て、この時期の初現期は前池田期（池田忠継、忠雄）に該当すると考える。

近世Ⅲ期（19世紀前半～1860年代）

近世Ⅲ期とする遺構面は、近・現代造成土直下で確認したもので、検出レベルは海拔3.7mである。道1を横切って石組溝2が掘削され、北の屋敷地から石組溝3へ放水する水路の役割を果たしていた。また、多数の廃棄土坑を検出している。出土遺物の年代は、おおむね1860年代を中心に一部明治時代初頭にかかることから、明治2（1869）年の版籍奉還時における屋敷地明け渡しの際に掘削された土坑群と考えて良いであろう。また、特定の土坑に多数の瓦が集中して出土する傾向があり（土坑25、土坑30など）、瓦の廃棄が建物ごとになされた可能性がある⁵。

以上、今回検出した遺構群は堀1の掘削段階を含め、近世を通じて4段階に変遷することが明らかとなった。17世紀初頭に屋敷地化した後は、造成を繰り返しつつ明治初頭まで継続して屋敷地として利用されていた。また、岡山城三之曲輪跡では、宇喜多期から前池田期の遺構面が検出されており、17世紀中葉の生活面が19世紀代まで踏襲されていた⁶。さらに、県立図書館の調査においては、「櫻の馬場」の造成を17世紀第1四半期頃と考えており、承応3（1654）年に発生したと見られる洪水砂に覆われていた⁷。県庁周辺での調査の成果と併せてみても、岡山城下の変遷は地点ごとに異なるようであり、一様ではないようである。

(和田)

3 城下絵図と調査地の関係について

岡山城下を描いた絵図は、池田家文庫（岡山大学附属図書館所蔵）に残されたものが知られる。このうち最古のものは『岡山古図』で、寛永9（1632）年の国替え時に池田光政が家臣の屋敷割に使用したものであり、原図は忠雄が元和元（1615）年に屋敷割を行った絵図とされる。また、以降の主要な城下絵図としては、光政時代前期の慶安年間作成とされる『岡山城下之図』、綱政時代の宝永年間作成の『岡山内曲輪絵図』、寛政年間作成の『岡山古図』、幕末の文久年間作成の『備前岡山地理家宅一枚図』等がある。寛永の『岡山古図』とその後の城下絵図を比較すると、縄張り面での変化はほとんど

認められず、街路もおおむね固定的であったことがわかる。

城下絵図と調査地

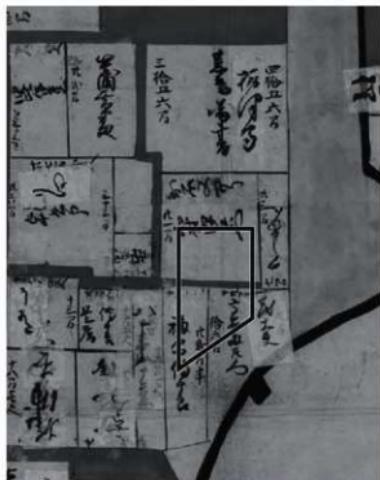
調査地は、岡山城二の丸の南東部に位置する。これは、城下絵図に描かれている東門や素軒屋敷櫓の石垣の一部が現認できることと、県内外の調査（第4図参照）で確認された内堀との位置関係から推定される。このうち、東門跡の通路東側の石壘と素軒屋敷櫓跡の石垣は現在、旭川に沿う堤防石垣に取り込まれている。なお、この堤防石垣は、補修や改造を重ねた痕跡が観察できることから、洪水による破損を幾度も受けたものと思われるが、基本は岡山城当時の石垣と考えられる。

城下絵図と検出遺構

次に、検出遺構の検討から城下絵図との照合を試みたい。調査区の中央で検出した東西方向の道1は、江戸時代を通じて同位置を踏襲しており、この道を挟んだ南北の屋敷地に格式の違いが想定される。さらに、調査区の南西端付近で検出した近・現代の石垣はN-9°-W方向であり（第7図）、幕末期の屋敷地境の位置を踏襲した可能性がある。以上を勘案し、製作年代のわかる絵図について調査範囲を枠線で示したのが第53図である。このうち、寛永の「岡山古図」における調査範囲は、道の北側が「北村源左衛門」の屋敷地の一部となり、南側は「高木惣左衛門」等複数の屋敷地に跨ることとなる。続く宝永の「岡山内曲輪絵図」では、道の北側が家老「土倉市正」の屋敷地の一角となり、南側は複数の敷地となる。この土倉氏の屋敷地は、北は「櫻の馬場」に面する広大な一等地として描かれ、道を挟んだ南北の屋敷地に格式の違いが想定されることと整合する。その後の絵図においても、道の北側は土倉氏の屋敷地として幕末まで継承される一方、南側は「明」や「御小作事方請込」等の書き込みが見られるなど、屋敷地として使用されない期間があったと考えられる。

このような、調査地周辺でも特に道の南側における町割とその変遷の理由と考えられるのが、立地による影響である。調査では、道を境にその北と南側の屋敷地に高低差が認められ、近世Ⅰ期とする町割の形成期では、北側の地面が少なくとも50cm以上高かったと考えられる。また、道の南側に位置する土坑34や39などの埋土に顯著な砂層が見られることから、南側が洪水被害を受けやすい立地に位置していたことも推定される。近接する旭川の堤防石垣において幾度もの積み直しが見られるることは、これを追認するものであろう。

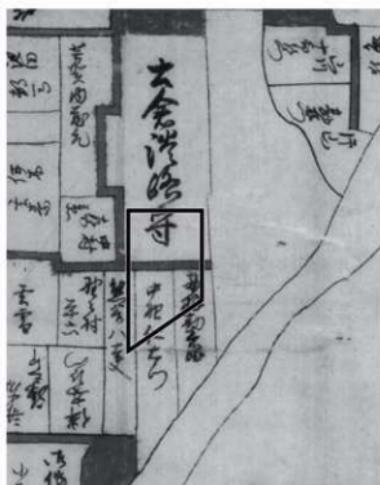
最後に、「備前国図」（巻頭図版2-1）に描かれる岡山城下と検出遺構の関係について触れておきたい。この国図は、利隆の監国期に作られたと考えられ、城下が絵画的に描かれている。また、旭川の東側は、大きな堀で囲まれた懇構えに描かれることから実際とは異なるとされる一方で、西側は、天守閣の描写や本丸を取り巻く三重の内堀と中堀・外堀の形状がほぼ正確に描かれているとされる。この川西の表現で、後の城下図と異なるのが二の丸内屋敷と二の丸を分ける内堀の形狀である。すなわち、国図では、南北一直線の南端で西に向かって直角に折れるよう描かれるのに対し、城下図では、本丸南を区切る内堀の形狀に合わせるかのように2カ所で鋏折れする。県内外の調査で確認した内堀は、城下図の位置と形狀に合致するもので、利隆期に完成したと考えられている。一方、今回検出した堀1の形狀は城下図の内堀に継承されず、部分的な形狀で言えば、国図の内堀南端の形狀に合致する箇所である可能性もある。とすれば国図は、慶長年間後半の利隆時代でも、城下図に描かれる内堀築造以前と考えられる極めて短期間の城下の様子を描いていることになろう。ただし、今回確認した堀の北側の推測される形狀は、県立図書館の調査成果と併せると、国図の内堀と同一にはなりえない。ここでは、国図と調査成果の検討から得られる可能性を指摘するにとどめたい。（高田）



1 「岡山古図」(寛永 9 (1632) 年)



2 「岡山内曲輪絵図」(宝永 5 (1708) 年頃)



3 「岡山古図」(寛政12(1800)年)



4 「備前岡山地理家宅一枚図」(文久 3 (1863) 年)

第53図 調査地周辺の変遷 (各絵図を拡大し、調査範囲を枠線で加筆)

※1~4 岡山大学附属図書館所蔵

第2節 遺物について

今回の調査では、廃棄土坑を中心に幕末期の遺物が大量に出土している。その割合は、全体の約95%を超えるものである。ここでは、最大量の出土遺物があった土坑30の内容を中心に提示し、武家屋敷内での生活の具体相の一端を明らかにしたい。

土坑30の遺物出土状況は、土器・陶磁器・瓦類・土・石・ガラス・骨・金属製品、動物遺体でほぼ隙間なく充填されるもので、瓦類を除く遺物量は、整理箱20箱分に相当する。口縁部と底部のわかる資料818点を数えた土器・陶磁器の組成を第2表に示す。肥前磁器（25%）、関西系陶器ほか（39%）、備前焼（16%）、土器・瓦質土器（17%）、瀬戸磁器、肥前陶器、瀬戸・美濃陶器は1%前後の比率となる。器種では、杯・碗（26%）が多く、次いで土瓶（15%）と顕著であり、煎茶の普及を反映すると考えられる。また擂鉢については、備前焼6点に対し、関西系は14点を数える。土製品は箱庭道具等、石製品では硯や砥石、ガラスと骨製品では笄等の髪結道具、金属製品では笄や毛抜きなどの髪結・化粧道具が見られる。

瓦類の遺構別出土重量を第3表に示す。完形品の出土は僅少で、10点に満たない。土坑25・30・38は、同時に廃棄された可能性が高く、3遺構の丸瓦の復元枚数約394枚に対し、平瓦は約713枚であり、比率は1:1.8となる。

動物遺体では、ニホンジカ、イヌ、ネコ、ネズミ等の哺乳類、カモノ、ワシ・タカ類、マガソ等の鳥類と、マダイ等タイ類を主体とする魚類や貝類が出土した。このうち、魚類には解体痕の確認できるものがあり、貝類にも貝杓子として利用したものも見られる。（高田）

表2 土坑30出土土器・陶磁器組成表

不明磁器

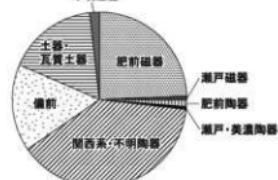


表3 遺構別出土瓦重量

遺構名	丸瓦		平瓦	
	出土重量 (kg)	復元枚数	出土重量 (kg)	復元枚数
土坑25	194.6		614.4	
土坑30	67.6	1.7	344.4	1.3
土坑38	53.0	0.6	204.2	1.1
計	315.2	2.3	1163.0	2.4

*丸瓦完形品重量 (0.8kg / 1個) 平瓦完形品重量 (1.6kg / 1個)

註

- 1 亀山行雄「第5章 考察」「岡山城二の丸跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」175 岡山県教育委員会 2003
- 2 乗岡実は、本丸第Ⅰ期を「直家段階まで含む可能性が十分にある」とし、続く第Ⅱ期は宇喜多秀家期、第Ⅲ期～第Ⅳ期を小早川秀秋期、池田利隆監国期、忠繼期、第V期を池田忠雄期にそれぞれ当てている。
乗岡実a「郭の構造と変遷について」「史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告」岡山市教育委員会 1997
乗岡実b「岡山城本丸の変遷」「史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告」岡山市教育委員会 2001
- 3 中井均「安土城前夜」「織豊城郭」第3号 1996 では裏込めに栗石を伴うものを石垣と規定している。本報告では栗石を伴わない石壁を石積と呼称し、統一している。
- 4 乗岡実「石垣について」「史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告」岡山市教育委員会 1997
- 5 県立図書館の調査区においても、調査者の亀山は同様の傾向を指摘している。注1文献
- 6 「岡山城三之曲輪跡一表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査」岡山市教育委員会 2002
- 7 注1文献

遺構一覧表・遺物観察表・動物遺体同定結果凡例

1 遺構一覧表

- ・「平面形」は検出面での形状を示す。
- ・「断面形」は、上方に広がる壁面に対する底面の形態を示した。
- ・「規模」等の数値は調査により得られた残存値である。

2 遺物観察表

陶磁器・土器

- ・「計測値」について、器高の「()」は残存値を表した。また、白抜きは計測不能を示した。
- ・陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館家田淳一氏と大橋康二氏の教示を「備考」に記載し、文末に※を付している。

瓦

- ・「中心飾」、「唐草」、「文様」、「珠文」の「-」は、存在しない属性を示す。
- ・「色調」は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。

土製品・石製品・木製品・ガラス製品・骨・象牙製品・金属製品

- ・「計測値」、「重量」は、現状の最大値を示した。計測値の「-」は不要な属性を示す。
- ・土製品とガラス製品の「色調」は、陶磁器・土器の観察表に準じる。
- ・石製品の「石材」については、岡山大学鈴木茂之氏の同定による。
- ・骨製品の「備考」は、岡山理科大学富岡直人氏の教示による。
- ・象牙製品の「備考」材質については、鈴木氏の同定による。

3 動物遺体同定結果

- ・「動物遺体属性表」は、岡山理科大学富岡氏の同定結果をもとに編者が作成した。なお、同定点数は606点であるが、土坑26・27・30出土試料と骨製品について掲載している。
- ・「写真1 出土動物遺体」は、富岡氏から撮影データの提供を受け、編者が割り付けた。

1 遺構一覧表

土坑

遺構名	旧遺構名	平面形	規模 (cm)			断面形	底面海拔高 (m)	時期	備考
			長さ	幅	深さ				
土坑1	土坑67	不明	289	186	不明	不明	不明	近世	瓦多く含む
土坑2	土坑54	楕円形	164	100	22	圓形	3.30	近世	
土坑3	土坑53	楕丸方形?	211	200	40	圓形	3.12	近世	
土坑4	土坑59	円形?	100	56	53	U字形	3.07	近世	
土坑5	土坑58	長楕円形?	172	125	32	圓形	3.26	近世	
土坑6	土坑56	円形?	109	81	31	楕形	3.30	近世	
土坑7	土坑57	長椭円形	111	70	5	圓形	3.65	近世	
土坑8	土坑47	楕丸方形?	159	136	34	楕形	3.27	近世	瓦多く含む
土坑9	土坑48	楕丸方形?	267	120	76	逆台形	2.85	近世	
土坑10	土坑49	楕丸方形	318	123	90	逆台形	2.69	近世	炭層あり、瓦多く含む
土坑11	土坑52	不明	33	136	32	楕形	3.28	近世	
土坑12	土坑46	楕丸方形	249	191	90	逆台形	2.65	近世	
土坑13	土坑45	不整形?	350	225	48	楕形	3.10	近世	
土坑14	土坑68	楕円形?	123	72	64	U字形	2.96	近世	
土坑15	土坑62	円形?	125	100	25	逆台形	3.34	近世	
土坑16	土坑44	楕丸方形?	161	90	18	逆台形	3.50	近世	
土坑17	土坑55	円形	95	80	31	逆台形	3.29	近世	
土坑18	土坑60	円形?	100	41	15	圓形	3.31	近世	
土坑19	土坑39	長椭円形	180	105	14	圓形	3.35	近世	
土坑20	土坑35	不定形	230	126	10	圓形	3.45	近世	
土坑21	土坑36	楕丸方形	109	105	19	逆台形	3.49	近世	瓦・繩合む
土坑22	土坑33	長椭円形	295	150	43	楕形	3.02	近世	土器・繩・瓦含む
土坑23	土坑38	円形	68	66	42	U字形	2.98	近世	瓦多く含む
土坑24	土坑6	不整形?	222	204	34	圓形	3.36	近世	土器・貝多く含む
土坑25	土坑9	長椭円形	363	257	96	楕形	2.54	近世	瓦多く含む
土坑26	土坑17	長椭円形?	206	180	58	楕形	2.98	近世	
土坑27	土坑18	楕丸方形	240	237	144	逆台形	2.17	近世	
土坑28	土坑37	楕丸方形	96	83	13	圓形	3.17	近世	
土坑29	土坑32	不整形?	233	255	100	楕形	1.80	近世	瓦・繩土含む
土坑30	土坑7	楕円形	220	168	162	U字形	1.63	近世	炭層あり
土坑31	土坑19	円形	192	161	95	逆台形	2.53	近世	土器・瓦含む
土坑32	土坑29	楕円形	248	200	117	逆台形	2.07	近世	
土坑33	土坑10	楕丸方形	173	113	36	逆台形	2.99	近世	
土坑34	土坑27	楕丸方形	235	205	96	逆台形	2.24	近世	上層は洪沢砂、下層は土器・瓦多く含む
土坑35	土坑23	円形?	115	140	58	U字形	2.70	近世	瓦・繩・多く含む
土坑36	土坑25	楕丸方形	184	135	14	圓形	3.15	近世	
土坑37	土坑24	楕丸・角形	275	330	85	逆台形	2.44	近世	
土坑38	土坑12	不定形	310	196	84	逆台形	2.66	近世	瓦多く含む
土坑39	土坑28	溝状	2360	520	87	逆台形	2.30	近世	上層は洪沢砂、下層は土器・瓦多く含む
土坑40	土坑20	楕丸方形	122	103	14	圓形	3.25	近世	土器・瓦・繩含む
土坑41	土坑21	楕丸方形	214	144	10	圓形	3.30	近世	土器・瓦・繩含む

溝・道

遺構名	旧遺構名	規模 (m)			断面形	流走・走行方向		出土遺物	備考	時期
		検出長	幅	深さ		東	~			
石組溝1	溝3	18.3	0.5	0.5	圓形	東	~	西		17c初頭
石組溝2	溝4	2.8	0.4	0.3	圓形	北	~	南	磁器・陶器	19c
石組溝3	溝5	19.0	0.5	0.3	圓形	東	~	西		17c前葉～19c
溝1	溝69	3.7	0.8	不明	V字形	北	~	南	磁器	近代
溝2	溝65	9.6	1.4	不明	V字形	北	~	南	陶器(繩部)	近代
溝3	溝34	2.5	0.5	0.1	圓形	東	~	西		19c
溝4	溝64	3.5	0.9	0.2	圓形	北東	~	南西	磁器	17c前葉以降
溝5	溝63	2.1	0.9	0.2	圓形	北	~	南		17c前葉以降
溝6	溝26	4.6	0.6	0.1	圓形	北	~	南	特製土管	17c前葉
道1		19.0	4.0			東	~	西	前・中・後段階の変遷が認められる	17c初頭～19c

2 遺物觀察表

陶器・土器

指標番号	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			備考
				口径	底径	高さ	
1	上丸39	縦器	碗	9.7	3.7	5.7	染付、肥前 (18c前半)、コンニ+ク印判付
2	上丸38	縦器	碗	9.8	3.9	4.7	色絵、関西系 (1830~1860) ※
3	上丸30	縦器	湯呑	7.6	3.6	6.6	染付、肥前の可能性高い (1830~1860)、ガラス焼き継ぎ
4	上丸25	縦器	碗	9.0	4.6	5.9	肥前 (1780~1810)、見込み五角花コンニ+ク印文付
5	上丸25	縦器	紅皿	4.5	1.5	1.5	肥前 (18c後半~19c初) ※
6	上丸27	縦器	杯	5.8	2.8	2.2	染付、肥前系 (地方窯)、原藩? 18c後半~19c前半) ※
7	上丸30	白磁	碗	8.3	3.4	2.6	焼付 (見付~明治初) ※
8	上丸30	縦器	手ぬ皿	8.8	6.4	1.9	肥前 (有田) 17c末~18c初)、既製錦「大明年賀」
9	上丸30	縦器	碗	13.2	7.7	3.0	染付、肥前 (1810~1860)
10	上丸30	縦器	杯	12.9	5.3	5.5	染付 (有田) 18c前半) ※
11	上丸30	縦器	盃	15.8	8.0	7.7	染付、肥前 (19c前半) ※
12	上丸30	縦器	玲瓏	8.3	—	(3.0)	肥前 (1780~19c初) ※
13	上丸25	縦器	玲瓏	6.6	3.4	5.7	既製錦、瀬戸? 美濃 (18c末~19c前半) ※
14	上丸31	縦器	小皿	1.4	2.5	7.4	肥前 (18c後半~19c前半) ※
15	上丸4	縦器	菴	2.1	3.8	10.2	染付、肥前系 (18c後半~19c初) ※
16	上丸25	青磁	瓶	4.8	5.5	14.2	関西系 (中国地方) 19c) ※
17	上丸12	縦器	碗	5.0	2.5	3.3	中国・景德鎮 (16c第4四半期~17c初) ※
18	丸1	縦器	碗	—	—	(2.4)	中国・景德鎮 (16c末) ※
19	丸1	縦器	碗	12.0	—	(3.0)	中国・瀋陽窯 (16c末) ※
20	丸1	縦器	碗	13.0	—	(3.1)	中国・景德鎮 (16c末~17c初) ※
21	丸1	縦器	碗	11.8	—	(4.3)	中国・景德鎮 (16c末~17c初) ※
22	上丸30	陶器	碗	6.1	2.0	3.5	京系 (18~19c)
23	上丸38	陶器	碗	6.7	2.3	3.7	関西系 (19c)
24	上丸27	陶器	碗	6.8	2.4	3.6	関西系 (18c後半) ※
25	上丸25	陶器	碗	9.2	3.9	5.2	杉形、灰地、信楽
26	上丸27	陶器	碗	9.0	3.6	5.6	関西系 (18c後半) ※
27	上丸25	陶器	碗	9.4	4.0	5.0	関西系 (19c) ※
28	上丸30	陶器	碗	8.0	3.3	3.3	関西系 (18c後半) ※
29	上丸38	陶器	碗	8.4	4.9	7.5	関西系 (19c) ※
30	石頭溝2	陶器	碗	10.0	—	(5.8)	肥前 (内野山窯) 1610~1630) ※
31	上丸9	陶器	碗	10.6	4.8	7.2	甘口付砂口、肥前 (1600~1610) ※
32	(造成1)	陶器	碗	12.2	4.8	7.0	上丸25~26・鶴岡出土、肥前 (17c後半頃、鍋頭、八ヶ口) ※
33	上丸25	陶器	碗	12.8	4.9	6.4	肥前系 (17cか) ※
34	溝2	陶器	碗	13.8	—	(5.1)	鉢底、肥前 (慶長~元和) ※
35	上丸12	陶器	盤	12.0	—	(2.3)	唐津 (1590~1610) ※
36	上丸12	陶器	盤	12.8	4.4	3.9	船上日、唐津 (1590~1610) ※
37	上丸12	陶器	盤	12.7	4.8	4.7	船上日、鉢底、唐津 (1590~1610) ※
38	上丸12	陶器	盤	14.0	—	(1.9)	唐津 (1590~1610) ※
39	上丸12	陶器	盤	14.0	—	1.7	唐津 (1590~1610) ※
40	丸4	陶器	盤	13.0	4.3	3.7	砂口、白輪紋ハク日、伏津 (1610~1640) ※
41	上丸34	陶器	碗	—	—	1.9	外面に金箔貼り
42	上丸26	陶器	碗	21.6	7.2	4.9	京系 (18~19c)
43	上丸26	陶器	盤	31.1	16.0	6.9	京系 (18~19c)
44	上丸27	陶器	盤	33.6	17.4	8.5	京系 (18~19c)
45	溝2	陶器	向付	—	—	(2.3)	破部 (慶長~元和) ※
46	上丸25	陶器	土瓶	8.9	7.3	14.5	豊島玉形、伏鉢
47	上丸30	陶器	湯呑	19.8	5.6	9.2	灰地、関西系 (19c)、唐津「清一」※
48	上丸30	陶器	湯呑	6.6	5.1	5.1	関西系 (19c) ※
49	上丸26	陶器	瓶	—	7.0	(16.5)	肥前系 (18c前半) ※
50	上丸25	陶器	蓑	—	9.4	(21.5)	鉢底、京系
51	上丸26	陶器	火入	7.0	8.6	4.7	京系 (18c初~幕末) ※
52	上丸27	陶器	盤	7.2	2.4	1.8	関西系
53	上丸30	陶器	盤	10.8	3.5	2.1	京系 (18~19c)
54	上丸27	陶器	下皿	12.4	5.5	2.1	信楽
55	上丸25	陶器	甕	27.6	18.4	38.9	黒泥、鉢底、丹波系
56	上丸30	炻器	甕	8.2	4.0	1.0	型押、偏前
57	上丸34	炻器	甕	8.6	5.0	1.4	型押、偏前
58	上丸30	炻器	甕	8.7	5.4	1.2	型押、偏前
59	上丸25	炻器	壺鉢	13.0	12.8	6.6	偏前
60	丸1	炻器	壺鉢	—	14.0	7.8	偏前
61	丸1	炻器	壺鉢	40.8	—	(11.0)	偏前
62	上丸14	炻器	壺鉢	29.8	14.0	13.0	偏前
63	上丸2	炻器	壺鉢	14.8	—	(5.6)	偏前
64	上丸30	炻器	壺鉢	38.6	17	13.4	関西系
65	上丸30	炻器	壺鉢	38.6	17.6	14.7	関西系
66	上丸30	炻器	小型壺鉢	—	3.0	7.2	偏前
67	上丸38	炻器	蓑	2.6	6.8	18.2	布袋、人形柄利
68	丸1	炻器	蓑	—	—	11.6	偏前
69	上丸39	炻器	油瓶	7.3	4.0	1.1	偏前、ヌヌ
70	上丸25	炻器	油瓶	8.4	4.0	1.4	希切、偏前
71	上丸26	炻器	油瓶	9.6	3.8	1.5	希切、偏前
72	上丸25	炻器	下皿	7.2	4.0	0.9	希切、偏前
73	上丸25	炻器	下皿	9.5	3.6	1.2	偏前

測定番号	造営名	種別	器種	計測値 (cm)			備考
				L径	底径	高さ	
74	上丸27	杓器	下皿	9.6	3.6	1.4	偏前
75	上丸25	杓器	下皿	12.4	7.0	1.8	偏前
76	丸1	上部器	皿	9.0	6.0	1.1	スヌ
77	丸1	上部器	皿	9.3	6.8	2.0	スヌ
78	丸1	上部器	皿	11.0	6.7	2.0	大切
79	丸1	上部器	皿	11.0	6.6	1.8	大切、スヌ
80	丸1	上部器	皿	—	8.1	(1.8)	大切
81	上丸27	上部器	皿	6.8	4.2	1.2	
82	丸5	上部器	皿	8.5	5.4	1.8	大切
83	上丸39	上部器	皿	8.9	5.8	1.4	大切、スヌ
84	上丸29	上部器	皿	10.3	5.0	2.0	
85	丸5	上部器	皿	9.1	5.5	1.5	大切
86	上丸10	上部器	皿	9.5	6.5	2.4	板目、焼成後穿孔
87	上丸10	上部器	皿	10.0	6.4	2.0	大切
88	上丸12	上部器	杯	9.8	6.9	2.7	
89	上丸24	上部器	皿	11.8	5.8	2.1	
90	上丸10	上部器	皿	11.6	6.7	2.4	大切
91	上丸24	上部器	皿	13.0	9.3	2.4	大切、スヌ
92	丸30	土器	珊瑚	6.7	4.2	2.4	
93	上丸24	上部器	燒成否盃	7.8	8.0	2.2	
94	上丸24	上部器	燒成否盃	5.4	5.4	8.2	焼印「燒成淨因」
95	上丸24	上部器	燒成否盃	5.5	5.0	9.0	焼印「燒成淨因」
96	丸2	瓦器上器	鍋	26.8	—	(10.2)	
97	丸1	上部器	鍋	33.6	—	(5.4)	
98	丸12	上部器	鍋	31.0	—	3.7	
99	埋置1	瓦器上器	甕	54.6	64.1	(69.0)	表面格子タキ目、大原燒
100	溝2	繩文上器	杯	—	—	(2.1)	
102	丸1	分生上器	甕	—	4.8	2.7	
102	近1	分生上器	甕	—	—	3.7	
103	丸1	埋置器	杯	—	11.4	(1.0)	
104	丸1	埋置器	甕	—	—	2.6	
105	丸1	埴輪	円筒	—	—	7.0	横ハケメド持

軒丸・丸瓦

測定番号	造営名	種別	文様	珠文	計測値 (cm)			色調	備考
					最大長	最大幅	最大厚		
R 1	丸1	軒丸瓦	右三巴	19	3.2	13.5	2.8	灰 (N4/7)	灰 (N4/7)
R 2	上丸25	軒丸瓦	左三巴	12	12.6	12.8	1.8	灰 (N4/7)	灰 (N5/7)
R 3	上丸25	軒丸瓦	左三巴	12	7.0	12.5	2.2	灰色 (7.5Y6/1)	灰色 (3.5Y5/1)
R 4	上丸20	軒丸瓦	右三巴	13	2.7	14.5	2.1	灰 (5Y6/1)	灰 (N5/7)
R 5	上丸39	軒丸瓦	右三巴	15	5.3	14.5	2.0	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)
R 6	丸1	軒丸瓦	左三巴?	5	11.2	8.2	2.6	黒褐 (2.5Y3/1)	灰 (N4/7)
R 7	丸1	軒丸瓦	彌形文?	11	17.4	13.3	2.3	灰 (N4/7)	灰 (N4/7)、コビキ A
R 8	上丸12	軒丸瓦	右三巴?	7	34.0	15.1	2.4	黄灰 (2.5Y4/1)	灰 (7.5Y6/1)、斜穴、コビキ A
R 22	丸1	丸瓦	—	—	23.1	15.7	2.9	褐灰 (10Y8A/1)	褐灰 (10Y8B/2)、コビキ A
R 23	丸1	丸瓦	—	—	21.9	15.1	3.0	褐灰 (10Y8A/1)	褐灰 (10Y8S/1)、コビキ A
R 24	丸1	丸瓦	—	—	19.6	11.9	3.0	黒褐 (2.5Y3/1)	黄灰 (2.5Y4/1)、コビキ A
R 25	丸1	丸瓦	—	—	16.8	15.4	5.4	灰 (N4/7)	白褐 (N3/7)、コビキ A
R 26	丸1	丸瓦	—	—	23.0	15.0	2.1	灰 (7.5Y6/1)	灰 (N4/7)、コビキ A
R 27	丸1	丸瓦	—	—	30.1	35.0	2.4	灰 (N4/7)	灰 (N4/7)、コビキ A
R 28	上丸30	丸瓦	—	—	23.5	13.2	1.8	黄灰 (2.5Y6/1)	灰 (N6/7)、コビキ A
R 29	上丸12	丸瓦	—	—	26.8	14.2	2.2	にぶい黄褐 (10YR7/3)	灰黄 (2.5Y7/2)、細面目、コビキ B
R 30	上丸12	丸瓦	—	—	33.0	16.2	3.5	白褐 (N4/7)	コビキ A

軒平瓦・平瓦

測定番号	造営名	種別	中心窓	唐草	計測値 (cm)			色調	備考
					最大長	最大幅	最大厚		
R 9	上丸39	軒平瓦	三葉	2枚	11.0	17.4	1.5	灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)
R 10	丸1	軒平瓦	不明	4枚	11.8	12.7	2.0	灰 (N5/7)	コビキ A
R 11	丸1	軒平瓦	不明	3枚	27.0	12.5	17.0	白褐 (2.5Y7/2)	灰 (N6/7)、コビキ A
R 12	(重側側溝)	軒平瓦	不詳	不明	31.1	26.2	2.3	白褐 (2.5Y5/2)	灰 (3Y3/1)
R 31	丸1	平瓦	—	—	28.9	23.7	1.7	灰 (N4/7)	灰 (N4/7)
R 32	丸1	平瓦	—	—	30.0	21.8	2.5	灰 (N5/7)	灰 (N5/7)
R 33	丸1	平瓦	—	—	22.4	29.3	1.8	にぶい灰 (2.5Y6/3)	灰黄 (2.5Y6/2)
R 34	上丸30	平瓦	—	—	25.5	22.2	2.2	灰 (N4/7)	灰 (N3/7)、斜穴

その他の瓦

測定番号	造営名	種別	計測値 (cm)			色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
R 13	丸1	鳥糞	25.3	15.5	2.3	白褐 (N3/7)	白褐 (N3/7)、左三巴、珠文17
R 14	上丸39	鳥糞	24.4	16.0	3.7	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)、コビキ A
R 15	上丸3	神込瓦	1.9	8.8	1.9	灰 (10Y5/1)	RC1 (10Y7/1)、左三巴
R 16	上丸25	神込瓦	3.9	11.1	19.0	白褐 (2.5Y4/2)	黄灰 (2.5Y6/2)、左三巴
R 17	丸1	鬼瓦	11.4	13.9	4.9	にぶい灰 (2.5Y6/3)	浅黄 (2.5Y7/3)
R 18	丸1	鬼瓦	15.6	17.2	4.2	オリーブ (2.5G6/5/1)	灰 (5Y5/1)
R 19	丸1	鬼瓦	12.0	13.4	1.9	灰 (5Y5/1)	白褐 (2.5Y7/2)
R 20	丸1	鬼瓦	14.9	13.2	2.9	灰 (7.5Y5/1)	白褐 (2.5Y7/2)
R 21	上丸39	鬼瓦	39.3	49.3	5.9	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)

土製品

開裁番号	唐模名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
C 1	輪裏 1	土器	290	137	—	2653.3	黄灰 (D.5Y6/1)	内面に布目、コビキ B
C 2	輪裏 1	土器	300	146	—	2990.4	暗灰黄 (D.5Y5/2)	内面に布目、コビキ B
C 3	土坑	土器	41	—	10	4.9	明灰褐 (D.5Y6/8)	棒状單孔
C 4	(付)70	土器	39	—	9	2.8	にぶい黄褐 (10YR7/3)	棒状單孔
C 5	土坑39	土器	53	—	10	6.3	明灰褐 (D.5Y6/6)	棒状單孔
C 6	土坑30	角型	56	52	12	48.5	褐色 (10YR4/1)	完形
C 7	土坑 1	円盤	62	—	14	71.0	褐色 (10YR6/1)	完形
C 8	土坑30	人形	20	11	10	1.6	褐色、紫青、彩色	
C 9	土坑30	人形	32	25	15	8.8	にぶい橙 (7.5YR7/3)	褐色
C 10	土坑38	人形	35	22	22	12.9	褐色、棕黃、彩色	
C 11	土坑30	人形	50	26	22	16.9	褐色、紫青、彩色	
C 12	石範3	人形	64	39	20	39.0	浅黄 (2.5Y7/3)	天黑灰、完形
C 13	土坑30	人形頭	37	22	20	16.0	褐色	
C 14	土坑30	僧侶頭	25	23	8	3.3	にぶい橙 (7.5YR7/3)	頭面部のみ
C 15	石範3	輪廻道貝	22	15	14	3.0	褐色、小粒状、彩色	
C 16	土坑30	小蚌殻	29	—	12	3.1	褐色、内面に板、彩色	
C 17	土坑30	輪廻道貝	28	—	12	5.9	褐色、有翼 ?, 彩色	

石製品

開裁番号	唐模名	器種	計測値 (mm)			重量	石材	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
S 1	土坑26	硯	65	47	26	94.4	浅灰岩	
S 2	土坑26	硯	32	34	26	43.6	浅灰岩	
S 3	清 2	硯	62	49	15	49.3	泰山岩	
S 4	土坑34	硯	155	64	17	243.8	粘板岩	
S 5	土坑20	硯	180	77	25	531.1	粘板岩	
S 6	土坑26	硯 (1)	22	—	6	4.5	粘板岩 (か)	
S 7	土坑30	五輪塔	115	130	36	2047.4	珊瑚岩	上部欠損、白費烏石か
S 8	土坑30	印 (1)	180	—	102	3690.0	花崗岩	1/40のみ残存
S 9	清 2	硯	78	45	12	57.6	浅灰岩	
S 10	土坑39	硯 (1)	79	47	13	78.3	浅灰岩	
S 11	土坑1	硯 (1)	120	65	48	519.0	礁灰岩	

木製品

開裁番号	唐模名	器種	計測値 (mm)			本取り	備考
			最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)		
W 1	瓶 1	杯	96	—	35	毎日	内面剥落、外面黒漆、高台真「フ」
W 2	瓶 1	下肢	128	98	62	毎日	進漬下駄

ガラス製品

開裁番号	唐模名	器種	計測値 (mm)			重量	色調	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
G 1	土坑30	斧	50	3	1.7	淡黄色 (5YR8/3)	透明に透け	
G 2	土坑26	斧	55	5	2.2	青灰色彩色 (7.5PB3/24)		
G 3	土坑30	斧	67	10	5.8	淡黄色 (5YR8/3)	透明に透け	
G 4	土坑30	斧	64	8	3.0	灰白色 (5YR8/1)		

骨・象牙製品

開裁番号	唐模名	器種	計測値 (mm)			重量	備考	
			最大長	最大幅	最大厚			
B 1	土坑30	斧	58	5	2	0.7	先端・基部欠損、基部の透かし状の凹陥に10.2mm	
B 2	土坑30	楊枝狀	61	3	2	0.3	完形、加工基部は底の凹道で調整	
B 3	土坑30	斧	29	9	2	0.5	F リル (鉛)による穿孔、歯(刀部)による歯形か?	
B 4	土坑30	刺貝貝	40	3	0.2	上部欠損、断端が底面で溝を付けている		
B 5	(北側)追削下付中(手)中	刷毛	30	84	5	7.8	藤本真・歯(刀部)あり、楊枝形成の歯は細引きか(鋸引きによる)歯の開端に10.8mm	
B 6	土坑34	印	28	34	30	29.8	象牙形、印文「酉」	

金属製品

開裁番号	唐模名	器種	計測値 (mm)			重量	材質	備考
			最大長	最大幅	最大厚			
M 1	土坑25	鉢	23	—	0.9	1.8	銅	寛永通宝 (古)
M 2	土坑25	鉢	25	—	1.1	2.9	銅	寛永通宝 (古)
M 3	土坑34	鉢	25	—	1	2.8	銅	寛永通宝 (古)
M 4	土坑30	鉢	24	—	1	2.5	銅	見水通宝 (新)
M 5	土坑25	鉢	23	—	1.2	3.0	銅	見水通宝 (新)
M 6	土坑25	鉢	23	—	1.2	1.9	銅	見水通宝 (新)
M 7	土坑30	印籠	33	23	10	(9.4)	銅	盃欠失、内容物有り
M 8	土坑30	貞金具	7	6	5	0.9	銅	完形
M 9	土坑39	金具	25	14	5	1.5	銅	把手?
M 10	土坑27	水滴	41	29	15	17.0	銅	完形
M 11	土坑38	切羽	35	19	1	1.1	銅	部欠損
M 12	土坑30	斧	103	4	4	6.5	銅	完形、鉈具付き
M 13	土坑26	禮管	31	11	12	3.6	銅	禮管、完形
M 14	土坑26	禮管	47	13	15	9.7	銅	禮管、完形
M 15	土坑26	禮管	59	5	9	5.8	銅	禮口、完形
M 16	土坑30	金具	88	22	5	8.7	銅	用途不明
M 17	土坑25	毛抜き	71	10	6	8.7	銅	はげ定形
M 18	土坑34	匙	181	25	3	15.4	銅	完形

3 動物遺体同定

動物遺体属性表

整理 No.	番号	遺体名 (種別名)	大分類	小分類	部位名	LRM	部分	備考
1	2	上枝30	哺乳綱					回収番号日2、色normal
2	2	上枝30	哺乳or鳥綱					回収番号日4、色normal
3	3	(骨)頭	哺乳綱	ウシorウマ?				回収番号日5、頭微小で割れあり。色normal
4	4	上枝30	哺乳or鳥綱					回収番号日3、被毛?、色normal
5	5	上枝30	哺乳綱?					回収番号日1。鱗状の文様が見えないため豪牙ではない。
6	6	上枝30	軟体動物門	イカ類	甲羅	M		
8	1	上枝30	哺乳綱	ネズミ	脛骨	R		
8	2	上枝30	哺乳綱	ネズミ	下顎骨	R		
8	3	上枝30	哺乳綱		第1頭椎	M		unfixed
8	4	上枝30	哺乳綱	(小型)	頭椎	M		
8	5	上枝30	鳥綱	カモ科	尺骨	L	distal+dia	マガニクラス
8	6	上枝30	鳥綱	カモ科	尺骨		distal+dia	被毛cm (diaタイプ) 2.0dia
8	7	上枝30	硬骨魚綱	サワラ	尾椎	M	複体	
8	8	上枝30	硬骨魚綱	日不明	前腮部骨	L		
8	9	上枝30	硬骨魚綱	スズキ	腹椎	M	複体	
8	10	上枝30	硬骨魚綱	タイ科	下上顎骨	L		
8	11	上枝30	硬骨魚綱	サワラ	尾椎	M	複体	
8	12	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	尾椎	M	複体、完形	
8	13	上枝30	硬骨魚綱	日不明	腹椎	M		2点
8	14	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	前上顎骨	R		
8	15	上枝30	哺乳綱		日不明	頭頂骨	R	
8	16	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	尾椎	M		5点
8	17	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	方骨	L		
8	18	上枝30	鰐骨		筋骨	R	完形	
9					頭	LR		
13	1	上枝30	哺乳綱	イヌ	筋骨	L	dia	被毛不明、色normal、風化vin、成長度:不明
13	2	上枝30	鳥綱	日不明	尺骨	L	prox+dia	被毛不明、成年型(多孔質)
13	3	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	前腮部骨	L	完形	色normal
13	4	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	前腮部骨	R	Aaタイプ	被毛cmあり、色normal
13	5	上枝30	硬骨魚綱	タイ科	前上顎骨	R		
16	1	上枝30	哺乳綱	ニホンジカ	頭頂骨	R	側面添+骨幹添	成長度:不明、頭蓋なし?、色normal
16	2	上枝30	鳥綱	ワシタカ類?	筋骨	L	prox+dia	成長度:gt(達)、やや多孔質、(骨科ではない)
16	3	上枝30	鳥綱	ワシタカ類?	尺骨	(R)	prox+dia	被毛なし?、成長度:gt、色normal、「ワ科ではない」
16	4	上枝30	鳥綱	ワシタカ類?	尺骨	B	dist+dia	成長度:gt、やや多孔質、(骨科ではない)
16	5	上枝30	鳥綱	画多目	上腕骨	L	完形	被毛:不明、皮長度:gt
16	6	上枝30	硬骨魚綱	マダイ?	前腮部骨	R		被毛:切削Aaタイプあり、成長度:不明、色normal
19	1	上枝30	鳥綱		尺骨	R	骨幹添	ネズミ喰み痕
19	2	上枝30	鳥綱	マガニ	手筋小手骨	L		
19	3	上枝30	鳥綱		第二掌骨	L		
19	4	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	前腮部骨	L		
19	5	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	下上顎骨	R	完形	
19	6	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	舌骨	L		
19	7	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	前腮部骨	R		
19	8	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨	R	完形	
19	9	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	頭骨	L		
19	10	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	腕筋骨	L		
19	11	上枝30	硬骨魚綱	日不明	舌骨	R	完形	
19	12	上枝30	硬骨魚綱	日不明	前腮部骨	L		
19	13	上枝30	硬骨魚綱	日不明	方骨	R		
19	14	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	尾舌骨			
19	15	上枝30	硬骨魚綱					
19	16	上枝30	硬骨魚綱	マモ	圓骨	R		
19	17	上枝30	鳥綱		木筋骨			
19	18	上枝30			方骨			
19	19	上枝30			L			
20	1	上枝30	哺乳綱	ニホンジカ	足脊骨	LR	完形、後位、一部欠損	
20	2	上枝30	哺乳綱	ネコ (幼体)	下顎骨	LR	完形、後位、一部欠損	
20	3	上枝30	鳥綱		圓骨	LR	複位	ワシタカ類ではない
20	4	上枝30	鳥綱		足初小手骨	R		
20	5	上枝30	鳥綱		中手骨	L	dia	成長度:?. 色normal
20	6	上枝30	爬虫綱	カエル目	不明			被毛なし?、色normal
20	7	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	前上顎骨	L	完形	色normal
20	8	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	前腮部骨	R	完形、一部欠	成長度:?. 色normal
20	9	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	前腮部骨	L	完形	被毛:カット削りされた痕跡 (Aaタイプ)
20	10	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	角骨	L	完形	色normal
20	11	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	角骨	R	完形	前接なし?、色normal
20	12	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	前腮部骨	L		
20	13	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	前腮部骨	R		被毛切削 (Aaタイプ)、色normal
20	14	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	腕筋骨	L		
20	15	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	腕筋骨	B	完形、一部欠	@normal
20	16	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	腕筋骨	B	完形、一部欠	色normal
20	17	上枝30	硬骨魚綱	日不明	舌骨	L		
20	18	上枝30	硬骨魚綱	日不明	舌骨	R		
20	19	上枝30	硬骨魚綱	日不明	方骨	L		
20	20	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	圓骨	L		
20	21	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	圓骨	L		
20	22	上枝30	脊椎動物門		部位不明		dia	ネズミ喰み痕
20	23	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	前上顎骨	R		
20	24	上枝30	硬骨魚綱	ナマズ目	腕筋骨	L		

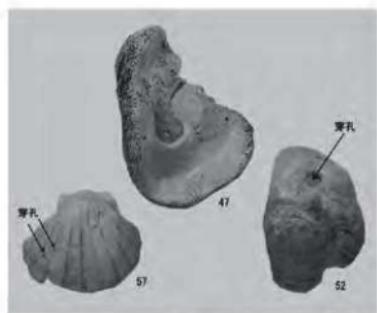
整理 No.	枚番	骨盤名 (解剖名)	大分類	小分類	部位名	LRM	部分	備考
20	25	上枝30	鳥綱		鶴骨	R	prox + dia	
20	26	上枝30	硬骨魚綱	ナマズ目	鰓蓋骨	R		
20	27	上枝30	鳥綱		中足尾節骨	L	尖形	
20	28	上枝30	硬骨魚綱	タコ科	前上加骨	R	尖形	
20	29	上枝30	鳥綱		上輪骨	L	distr + dia	
20	30	上枝30	硬骨魚綱					骨鈎端。一部に全幅サビが付着
20	31	上枝30	硬骨魚綱	マダイ科	鶴骨	L		
20	32	上枝30	硬骨魚綱	タコ科	前上加骨	L		
20	33	上枝30	鳥綱		鶴骨	LR?	dia	ネズミ噛み歯
20	34	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	鶴骨	L		
20	35	上枝30	硬骨魚綱	タコ科	副椎形骨	M		
20	36	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	前上加骨	R		
21	1	上枝30	哺乳綱		内臓骨	LR?	dia	研挫端による切断(肉眼証認)。成長度:?
21	2	上枝30	硬骨魚綱	マダイ	角骨	L		破壊なし?、成長度:?
21	3	上枝30	硬骨魚綱	カレイ科?	翼状骨	R		破壊なし?、@normal
22	1	上枝30	硬骨魚綱		上腹蓋骨	R	開閉+dia	成長度?、@normal
22	2	上枝30	鳥綱		翅膀			翅膀?、成長度?、@normal
25	1	上枝30	小形哺乳綱		前脚帶	LR		
25	1	上枝30	小形哺乳綱		上顎骨	L		
25	1	上枝30	小形哺乳綱		切歯帶	L		
25	2	上枝30	硬骨魚綱	タコ科	上後脚帶			
25	4	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	前懸垂骨	L		
25	5	上枝30	鳥綱	カモ科	鶴骨			
25	6	上枝30						
25	7	上枝30	両性綱		無冠尾	L	骨幹部	
25	8	上枝30	哺乳綱		内臓骨		骨幹部	LR不明
25	9	上枝30						骨鈎端
25	10	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	鶴骨	L		
25	11	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	角骨	R		
25	12	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	前懸垂骨	R		
25	13	上枝30	鳥綱		第二脚帶			
25	14	上枝30	硬骨魚綱	タコ科	前懸垂骨	L		
25	15	上枝30	硬骨魚綱	タコ科	前上加骨	L		
25	16	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	鶴骨	L		
25	17	上枝30	硬骨魚綱	ヌズキ	下上加骨	R		
25	18	上枝30	硬骨魚綱	ヌズキ	鶴骨	R		
25	23	上枝30	硬骨魚綱	マゴチ	下上加骨	L		
25	26	上枝30			前懸垂骨	L		
26	1	上枝30	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	R	尖形	成長度:dpf、@normal、遠位端にイヌの噛み歯
44	1	上枝26	哺乳綱	ラクダ	中足骨	R	完削過位骨・薄欠損	成長度:dpf
44	1	上枝26	哺乳綱	ラクダ	胫骨・地骨	R	尖形・薄欠損	研挫端、成長度:dpf
45	1	上枝27	哺乳綱	シカ	基脚帶	L		
47	1	上枝27	哺乳綱	ブタ科イノシシ	第二上足骨	R	尖形	成長度:dpf、成長度:dpf、@normalと同一個体
47	1	上枝27	哺乳綱	ブタ科イノシシ	第V基脚骨	R	尖形	成長度:dpf、犬の噛み歯?、N=49と同一個体
49	1	上枝27	哺乳綱	ブタ科イノシシ	第VI基脚骨	R	尖形	成長度:dpf、犬の噛み歯?、N=47と同一個体
49	1	上枝27	哺乳綱	ブタ科イノシシ	第VII基脚骨	R	尖形	成長度:dpf、犬の噛み歯?、N=47と同一個体
49	1	上枝27	哺乳綱	ブタ科イノシシ	第VIII基脚骨	R	尖形	成長度:dpf、犬の噛み歯?、N=47と同一個体
49	1	上枝27	哺乳綱	ブタ科イノシシ	第VII基脚骨	R	尖形	成長度:dpf、犬の噛み歯?、N=47と同一個体
49	2	上枝27	哺乳綱	ブタ科イノシシ	鶴骨	R	dia+dist	成長度:dpf、犬の噛み歯?、N=47と同一個体
61	1	上枝30	穿足綱	ヤマサルガラ	翅膀	L		10点
61	2	上枝30	硬骨魚綱	日不知	前懸垂骨			
61	3	上枝30	穿足綱	セマウシ	翅膀	R		11点
61	4	上枝30	穿足綱	ハマグリ	翅膀	L		2点
61	5	上枝30	穿足綱	オニアザリ	翅膀	L		3点
61	6	上枝30	穿足綱	オニアザリ	退体翅膀			
61	7	上枝30	穿足綱	オキシソリ	翅膀	R		
61	8	上枝30	穿足綱	オニアザリ	翅膀	R		
61	9	上枝30	穿足綱	クマサルボウ	翅膀	LR		2点
61	10	上枝30	穿足綱	ハマグリ	翅膀	L		2点
61	11	上枝30	穿足綱	ヤマサルジミ	翅膀	L		11点
61	12	上枝30	穿足綱	ハマグリ	翅膀	R		3点
61	13	上枝30	穿足綱	クマサルボウ	翅膀	R		3点
61	14	上枝30	穿足綱	クマサルボウ	翅膀	R		3点
61	14	上枝30	硬骨魚綱	スマキ科	鰓蓋骨	L		
150	1~55	上枝30	穿足綱	セマウシ	翅膀	L		
150	56~57	上枝30	穿足綱	ハマグリ	翅膀	R		16点
150	58	上枝30	穿足綱	ヤマサルジミ	翅膀	R		
150	59	上枝30	穿足綱	クマサルボウ	翅膀	R		6点
150	60	上枝30	穿足綱	クマサルボウ	翅膀	L		4点
150	61	上枝30	腹足綱	ヤギ				
150	62	上枝30	硬骨魚綱	日不知	物骨翅膀			
150	63	上枝30	穿足綱	ハマグリ	退体翅膀			7点
150	64	上枝30	穿足綱	チカラセヒンマグリ	退体翅膀			雌頭なし
150	65	上枝30	穿足綱	オニアザリ	退体翅膀			
150	66	上枝30	穿足綱	アヒニ	退体翅膀			
150	67	上枝30	穿足綱	シジミ科	翅膀	L		2点
150	68	上枝30	穿足綱	ハマグリ	翅膀	L		4点
150	69	上枝30	穿足綱	ハマグリ	翅膀			4点
150	70~100	上枝30	穿足綱	ヤマサルジミ	翅膀	R		
150	101	上枝30	穿足綱	ヤマサルジミ	翅膀	R		
150	102~116	上枝30	穿足綱	ヤマサルジミ	翅膀	R		
150	117~118	上枝30	穿足綱	ヤマサルジミ	翅膀	R		
150	119	上枝30	穿足綱	ヤマサルジミ	翅膀	R		



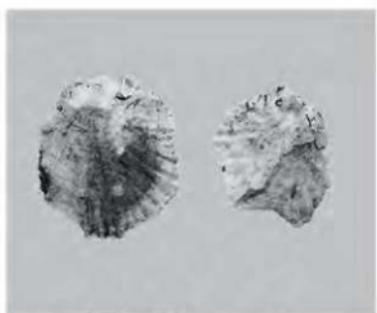
腹足綱 (1/3)



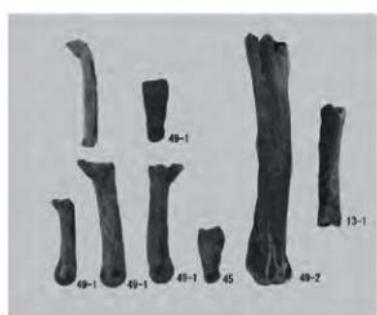
腹足綱+斧足綱 (1/3)



斧足綱 (1/3)



斧足綱 (イタボガキ) (1/2)



哺乳綱 (1/3)



哺乳綱 (1/5)

写真1 出土動物遺体



1 近代の道路側溝
(西から)



2 調査区北半全景
(南西から)



3 調査区南半全景
(北から)

図版 2



1 石組溝 1・3
(南西から)



2 石組溝 1
(南西から)



3 石組溝 1
(北西から)



1 石組溝 1・暗渠 1
(北から)



2 石組溝 2
(北から)



3 石組溝 3・柱穴列 4
(西から)

図版 4



1 道1断面
(北東から)



2 土坑25
(北から)



3 土坑25断面
(北から)



1 土坑 30
(北から)



2 土坑 30 断面
(南から)



3 溝 4・5
(西から)

図版 6



1 堀1
(北西から)



2 堀1 石積裏込断面
(南から)



3 堀1 断面
(南東から)



1 国産・輸入磁器



2 国産磁器ガラス焼き継ぎの鉢

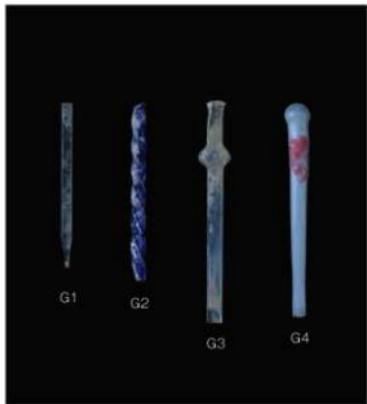


3 国産陶器 1

図版 8



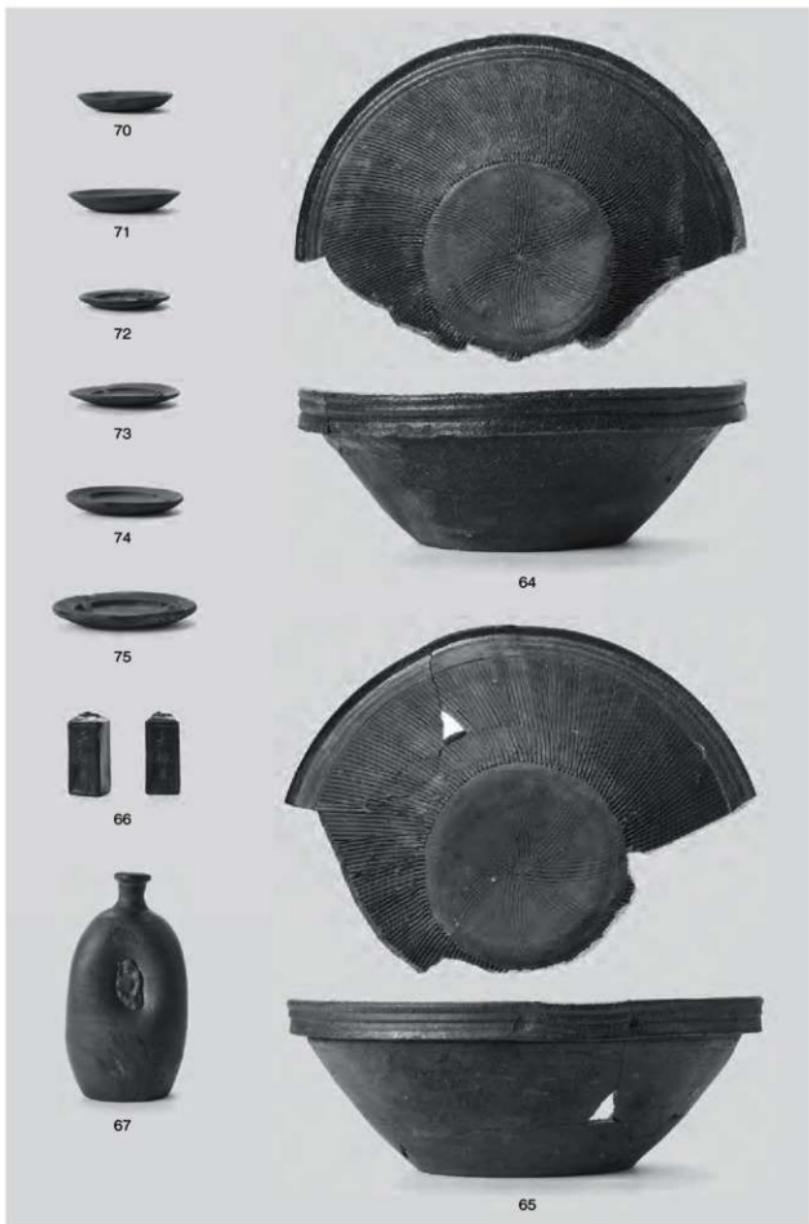
1 国産陶器 2



2 ガラス製品



3 土製品 1

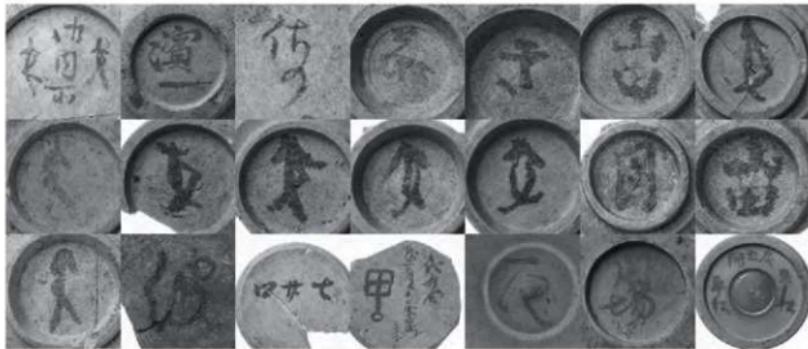


炻器

図版 10



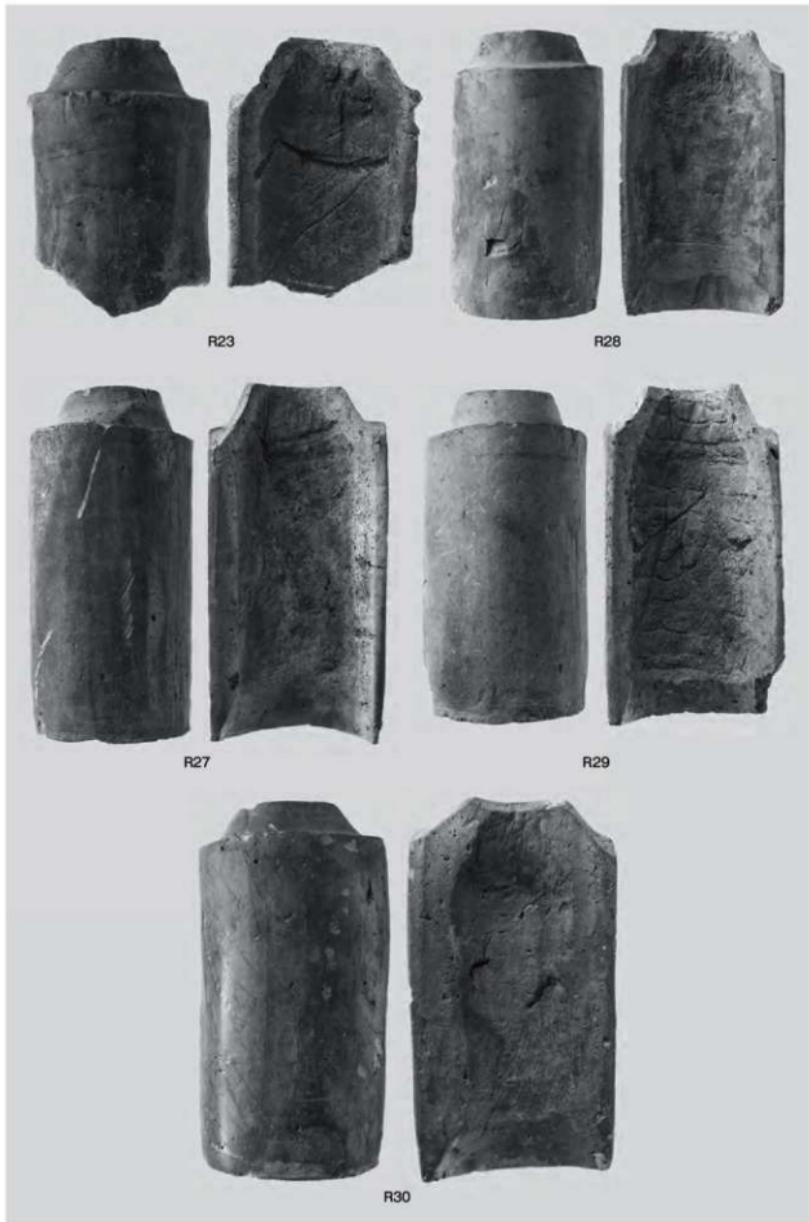
1 土器



2 国産陶器墨書



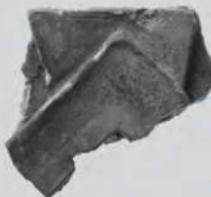
図版 12





R21

図版 14



R18



R17



R20



R19



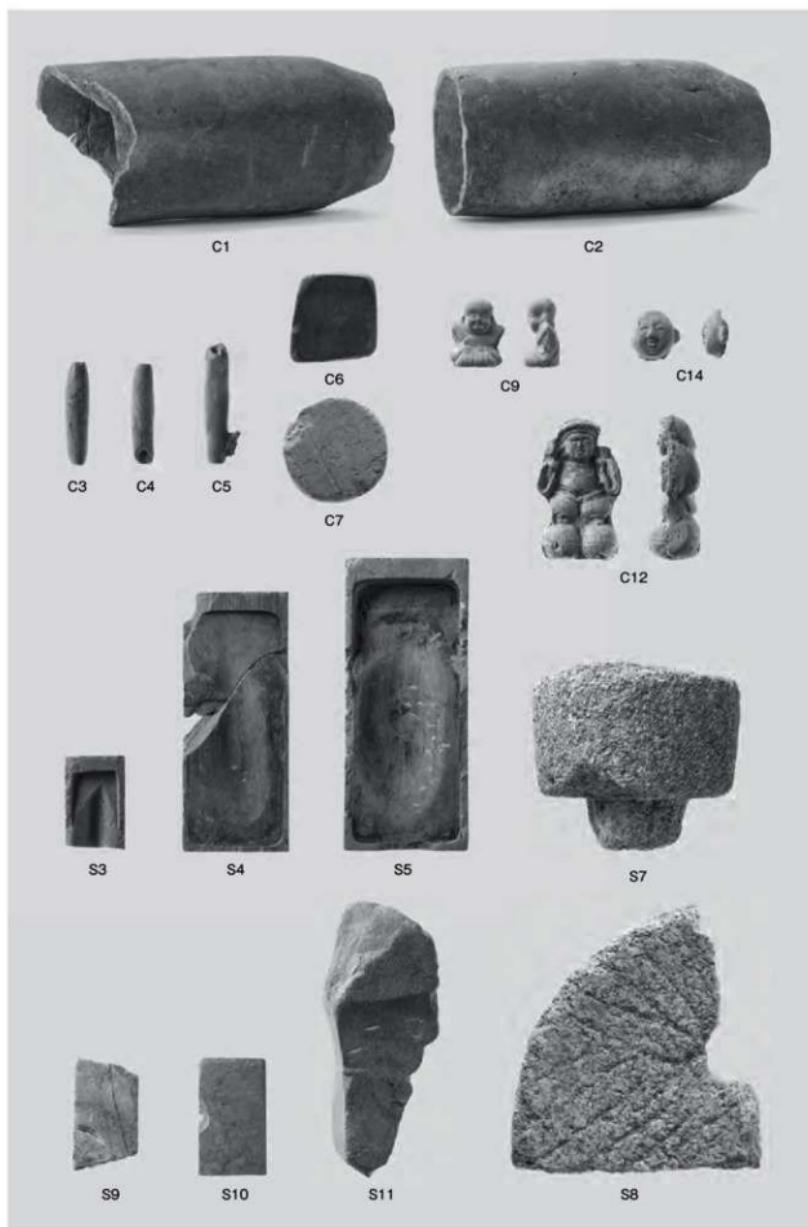
R32



R34



瓦 4



土製品2・石製品

図版 16



骨・象牙製品・金属製品・木製品

報告書抄録

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 245

岡山城二の丸跡

警察本部庁舎整備事業に伴う発掘調査

平成30年3月16日 印刷

平成30年3月16日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花房1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2

